機動戦士ガンダム　オリジナル小説

歴史の狭間に～失われた記録

序章
第零章　紹介
第一話　実戦
第二話　赤い閃光
第三話　ブラック・スター
第四話　黒い竜巻
第五話　血に染まるジャブロー
第六話　宇宙へ
第七話　ジオンの子悪魔
第八話　ソロモン攻略戦
第九話　キマイラ隊
第十話　遊撃
第十一話　運命

・　序章

　人類が、宇宙に住むようになってから、すでに半世紀が過ぎていた。人々は、スペース・コロニーと呼ばれる人工の大地で、子を産み、育て、そして死んでいった。
　時に、宇宙世紀００７９・１・３　この日、ジオン公国は連邦軍に宣戦布告し、ジオン独立戦争が切って落とされた。わずか一週間の戦闘で人口のおよそ半分を死にいたらせ、人類は、自らの行為に恐怖した。
　９・１８　ガンダムと、ザクとの戦闘により、それまでの膠着状態に動きが見られた。
　宇宙世紀００８０・１・１までの一年間の戦争では、多くの民間人や、兵士達が死んでいった。

・　紹介

ブラック・スター
　IQ１９０の軍略面での大天才。初陣においては大尉。わずか１９歳にして大佐へと昇進。仇名は『黒い竜巻』。キシリア曰く軍略はジオンでも有数のものであろうとのこと。沈着冷静、無表情。趣味は読書。その能力は低いが NTでもある。また、先祖はかの有名な伊達政宗であるとのこと。

タカノブ・イシガヤ
　幼少時よりキシリアの元で暮らし、暗殺技術を仕込まれる。もっぱら工作活動に従事。これにより『ジオンの子悪魔』の仇名を持つ。１７歳で初陣し、ブリティッシュ作戦でのキシリアの派遣した毒ガス注入部隊の一部を任される。小柄で謎な人物。特技は MS改造と暗殺。限りなくその能力は低いが、 NTである。クリスタル・ピース（CP）社、社長。

　ドメス・ロウゾ
　ブラック・スターの同級生。7.0以上の視力を持ち、それを生かしての超遠距離射撃は正確無比。温厚・誠実。中国系の血を引いているとのこと。趣味は火器のコレクション。

　ドレン・フルーレ
　ジオン外人部隊に所属していたときにジン艦長に引き抜かれブラックたちと出会う。百戦錬磨の猛将。ガサツだが親切。ただし女好き。アメリカ系？

　ライ・クラウン。
　ブラック・スターの同級生。元はパイロット候補生であったが、ブラックの艦長就任と同時に副艦長となる。堅実な守りと攻めの高い采配と軍略を持つ。容姿端麗で誠実。イギリス貴族を先祖に持つ。

　ミキ・ナカサト
　MS、士官候補生として開戦後徴兵される。イシガヤと同い年。遠近ともにかなりの腕を持つ闘将。白兵戦においての采配は非常に高い。明朗活発。ただし、イシガヤをからかう癖がある。

　カスミ・イセサキ
　MS、士官候補生として開戦後徴兵される。イシガヤと同い年。ドメスには劣るが、遠距離射撃はなかなかのもの。控えめながら意志は強い。趣味は美術。

　ミネルバ・バイブル
　士官候補生として開戦後徴兵される。イシガヤと同い年。イシガヤの副官を務める。

・　実戦

　１０月２０日、シズオカ・シティー。
　「因果なものだ。戦争は嫌いではないが、まさか生まれ故郷で出陣することになろうとは・・・。父さん、母さん、そして先祖の方たちよ、願わくはわが前途をお守りください。」
　彼は墓石に菊の花を手向ける。最後に刻まれた日付は１月３日である。あの忌まわしいコロニー落としの日である。墓は荒れ放題になってはいるが、どうやら手入れをする時間はないようだ。
　「おや、軍人さんとは珍しい。」
　「住職様ですか？」
　「いかにも。しかし、他人を殺しておいて身内の菩提を弔う。殊勝な心がけですな。」
　厭味のようだ。
　「お褒めの言葉、ありがとうございます。ところで経文をひとついただけませんか？ついでにこの墓にひとつ名前を加えていただきたい。・・・・想月照闇とでもお願いします。」
　「そうしても極楽にはいけまい。」
　「住めば都。地獄もまた楽しいところでございましょう。」
　そういって差し出された経文をもらう。
　「少佐、お時間です。お急ぎください。」
　「了解した。時間を割いてもらってすまなかった。ガウへ向かおう。では御住職、おげんきで。」

　「しかし、このガウはなかなかの装備だな。キシリア様には感謝すると伝えておいてくれ。」
　「了解しました少佐。」
　「ハロルド、故あって俺は少尉として行動する。この歳で少佐というのは誤解を生む。部下と同じ階級になるが、まだ何とか説明しやすい。」
　「わかりました。」
　「見送りご苦労だった。ジャブローのタキ少将によろしく伝えておいてくれ。」
　彼はそういい残し一人ガウの艦橋に向かう。
　「諸君、先の艦長は、ほかの実戦部隊を指揮するためこの艦を離れられたので、これより私が代わって貴君らの指揮を執る。よろしく。」
　突然現れた彼に、ブリッジは少しざわめく。何故なら、彼があまりに若かったからだ。背も低くどう見ても二十歳を越しているようには見えない。
　「失礼ですが、今日着任予定のタカノブ・イシガヤ少尉でありますか？」
　「そうだ。君は、ミネルバ君だね。以後よろしく頼む。」
　緑色のショートカットの女性に答える。
　「ですが・・・。」
　「不安を感じるのも無理はないな。私は君よりも背は低いし、艦長にしては若すぎる。」
　「えっ、そっ、そういうつもりでは・・・。」
　図星であったようだ。
　「気にすることはない、顔に出ている。」
　そして続ける。
　「１８だ。まぁ、俺が若すぎるから心配なのはわかるが、指揮能力には問題はない。年寄りが必ず強いとは限らんだろう。コンピューターのデータ上では小規模艦隊指揮能力はＡ

級。ＭＳ戦指揮能力はＢ級。これでも士官学校は出ている。それに、地球降下作戦、ブリティッシュ作戦にも参加、ルウム戦役では、結構戦果もあげた。」
　皆が少し驚く。
　「本当ですか！？」
　「冗談は言っても、着任そうそう嘘はつかない。実戦経験は下手な指揮官より多い。安心しろ。」
　「わかりました。」
　そういわれれば納得するしかない。現に彼の肩を見ると、戦艦撃墜章が二つついている。並みの指揮官には到底ついていない代物だ。
　「忘れてたが、この艦は練習任務を変更し実戦を行うことになる。学徒動員で召集したばかりでなく戦場に送るのは、非常に不本意ではあるが、以後死なない程度にがんばってくれ。」
　「艦長、そういうことは一番初めに言ってください！」
　「悪い悪い。今後は気をつけるよ、ミネルバ君。」
ミネルバは、少し気まずそうにする。なぜなら、士官候補生という立場で士官に文句を言ってしまったからだ。他の誰もが、どうなるのかと心配する。前の艦長の場合、このような事が起きると、良くて謹慎処分、悪ければその場で懲罰が加えられたのだ。だが、彼の場合はそうではなかったらしい。
　「これから俺達は、運命共同体だ。言いたいことは遠慮なく言ってくれ。」
　イシガヤは、そう言うと話題を変えた。
　「では、すまんが自己紹介でもしてくれ。」
　「はい、私は、士官候補生リーダーのミネルバ・バイブル准尉です。」
　「私は、士官およびモビルスーツパイロット候補生のカスミ・イセサキ准尉です。」
　「同じく、ミキ・ナカサト准尉。」
　「俺は、砲撃手候補生のフライト・スカイ上等兵です。」
　「索敵手のぉ、レイチェル・フレイム軍曹ですぅ。」
　　・・・・・・・・・・。
　そして、ブリッジにいた者がすべて自己紹介を終えた。
　「ありがとう。しかし、思っていた以上に若者が多いな。この艦の約九割が、訓練生じゃないか。これで実戦投入とは・・・つらいな。少将も、もう少し考えてくれないと困る。適性が高い分だけは良しと言うところか。だが、女性が多すぎる。」
　最後のほうはつぶやく程度で言った。しかし、近くにいたミネルバには聞こえたらしい。反感をかってしまった。どうも、彼女は、男への対抗意識が強いらしい。
　「いけませんか！女では！」
　「いや、そういう訳ではない。比較的に、女性のほうが仕事が細かいし、・・・・・・個人的には、うれしいかな？」
イシガヤは、あえてこう言う。
　「艦長、下心でもあんですか？」
　そこを、フライトが突っ込む。
　「えっ、いや、単なる冗談だ。まぁ、しかし・・・多少はな。それはともかく、各担当長を決めたいと思う。成績からして、副艦長はミネルバ君に任せる。メインパイロットは、カスミ君と、ミキ君、それに私だ。砲術長は、フライト君。索敵長は、レイチェル君に任せる。他は・・・・・・」
　「艦長、艦長もＭＳで出るのですか。そうすると、指揮がうまくできなくなると思いますが・・・。それに、なんで少尉という階級で艦長ができるのですか？」

　それはもっともな意見だ。元来、艦長をする場合少なくとも大尉であるのが普通である。それなのに、若すぎる少尉が艦長をやるというのは不自然なのだ。気にならないはずがない。それゆえに、イシガヤは答える。
　「カスミ君、それはだな、・・・まあ、俺がキシリア少将と知り合いだからだろうな。だが、別にそんなことは気にしなくていい。軍令にさえ従えば、ザビ家の悪口を言ってもかまわん。たとえば、キシリア様のマスクが変だとか、ギレンの眉毛がなくて人相が悪いだとかな。ちなみにキシリア様のマスクには理由があって、キシリア様は血のにおいがお嫌いなためマスクをされておられるのだ。まあ、指揮はＭＳのレーダーと通信機能力をＵＰさせてあるから問題ない。」
　イシガヤの、ザビ家に対するいいように、少し驚くものが多いが、皆、前の艦長よりも話のわかる艦長だと思う。そして、少尉が艦長をやる理由にも納得したようだ。だが、本当の理由は、それだけではない。本当の階級は少佐なのだ。それゆえに艦長ができる。また、一ヶ月前まではキシリア少将の下で技術少佐もやっており、主にＭＳの開発を行っていた。しかし、実際に戦場に出てこそ良いＭＳができると思い、この部隊に来たのである。その際、技術士官ではまずかった為、急遽宇宙突撃軍の少佐にしたのである。もともと、ザビ家と深くかかわっていた家柄のためとその能力のために、幼くして父母を失った際キシリア少将の小姓として拾われ、若くしてジオンの重要人物となっている。
　「まあ、明日ここを出るから基地にある荷物を片付けとけよ。今日は解散な！」
　「えっ！どこへ行くの。」
　ナカサト准尉が質問をする。だが、同い年であるせいか、すでに上官と部下という関係を完全に忘れているような言動だ。
　「あぁ、すまん。目的地は、第１１５基地経由にて、オデッサへ行く。その後、キシリア少将の指示を仰ぎ、南米にいくことになると思う。そのつもりでいてくれ。あと・・・、敬語を使えとは言わないが、俺が艦長だってことを忘れんなよ。指揮し辛くなって、死ぬのは、お前らなんだかんな。んじゃ、お休み。」
　　・・・・・・・・・・・・・
　翌朝。
　「総員、配置につけ！三十分後に発進する。」
　「了解しました。各員配置についてください。三十分後に発進です。艦長、操舵は誰にさせますか？」
　「キースにさせろ。サクラ、ＭＳ対はカスミ、ミキ、シオンをスタンバイさせて置け。離着陸時が一番的敵に狙われる。」
　「ですが基地内ですよ。」
　「基地に侵入者がいないとも限らない。常に最大の注意を払うことが重要だ。」
　「了解しました。」
　「レイチェル、索敵準備整いましたぁ。」
　「全方位索敵開始。油断はするな。」
　「キース到着しました。」
　「補助エンジン始動準備。完了後微速前進。」
　「了解。」
　「艦長、基地より通信入ります。」
　「イシガヤ少尉、貴君らの健闘を祈る。御武運を。」
　「ありがとうございます大尉。大尉のほうも御武運を。それではごきげんよう。」
　「通信きりました。」
　「補助エンジン始動。微速前進開始。」

「メインエンジンに点火。発進五秒前。四、三、二、一、発進！」
「了解、発進します。」
操舵手のキースが、少しこわばった声で答える。まだ、実技は少ししかやったことがなく不慣れなのだ。これは、ジオンが少しずつ不利になってきていることを意味している。何故なら、このような年端もいかない経験不足の兵を実戦に投入するということは、圧倒的な人手不足を意味しているのだ。
「キース、そんなに緊張しなくても良い。何とでもなるさ。肩の力を抜かないと疲れてしまうからな。」
ガウは、轟音を立てて第１１５基地にゆっくりと飛行を始めた。

「総員に告ぐ。各班長は、ブリッジに集合せよ。砲撃訓練と飛行訓練を始める。フタミ中尉と、キリシマ中尉も上がってきてくれ。」
数分後、皆が集まる。
「とりあえず、官姓名を名乗れ。」
「士官候補生リーダー、ミネルバ・バイブル准尉です。」
「索敵手候補生班長のぉ、レイチェル・フレイム軍曹ですぅ。」
「砲撃手候補生、フライト・スカイ上等兵。」
「整備士長及び、機関長のランス軍曹です。」
「通信候補生班長の、サクラ一等兵です。」
「衛生班班長のキサラギ少尉です。」
「操舵候補生班長キース・マックスウェル軍曹。」
「ミホ・フタミ、サヤ・キリシマ両中尉ただいま到着しました。」
全員が名乗り終える
「すまない、人の名と顔を覚えるのが苦手でな。ところで、実戦経験者は何人いる？手を挙げてくれ。ちなみに激戦区でな。」
二人だけが手を挙げる。やはり、元訓練艦だっただけあって激戦区経験者は少ない。仕方ないことではあっても、やはりこれだけで、残りの新米をうまくまとめるのは大変だろう。
「ありがとう、とりあえず、キサラギ少尉と、フタミ中尉だけでも激戦をくぐり抜けていてくれてよかった。医者と索敵、通信には困らんからな。」
「それで、どういう？」
「ミネルバ、ちょうどいい。君の指揮ぶりを見てみたい。あと、この艦のレベルもな。リモコン機が一機だけあるから、模擬弾でそれを落としてもらおう。幸い、模擬弾は、この前の基地でたくさんもらったからな。リモコン機は、俺が動かす。ランス頼むぞ。」
・・・・・・三十分後
「艦長ぉ、準備が整いましたぁ。」
そう言ったレイチェルの方を見る。ミニに改造されたスカートの中から見える太ももに目が止まる。ちょうど下着が見えそうだ。だが、急いで目をそむける。
「・・・では、これより訓練を始める。心してかかるように。」
・・・・・・・・・・
「正面距離４０００、識別不明の戦闘機を捕捉しましたぁ。その数一ぃ。こちらへ向かってきますぅ。」
「総員、戦闘配置。ＭＳ隊発進準備。対空機銃用意。主砲発射準備。捕捉しだい射撃開始。」
ミネルバが号令をかける。しかし、格納庫のイシガヤは、冷静に注意する。

「ミネルバ、識別が不明の場合は確認をとらないといけないぞ。味方機や民間機の場合もある。通信機が壊れている場合もあるから、発行信号を必ず上げろ。それに誰をＭＳで出すかは言ったほうがいい。」
「了解。もし発行信号が壊れていた場合はどうするのです。」
「その場合はかまわん。打ち落とせ。もし味方でもこちらに手落ちはない。」
「了解しました。カスミ、ミキ、シオン准尉は発進して下さい。艦長のＭＳには、ミキ准尉が乗ってください。指揮も任せます。」
それに、ミキ・ナカサト准尉が答える。
「ＯＫ、任せて。ＭＳ隊発進するよ。各機続いて。ミキ准尉行っちゃうよ。」
それに続いて他の機体も発進する。だが、発進直後にリモコン機から、ミサイルが発射される。ミネルバが機銃攻撃を指示するが、機銃はすべて外れる。だが、なんとかカスミ准尉とミキ准尉は回避に成功した。しかし、シオン准尉はうまく回避できず肩部に直撃を受ける。模擬弾なので、攻撃力はないが、揺れはかなりある。空中でバランスを崩すが、シオンは何とか着陸できた。イシガヤは、かなりきわどいところに打ったつもりだったので、少し驚く。見習いパイロットのわりに、腕は確かだったのだ。当たってしまったシオンでさえも、実戦なら小破程度ですんでいるはずだ。今の弾を普通のパイロットが受ければ、半数は、致命傷を受けるような弾だったのだ。
「よくよけたな。凄いじゃないか。本当なら、くたばっていたような弾だったのだぞ。シオンもよく着陸したぞ。継続して、リモコン機を落としてくれ。がんばれよ！無論ミネルバもな。」
そう言うと、リモコンをより速く動かす。そして、カスミ機の後ろに回り込むが、意外と反応が早い。そしてこちらの射撃と同時にカスミ機も攻撃する。イシガヤは、エース級のパイロットだったのに、よけるのが精一杯だった。ただ、最初の弾は、確実にヒットし、ザクの片足が赤く染まる。ミキ機もなかなかのもので、すぐさまカスミ機の背後から攻撃を加える。シオンは、ミキ機の射線からすぐさまよける。
「やるな！」
イシガヤがそう言った直後、ミキのザクは、コクピットにミサイルをくらう。あまりの衝撃にミキは気絶したようだ。
「大丈夫か？」
当たり前だが返事はない。変わりに、両サイドから砲撃が迫る。さすがに回避しきれず、左翼に被弾する。だが、かまわずガウに迫り機銃斉射を艦橋部に与える。・・・・・・。
二時間後。
「よしもう終わろう。全機帰還せよ。」
訓練が終わったときにはすでに、ＭＳ隊は真っ赤に染まっていた。もちろんガウもだ。特にＭＳは、まるで、シャア専用機や、ジョニー専用機のようになっており、元の色がわからないほどだった。
「よーく染まったなあ。かなり傷んだ所もあるようだしな。整備が大変だ。」
ランスと、アキトが愚痴る。それもそのはず、2時間もハードな訓練を行ったのだ。Ａ級消耗品は、取り替えなければならないかもしれない。
「おーい、ランス、どうだ。」
ランスは、すぐに返事をする。まるで、さっきの愚痴がなかったかのようにだ。
「はっ、艦長、大丈夫であります。早急に終わらして見せます。」
「敬語は使わなくていいよ。それよか手伝う。今手が空いてるしな。」
「艦長のお手を煩わすわけには・・・。」
イシガヤは、そんなことはお構いなしに作業を始める。もともと技術屋だけあって、慣

れたものだ。もちろん、ランスやアキトより早い。そしてまた正確である。
　「ランス！すまないけど、グフのWG１１００パーツを持ってきてくれ。」
ザクを整備しているイシガヤが言う。
　「艦長、ザクにグフのパーツは使いませんよ。」
　不思議に思ったランスが問い返す。
　「なぁに、改造するのさ。このパーツにこれをつけると、エンジン出力が一時的に１５％増しにする事ができるんだ。Ｓ型とまでは行かないけど、現地改造としては効果的だぞ。エンジンに負担もなく、行動時間も減んないしな。」
　「そうなんですか。後、気づいたんですが、これ本当にグフですか？外装からして０７とかなり違うんですが。パーツも結構違ってますよ。」
　「あぁ、俺が改造したんだ。試験用で実験部隊のお古をな。だから、０７Ｂとはかなり違うはずだ。」
　「えっ、少尉がですか？普通できませんよこんなの。俺らメカニックにも、こんなことできるのは、そうざらにはいませんよ。技術屋だったんですか。」
　ランスは、もっともな質問をする。だが、イシガヤはなぜか口ごもってから答える。
　「う、す、少しそういうのに興味があってな、趣味で勉強をしていたんだ。後、会社がそういうのをやっていてな。」
　「会社・・？お勤めだったんですか。」
　「いや、親戚だったものの遺産を、俺が大きくしたんだ。ザビ家の力と、この戦争を利用してな。」
　　・・・・・・・・・・・・・・・・
　「艦長ぉ、ミデア輸送機三機とぉ、護衛戦闘機十五機をキャッチしましたぁ。至急ブリッジにきてくださいぃ。急いでくださいねぇ。あとぉ、リーさんも来て下さいねぇ、サクラさんとぉ交代の時間ですよぉ。代わりに私がやっているんですからねぇ。」
　艦内放送で流れるレイチェルの声が聞こえる。あいかわらず間延びした口調だ。だが、そこがまたかわいい。そしてまた、艶やかな声だ。世の男どもはこんな声で、「がんばって」などといわれたら、死に物狂いでがんばってしまうだろう。
・・・・・・
　「レイチェル、敵の展開はどうなっているんだ。ＭＳは全機出れる。今回俺は乗んないからグフには、適性上ミキ君に乗ってもらえ。彼女が一番格闘戦がうまい。一番機、二番機のザクには、カスミ君と、シオン君にでも出てもらおう。マシンガン装備でな。わたしは、持って来たルッグンで出撃しつつ全指揮をとる。ガウはミネルバに任せる。ミネルバにはいい経験になる。」
　「イシガヤ、ルッグン発進する。」
　「第十四独立ＭＳ部隊、全機発進！」
　カスミ機の指示の下、ＭＳ隊は発進する。もちろん、彼女らは、実戦を経験したことがない。それに加え、ミネルバも素人だ。しかも全員とも戦中の人手不足により、繰上げ卒業したものたちだ。完璧な訓練を受けたわけではない。しかしながら、彼女らは優秀であった。キシリアの配慮だろう。
　「全機、俺の突撃後に攻撃を加えろ。ガウは降下し、対空防御を確実にしろ。以後の判断はミネルバに任せる。」
　それだけ言うと、ルッグンは最大戦速を出す。これは、やはりイシガヤが改造してあるが、ほとんど一般機と大差ない。ただ一人で動かせるぐらいだ。
　「一番機より全機へ、ＭＳも出たようだが、前方のルッグンを墜としてから、ＭＳをたたく。」

「馬鹿か、俺はそんなことでやられはせんよ。墜ちるのはお前だ！」
護衛戦闘機ＴＩＮコッドの通信機から聞こえる声の主がそう叫ぶ。もちろんそれは、ルッグンから発せられている。
「ど、どこからの声だ！？。」
謎の声により、連邦兵は明らかに動揺する。声の主は明らかにジオン兵とは思うのだが、普通、いや、普通でなくとも敵が味方の通信回線に侵入するのは無理なのだ。ましてや、たかが戦闘機やガウ程度の艦にそういう装置がついているとは考えづらいのだ。
そして、彼らは動揺のために編隊を崩す。だが、それが命取りであった。ルッグンは、そこへ最大戦速で突っ込み機銃により弾丸をばら撒く。多少弾丸を、無駄にしてしまうのだが、さすがに多勢に無勢ゆえにそうは言ってはいられない。それに、イシガヤの腕がいくらうまいと言っても、自機がルッグン一機で敵がＴＩＮコッド十五機では囲まれてアウトなのだ。
「すまんな・・・。成仏してくれ。」
戦闘が始まってすぐ十機の戦闘機が墜落する。神業といっても良いだろう。残りの機体はガウを狙う。いくら腕のいいパイロットといっても、帰る所がなくなってはどうしようもないからだ。それは、イシガヤにとっても例外ではない。
「ミネルバ！対空防御を確実にな。」
「少尉、ガウよりミデアへ砲撃を開始します。ＭＳ隊も続いて攻撃に入りますので、お戻りください。」
「了解。すぐ戻る。」
そう言うとルッグンはミデア上空にもぐりこむ。そして、先頭機に煙幕弾を投下する。これは、煙幕とともに、強い磁場を発生させて、敵のレーダーを混乱させる。それにより、敵の戦意を喪失させるのが狙いだ。そして、ガウより絶妙なタイミングで砲撃が始まる。また、やや遅れてＭＳ隊が到着した。だが、初陣のため少し戸惑っているようだ。少しぎこちない。
「カスミ君！ＭＳ隊の戦闘パターンはミキ君を前衛に、君とシオンで援護を行え。功をあせるなと他の二人に言っておけ。指揮は任せる。死なないでくれよ。悲しいからな。健闘を祈る。」
彼は、戦闘機体の迎撃に移る。
「ミキさん！右より突入はできない？艦橋だけを狙えば、コンテナを確保できるかも。物資は貴重だわ。それに・・・あまり人を殺したくはないし・・・。」
「そんな事言ったって！このグフ、少し反応が早くて、操縦が難しいのよ！それに、戦争なんだから、人を殺すなっていうのは無理だよ。」
ミデアの砲撃は、かなり薄いのだが、初陣である彼女たちには、激しく感じるようだ。そのせいで、攻撃をためらっているようだ。
「・・・先頭機を・・・ってー！」
フライトが、主砲を放つ。ちょうどＭＳ隊の攻撃からよけたミデアが、主砲の射撃線上に入ったのだ。だが、フライトの攻撃は、ガウの急な回頭によってずれる。だがそれは、運良く最後尾のミデアの左エンジンをかする。そして、それは唯の鉄の塊となって地に落ちていった。だが、コンテナだけは無事だったようだ。
「やった！やりましたよ！」
フライトは大いに喜んだ。
「フライトさん、艦長より伝言です。よくやってくれた。これからも頼む。そして、隊空砲へ回ってくれ。との事です。がんばってね☆」
「わかったぜ！ところでサクラ、デートしないか？」

「ん、考えとくわ、がんばってね。」
艦内のオペレーターに女性が多いのは、こういう兵士たちの士気向上のためである所がおおきい。適当に愛想良くしてればいいのだ。
「ミキ准尉！ＭＳ隊！ミデアの弾幕は薄い。突っ込んでブリッジをつぶせば良い。それに、俺のグフは、装甲が厚い。機銃の直撃なら耐えられるはずだ。恐れるな！カスミ君！いちいち悩むな！戦争やってんだ。死ぬやつが悪くて、生き残るやつが正しい。死ぬやつは悪いやつだから殺せ！死にたくなければ情けはかけるな！」
無茶な理論ではあるが、究極の理論でもある。
「少尉、ブリッジが狙われています。すみませんが、何とかしてください。きゃあ！」
ブリッジ近くに受けたミサイルのせいで、ガウは激しく揺れ、ミネルバは戦闘指揮席から弾かれ、床に叩きつけられた様だ。
「ミネルバ大丈夫か！すぐ行く。」
ルッグンは、最大戦速で連邦軍戦闘機に向かう。そして、その機銃掃射は確実にそのコクピットに直撃していく。
「ああ！もう耐えられない！援護よろしく！私が突っ込むわ。」
「ええ！ミキさんそれは・・・危険ですよ。」
「シオンさん！ミキさんに任せましょう。援護行きます。」
カスミ機の援護射撃は確実にミデアの機銃を牽制する。ベテランパイロットに引けを取らないほどだ。シオンも援護するが、空を切る弾が多い。まあ、これでもパイロット候補生としてはいいほうだ。
「カスミ准尉、右に弾幕はって！ジャンプするわ！」
そう言うと、ミキ機は先頭のミデアめがけてジャンプをする。カスミ機の援護により、対空機銃の攻撃が散漫な為にグフに対して攻撃はなかった。
「えぇい落ちちゃえ！」
ヒート剣が艦橋に刺さったミデアは、空中にて閃光を上げる。その華の爆風にＭＳ隊は吹き飛ばされる。
「きゃあ！」
「うぅん・・・」
「シオン！右へよけろ！くっ・・気づかんか！」
ガウ攻撃空母に取り付いた戦闘機を撃墜したイシガヤはシオンに叫ぶ。ミデアの鋭く大きな破片がシオン機に向かっていたのだ。それを見かけたイシガヤは即機銃を放つ。それは、シオン機の脚部関節にあたって破壊しザクのバランスが崩れ破片から免れた。
「シオン！大丈夫か！お前はここで固定。助けを待て。」
「全機残りの一機を掃討せよ。」
・・・・・・・・・・・・・・・・
「ランス、爆弾はなかったのか？」
イシガヤは、ランスに問い掛ける。
「ええ、大丈夫です。ですが、ＭＳなどのものは解除できませんぜ。」
「ああ、そっちはさっき解除した。ＭＳ以外はほっとけ。ガウに乗せきれない。」
「えっ、艦長？そんな早く・・・。」
ランスが驚くのも無理はない。通常、このような状態のとき、ＭＳには機密保存とＭＳを捕獲され使われないようにするため、下手に動かすと爆発するような機能がついている。それでも、万が一のために爆破させるのだが、それは間に合わなかったようだ。そして、ランスが驚いている理由は、専門家でさえも、１時間はかかる起爆装置解除をわずか十五分程度の間に解除してしまったのだ。

「しかしランス、良いＭＳだな。ドムよりも強いかもしれん。たしか・・・ＲＸ‐７９陸戦型ガンダムといったな。アジア区域に多く配備される機体だ。たしかビーム兵器が搭載されているはずだ。丁重に解体して、戦闘機の格納庫にぶち込んどけ。多少ガウを傷つけてもかまわん。」
「！なぜそれを知っている！」
案内人の捕虜が尋ねる。それもそのはず、ジオンの少尉ぶぜいが、連邦の機密を知っているはずがないのだ。
「・・・企業秘密だ。ランス行くぞ。」
・・・・・・・・・・・・・・・・
「艦長、準備ができました。」
「あぁ、ミネルバありがとな。」
イシガヤは、捕虜の中の一番階級の高いものと話すため、用意した部屋へ向かう。
「やあ、俺がこの艦の艦長だ。唐突で悪いが、この艦に捕虜全員を収容することはできん。お前さんと数人は捕まえとくつもりだが、ここに残るやつをどうするか残りのやつと相談してこい。三日分なら食料をくれてやる。」
「ふん、小僧、一丁前の口を訊く。お前が艦長のはずがないだろう！艦長を出せ！」
捕虜が叫ぶ。船を墜とされた上に、こんな若い者を出されては無理もない。
「俺が艦長だといってんだろ。キシリアの子悪魔といえば、将軍クラスにはわかる。まあ、おまえにはこれでわかるだろう、少佐の階級章と、ジオン勲功大章だ。」
ジオン勲功大章というのは、かなりの功績をあげたものしか持っていない代物だ。イシガヤがもらった経緯は定かではないが、これを持っているということは、十分な身分証明となる。
「そういや、あのルッグンは誰だったんだ？あんな機体で戦闘機を１３機も落としやがった。ああいうやつが部下にほしいものだ。」
捕虜がつぶやく。
「あれは俺だ、部下がほとんど新人で心配だったからな。」

「みんな、良くやってくれた。連邦のガンダムを無傷で手に入れるなんてたいしたもんだ。これからも頼む！これから行く第１１５基地では３日の休みが与えられる。良く休んでくれ。」
皆が敬礼する。そして、
「艦長、俺の戦果見ました？ミデア１戦闘機１撃墜ですぜ！これはもう昇進間違いなしでしょう。」
「うぅむ。まあ考えとこう。しかしお手柄だな。」
「他の者も良くやった、候補生の集まりにしては凄い戦果だ。ちなみに、第１１５基地で候補生は正規兵となる手続きがあるから心して置け。」
・・・・・・・・・・・
「ミネルバ、シャワーに行かない？戦闘後って、気持ち悪いじゃない。なんかこう、まとわりつく感じで。」
「ええ、そうね。行きましょう。ユエも行かない？」
「あぁ、まってよ～ミレーヌさん、ミネルバさん。置いてかないで～。」
このガウのシャワー室は、一度に五人まで使えるようになっている。乗員が多いので、個室タイプのものはつけられないからだ。士官用と、下士官用の２タイプが存在するが、士官は少ないため、専ら下士官用のものばかり使われている。そして、彼女らが向かっているのは下士官用のものだ。

「ランス、シャワー行こうぜ。やっぱ戦闘後は、シャワー行っていっぱいやんないとな。酒残ってるよなぁ？」
「いいねぇ、だけどよフライト、お前未成年だろ。俺は２０だから良いけどよ。」
　「気にすんな、１９も２０もかわりゃしないって。」
　・・・・・・・
　「ミネルバ、艦長のことどう思う？」
　「どうって？」
　「指揮官としてよ。いま、変なこと考えたでしょ？」
　「いいえ、変なことって？」
　「はあ、ミネルバってからかいがいがないわよね。普通赤くなるとかするじゃない。」
　「えっ、ミネルバさんって少尉のこと好きなんですか？」
　「いいえ。どうしたのユエ。」
　十代の女性たちのシャワー姿は妖艶である。そこへ、
　「ランス！早くしろよな！」
　フライトが、勢いよくシャワー室の扉を開けるが、
　「キャァー」
　「なに？」
　「ほえ、フライトさん？」
　同時に三人の声があがる。特にミレーヌの声は、艦内によく響き、イシガヤのところまで聞こえた。
　「キャー、何みてんのよ！すけべー！」
　ミレーヌは、前も隠さず石鹸やら洗面器を投げつけ、それは見事にフライトは直撃する。そして、ランスは異変を察知して、そそくさと立ち去ろうとする。ミネルバは、すぐタオルで体を覆い、ぽかんと見ているユエにタオルをかけた。
　「馬鹿、エッチ、変態、スケベ！！！！」
　「なっ、ミレーヌ！ぐはっ、」
　フライトは、ミレーヌの裸体を見て赤面するが、直後額にいすが直撃し、気絶してしまった。
　「どうした！」
扉越しにイシガヤが叫ぶ。
　・・・・・・・・・・・・・
　１５分後、さっきの事件にかかわったものたちは、ブリッジに集まっていた。
　「艦長！私は、あいつに裸を見られたんですよ！」
　「何？本当か・・・・・」
　「少尉、今何か想像しませんでしたか？」
　「うっ、えっ？なっなにをだ？」
　少し言葉がつっかえる。
　「少尉のエッチ！」
　「ミ、ミレーヌ君！俺だって男だしょうがないだろ！大体フライトが元凶だろ。これからはちゃんと確認しろよな。」
　「少尉、俺ばっかり。ランスにもなんかいって下さい！」
　「なにいってやがる！俺はミレーヌちゃんの裸を拝んでないぜ！てめーはいい思いしたんだてめーだけ怒られてろ！」
　その直後、ランスの顔面にミレーヌのストレートパンチが決まる。医務室直行である。何はともあれ、この事件は無事解決しこれより３日後、第１１５基地が見えてきていた。

・　赤い閃光

「艦長、第１１５基地が見えました。」
「了解。キース、ゆっくり降下しろ。」
・・・・・・・・・・
「君たちには３日の休暇を与える。ゆっくり休めよ。」
「艦長お時間です。」
「分かった。ミネルバ、ご苦労さん。あとはよろしくな。」
イシガヤは着替えてから基地にある通信室に向かう。そこの通信端末では、ジオン本土との交信も可能である。
「お久しぶりです、キシリア少将。お変わりなく。」
「うむ、イシガヤご苦労。連邦のＭＳを捕獲したらしいな。」
「はい、陸戦型ガンダムというやつです。型式は、ＲＸ―７９Ｇです。なかなかいい機体で、ドムよか良いかも知れません。ゲルググの改良に役立つはずなので、データと本体をお送りします。あと、お遊びみたいなもんですが、新型を考えました。「リックドムIII」と名付けましたが、参考にでもしてください。」
「うむ、それでそっちはどうだ。新兵達は。」
「はい、良い人材が多いですね。エースパイロット的なものはいませんが、集団戦法においてはエースパイロット以上に使えるようになるかもしれませんよ。ＮＴ部隊に編成しても良いかも知れません。ただ、彼女たちにＮＴはいませんが・・・。」
ジオンのＮＴ部隊は正確にＮＴを集めているわけではない。実際にはエースパイロットを寄せ集めてその技量に戦果を期待するところが大きい。
「ＮＴの端くれであるお前の言うところによると本当らしいな。これからの戦果に期待しよう。それでお前たちにはオデッサ経由でジャブローに向かってもらおう。」
「なぜジャブローに向かうかお教えください。シャア・アズナブルを幕下にお加えになるそうですが、それに関係するのでしょうか？」
「不服そうだな。」
「シャア・アズナブルについては不審な点が多すぎます。まず、彼の名は偽名です。履歴も改ざんされているようですし、かなり無理をしてドズル中将に取り入ったようです。そこまでしてっ出世をあせる理由がわかりません。そして、彼ほどの能力があってなぜガルマ様をお死なせになってしまったのでしょう。ガルマ様は確かに智将とはいえませんでしたが、大将の器でした。シャアの意見はお聞きになったはずですし、むしろ意見をお求めになったでしょう。それでいてあの結果はおかしすぎます。」
「わかってはいるが、あれは有能だ。ＮＴを集めている今、可能性のあるものは手元におきたい。ともかく、お前はジャブローに向かえばいい。」
「わかりました。止めはしませんが、十分お気をつけください。では、ごきげんよう。」
イシガヤは通信を終えるとガウの格納庫に向かう。回収したガンダムのデータをより正確にし、また、隊のＭＳの修理改造をするためだ。改造をする際にはガンダムの余分なパーツを流用して追加装甲をつくる。重量が増える分は、バーニアを改造し少しでも出力を上げる。もちろん機体に無理を出来るだけさせないようにだ。そして、パイロットの特徴に合わせて機体の反応速度も調整する。早すぎても遅すぎてもパイロットが使いづらいからだ。
「敵襲。２番４番隊は出撃せよ。敵は戦闘機３０、戦闘車両１５、人型２、歩兵多数です。寄航しているガウからも出来るだけ出撃をしてください。敵は北方に戦力の４０パー

セント、東方に５５パーセント、残りの５パーセントは遊撃隊として存在しています。」
　「おい、そこの整備兵！俺の部下のパイロットは帰ってきているか？」
　「はっ、この艦の艦長でありますか？パイロット一名なら先ほどおこしになられました。艦橋の方へ向かいましたが。」
　それを聞くと艦橋へ走る。
　「ナリッジか！出撃だ。お前はガウの防衛にあたれ。他の隊の者と協力してくれ。俺は前線へ向かう。誰か帰ってきたら出撃させろ。隊長は任せる。ザクはフル装備でかまわん。コストは気にするな。くれぐれも死ぬなよ。」
　それを告げると格納庫へ向かう。イシガヤのグフは、すでに発進が可能な状態にされている。いざという時の為にほぼどんなときでもこうしてあるのだ。そしてイシガヤはすばやく計器類に火を灯す。
　「第７開発技術試験部隊、汎用人型兵器開発部、特務少佐出るぞ！」
　そうつぶやくのはまだもとの配置場所の癖が抜けないからだ。幸いなことに音声は外部出力にはなっていなかった。
　外に出たイシガヤは、すぐ近くにいるドダイを見つける。そして部隊が違うものの、それに飛び乗る。もちろんそのドダイのパイロットは通信を入れる。
　「おい！どこのやつだ。とっとと降りろ！俺らはこれから前線へ向かうんだ。」
　「ならいい。俺も連れてってくれ。都合上少尉の軍服を着ているが、俺はキシリア少将直属のＹ・Ｉ少佐だ！いいな。」
　こういわれれば断ることは出来ない。何故なら、この基地の司令が少佐であっても、キシリア直属の少佐とは格が違うのだ。それに、この若さで少佐といえば、ザビ家とつながりがあるとしかいいようがない。そんな者に逆らえば、後々どうされるか分からないのだ。しぶしぶドダイを発進させると、前線へ向かう。もちろん、ＭＳを乗せたドダイは格好の的となるため、砲撃が激しい。６１式戦車とて、砲撃能力は侮れない。実際に、今大戦にてこれに落とされたＭＳもいくつもあるのだ。実際に、イシガヤも、戦争初期の降下作戦にて中破させられている。ゆえに、接近にはよく注意を払っている。
　「少佐殿、砲撃が激しくてこれ以上は近づけません！」
ドダイのパイロットが叫ぶが、イシガヤは気にしない。ルウム戦役においては、これくらい切り抜けられなければ死んでいるのだ。それを聴いて、このパイロットの腕があまりよくないことが分かった。
　「分かった。後一キロ接近してお前は後退しろ。俺は切り込みに行く。」
　その地点に行くと、グフを降下させながら２m四方の黒い物体を落とす。それは、打ち落とされもせずにまっすぐ降下して閃光をあげる。その直後に多くの破片が飛び散り、戦車や歩兵に降り注ぐ。人の体を切り刻み、戦車の装甲を引き裂いた破片は４０m四方に広がっていた。炸裂弾というところだろう、グフには標準装備はされてはいない。
　「許しは乞わん！・・・ドダイのパイロット！こいつはお前の手柄にでもしてくれ。」
　手柄とは、戦車２、歩兵およそ３０の事をさす。大きな戦果というわけではないが、ないよりはいいだろう。彼はそのままＭＳの歩を進める。現在敵の真っ只中にいるため、砲撃は多いが、たいがいは歩兵のマシンガンのため装甲にへこみも出来ない。そのままダッシュして戦車を蹴り飛ばす。射撃が苦手な為の処置だが、結構効果的である。２分で３機の戦車をつぶすのに成功している。それに対しこちらは、シールドが半壊した程度の被害で済んでいる。この頃になると、イシガヤのせいで連邦軍が混乱しているところにジオン機が進入するのも楽になってきたため、北方では掃討戦になりつつある。
　「・・・ん！東・・・」
　イシガヤは、急に頭を引かれる気がして東側へ向かう。現在そこには、戦闘機隊が接近

していて防衛戦力を展開中である。その近辺には、士官用の宿舎や、娯楽施設が点在している。
「赤い戦闘機が突破口を作っているな！セイバーフィッシュの改造機か・・・。」
赤いセイバーフィッシュはすでに戦闘機６、戦車４、ＭＳ１、トーチカ１を撃破している。並みのパイロットではないのは確かだ。通常、戦闘機がＭＳを破壊するなどということはない。対艦ミサイルクラスでなければ、装甲を抜くことは無理だからだ。機銃や、小型ミサイルでは、間接を小破させるのがやっとである。第一、対艦ミサイルも、ミノフスキー粒子下でＭＳに当てることは難しい。誘導が出来ないうえに、ＭＳは素早いからだ。よって、そんなことが出来るのは、トップエースに限られる。
「くそっ！当たれ！」
そうは言うものの、そうそう当たるものではない。グフの７５㎜ハンドガンには散弾は入っていないのだ。第一、イシガヤは射撃が得意ではない。また、セイバーフィッシュのパイロットの回避能力も尋常ではない。まるで、敵の動きを事前に察知しているようなのだ。
「動きが良すぎる。・・・このプレッシャーはＮＴか！連邦のＮＴにこんなとこで遭うとはな。しかも強い力の持ち主だ。」
イシガヤもＮＴの端くれではある。能力こそ低いものの、相手のプレーっシャーぐらいなら感じることができるのだ。
セイバーフィッシュは、グフの射線をよけてから兵舎の方面へ向かう。そこからバギーが走ってくる。女性を４人乗せている。運転席の女性には見覚えがある。カスミ准尉であった。イシガヤは、一瞬見とれながらも急いでバギーの楯となれる位置に移動する。セイバーフィッシュが気づいて向かっていたからだ。
「やらせん！」
イシガヤがグフの速度を最大にした直後、セイバーフィッシュからミサイルが放たれる。そして、それはバギーには当たらず、グフの腹部付近に直撃する。
「ぐッ、ま、間に合ったな。」
左手を抑えながらいう。コクピット付近への直撃だったため、衝撃で壊れた部品が手をかすったのだ。たいした傷ではないのが幸いだ。
「准尉を殺らせるわけには、いかんのだよ！」
一瞬で先ほどまでの呑気そうな顔は、まるで血を求める殺人のごとくに変わる。引きつった忿顔に笑みを浮かべ、敵に照準を合わせる。そして、その直後にマシンガンを一射する。それは、セイバーフィッシュの右翼に掠めた。イシガヤの射撃は非常に正確であったのだが、それさえも直撃を免れたパイロットは凄腕としかいいようがない。明らかに、イシガヤの攻撃を予測していたとしかいいようがない。
「くっ、やられた。やつめ俺に当てるとは・・・。レッド中尉戦線より離脱する。」
赤いセイバーフィッシュのパイロットはこれ以上は危険であると判断し、撤退していった。
「まるで、閃光だな。ぐっ・・・。」
イシガヤは、とたんに激しい頭痛に襲われる。そして徐々にもとの表情に戻っていった。
「うっ、俺はいったい・・・。准尉は無事のようだな・・・。春日応答しろ。」
イシガヤは、状況を確かめるべくガウに通信を入れる。そして、通信にはリーが出た。
「少尉、ご無事で何よりです。しかし、少尉、急いで戻ってください。人型が接近してきます。現在、ナリッジ准尉とリン准尉が防衛網を張ろうとしていますが、人型同士の白兵戦は、シミュレーションがないため対処法が分かりません。」
「了解だ。今に数人着くはずだ。彼女らは全員機銃に着かせろよ。ナリッジたちには射

撃で応戦させとけ。もしも近づいてきたら、ナリッジのほうだけ接近戦にさせろ。リンにはその援護を。あと、自信をもって気合で頑張れと伝えてくれよ。３分で着く。」
　頭が割れるような痛みは治まり、出力限界で春日に向かう。グフは、それに絶えられずキシキシと悲鳴をあげる。だが、それさえも気にせず、先を急ぐ。途中、ミサイルの直撃を受けて、半壊していたコクピット前の装甲が飛んだが、風通しがよくなっただけだ・・・。
　「リン！援護を！俺は死にたかないんだ。お前は右のを！」
　ナリッジが叫びをあげる。だが、リンはなかなか前に出ない。少尉からの命令もあったし、彼女も前に出て死にたくはないのだ。それに、ヒートホークはとっくに撃ち落されて、何処かへ無くしてしまったのだ。出ようにも前に出られない。だが、ナリッジの機体は、確実にいたんでいる。シールドも無くなってしまっている。
　「少尉はまだかよ！若造のジャパニーズが！」
　そう言った瞬間ジムのビームサーベルが不振り下ろされる。そこに、
　「ナリッジ、それは聞き捨てならんな。俺は、若造かもしれんが日本の血には誇りをもっている。侮辱は許さん！」
　ジムの腹からヒート剣を引き抜く。オイルで汚れた剣は、まるで血が付いたようだった。
　「つぎは！」
　そう言った瞬間、ガウの機銃が走る。右と左から直撃を受けたジムは、ただの鉄くずになった。機銃要員でないものの、カスミ准尉とミキ准尉の腕は確からしい。
　「艦長、敵の殲滅を確認しました。帰艦してください。その機体では危険ですよ。」
　「了解だ。だがリ、俺の機体はこんな事では爆発はしない。俺は警護に回る。ナリッジ機を優先して治せ。」
　・・・・・・
　「少尉、ありがとうございました。」
　先ほどのバギーに乗っていたものの代表としてカスミ准尉がやってきた。
　「・・・・・・俺が何かしたのか？」
　「えっ？先ほど私たちをかばって、グフの腹部にミサイルを受けてくれたのでは・・・。」
　「・・・多分そうだな・・・あぁ！それで腹に風穴が開いたのか！」
　イシガヤはそのときの記憶がないらしい。ただ、准尉たちを守ろうとしていたのは覚えている。が、戦闘機を撃退した事までは覚えていない。
　「少尉、失礼ですが、医務室へいったほうがいいのでは？」
　「あぁ、君が言うなら言ってみよう。あと、すまんがコクピットの映像を持ってきといてくれ。ついでに、あまり敬語は使わんでくれ。またな。」
　そう言うと早足に医務室へと向かう。これでも色々忙しいのだ。
　「少尉、どうなさいました？」
　艦医のマリアが言う。
　「いや、記憶喪失かもしれないってな。」
　・・・・・・・
　イシガヤは一時的な記憶喪失と判断されたが、たいした問題は無いといわれたので、急いで仕事に戻る。
　「ランス！グフの整備も急げ！おいそこの整備兵、弾薬が足らないぞ！そこ！そっちのザクはもっと丁寧に扱え！」
　いくらか指示を出すと急いで基地に向かう。整備は、ランスに任せれば安心だと判断したためである。彼もまた、優秀なセンスをもっている。

　「少佐、多少の問題はあったものの助かった。礼を言わせてもらおう。」

「すまないとは思っていますよ、以後は気をつけましょう。」
この基地の司令は、表面上では感謝しているものの、やはりドダイを勝手に使われた事を根に持っているようだ。最前線に連れて行って被弾させたのがまずかったらしい。この場は、イシガヤが謝罪をして解決した。
「ところで、補給物資は十分にいただけるのでしょうか？」
「あぁ、それは先ほどキシリア様からの命令で、春日に優先して補給せよと来たので安心したまえ。整備兵も一番優秀なものを当たらせる。完了は明後日だ。」
それから２日、春日はオデッサへ旅立った。

・　ブラック・スター

「艦長、オデッサ基地が見えました。着陸体勢にはいります。」
「了解した、今行く。」
格納庫の長いすから、イシガヤはまだ眠いと思いつつも起き上がり、上着を着て艦橋に急ぐ。どうやら、ザクの改造をし終わったらすぐに寝てしまったようだ。2時以降の記憶が無い。ともかく艦橋に着く。そこからは、荒野に広がるオデッサ基地が見える。前の戦闘から数日が過ぎ、今日は１１月５日である。今日まで訓練を続けてきたため、春菜乗員の連度も上がってきている。特に、カスミ、ミキ、シオン、フライト、ミネルバ、ランスの６人は急速に連度を高めている。イシガヤとしては、副艦長が優秀である事に感謝している。よく隊を率いて出撃するためである。パイロット能力は、エースとまではいえないものの、やはり、新米よりは場馴れしている。それに、ＭＳなり、ルッグンでの索敵は、彼以外に出来るものがいない。よって、ミネルバの存在は願ったり叶ったりだった。３０分後、ガウは着陸をした。

「イシガヤ少佐、入りますよ。」
ここは、オデッサのとある司令室。そう、マ・クベ少佐の部屋である。部屋には北宋のつぼなどの骨とう品が、数多くある。しかし、イシガヤには、どんな価値があるのか全く分からない。
「久しぶりだな。イシガヤ。貴公がザクを落とされて以来か？」
「ええ、マ・クベ少佐も、こんな辺境任務ご立派です。」
双方とも刺のある言い方である。マ・クベはキシリアにかわいがられているこの若造が気に入らないらしく、イシガヤはイシガヤで政治家肌のこの男が大きな軍事力を持っているのが気に入らない。さらに、イシガヤがフラナガン機関に数ヶ月出入りしていたのも大きな理由だ。マは、近じかフラナガン機関への出資を止めようと提案し、イシガヤは、自分の社からも出資をしようとしている。対立するのも無理は無い。
「ところで、マ・クベ少佐。あなたが今もっている水爆と、連邦のスパイ、あまり当てにするのはよくない。特に水爆は南極条約で禁止されているのですから。」
「ん！何でその事を知っている！キシリア様へも話していない事を！」
そう、この事は重要機密である。そして、これを知っているのは彼の腹心のごくわずかなものだけである。
「私が、特務部隊士官だという事をお忘れですか？それに、連邦の情報を色々引き出す任務にもついていたことはあります。これくらいは朝飯前です。何せ、自軍の方が、ハッキングが簡単ですから。セキュリティが連邦より劣っていますからね。」
マ・クベの目が怪しく光り懐に手を伸ばす。どうやら、抹殺してやろうという魂胆なのだろう。だが、その辺はイシガヤのほうが一枚上手である。
「っく！」
「おっとすみません。手が滑りました。安心してください唯の痺れ薬です。右手が三十分ほどしびれるくらいですよ。」
しかしマ・クベは手元のボタンを押す。武装した兵五人がすぐに押し寄せる。
「座興が過ぎたようだな！イシガヤ！」
「そのようですね。」
隠していたクナイを投げ二人ののどと突き刺してを倒し、毒針でまた二人を殺す。最後の一人は持っていた小太刀で返り血を浴びながら首をかききり、髪を掴んでマ・クベの足

元に投げ捨てる。わずか数秒のうちにおこなわれた所業にマ・クベは絶句する。
「マ・クベ少佐、子悪魔と呼ばれる私を殺すつもりなら、最低十人は用意しませんと。こんな新兵同様な兵五人では子供も殺せませんよ。ククク。」
笑いながら続ける。
「長居も出来ませんし、これは手土産のつぼです。北宋・・・のらしいです。あぁ、これが鑑定証です。あと、換えの制服とシャワーを貸してもらった後、ドム見してもらいます。」
「・・・勝手にしろ。」
・・・格納庫には、ドムが二機並んでいた。
「ガイア大尉、ドムの調子はいかがですか？」
彼は、黒い三連星のリーダーである。もっとも、先日の戦いでマッシュ大尉がガンダムに破壊されており、ニ連星？になってしまったが・・・。
「あぁ、若いの、良好だ。だが、連邦の白いモビルスーツよりも機動性が悪いようだ。重量がな・・・。」
「すみません。次のモビルスーツはその点を改良していますので。ですが、ガンダムは特殊な機体らしいのであんな性能らしいです。ですが、小回りこそ利きませんがドムは高性能機です。特に加速、パワーには自信を持ってください。次期 MSも早急にお届けします。弔い合戦頑張ってください。」
「あぁ、任せろ。ところで若いの、名は？」
「自分はキシリア少将直属のイシガヤ少佐です。では！」
ガイアは、若いのといってしまったことに少し後悔した。子悪魔と言う仇名を思い出したのだ。キシリアに対立して、彼に暗殺された将官のことも知っている。だが、一目見ただけでは、学徒動員の兵にしか見えなかったのだ。無理もない。ともかく、イシガヤは必要な戦闘データを回収するとすぐに帰ってしまった。

・・・・・・９月３日
「大尉、ＭＳ発進準備が出来ました。」
「了解した、ブラック機出る。ドメス、ロイは、私に続け。」
ここはオデッサ、現在連邦が激しい猛攻を加えているところである。そして、昨日赴任してきたばかりのブラック大尉はこの地で初陣をきす。
ガウより降下するザクの隊は、連邦陸戦部隊の上空より攻撃準備をする。雲を抜けたところで攻撃開始だ。ブラックは自由落下というものを感じていた。宇宙では、体験できない感覚だ。だが、彼はその感覚を本の中でしか読んだことは無い。他のものは戸惑いを感じているが、彼はすぐ適応していた。
「ロイ、先行はするな。」
だが、彼は聞かない。いち早く手柄を立てたいようだ。さらに、彼は一度出撃した事があるためそれが無いブラックのいう事は聞きたくは無いらしい。ジオンでは、このような事がしばしばある。独断専行で戦果をあげ、少佐に上り詰めたシャアなどの人物がいるためだ。しかし、実際に戦果を上げた指揮官の命令ならともかく、ブラックは家柄で大尉に任命されているのである。なおさら命令を聞かないのだ。
「各機、シールド展開。」
ドメスとブラックがシールドを展開すると砲撃が始まる。ロイは自信があるのか展開はしない。一度の戦闘を潜り抜けたという驕りだ。それなりに敵の弾丸を回避している。だが、所詮は驕りでしかない。
「うわぁ～。」

閃光をあげ、ひとつの命は消え去った。その花は、一瞬美しくも見える。
「ロイ軍曹！」
ドメス少尉が大声で叫ぶ。戦友の死は、ショックだったらしい。
「ドメス、迷うな。射撃を開始。」
ブラック大尉は気にもとめない。人の命が儚い事を知っている。古来どれほど栄華を極めていようが、一瞬にしてそれが崩壊することが多々あるのだ。本能寺で滅んだ織田信長がそうである。それに、戦場では死人にかまっている暇は無い。何の感傷もわかなかった。
「ブラックさん、砲撃行きます。１５秒後に着地後は、前衛頼みます。」
ドメスは、戦闘機を受け持つ。それよりも射撃が下手なブラックは、戦車を受け持つ。もちろん、下手と入ってもその辺のパイロットとは違う。ドメスは、ライフルの照準をすぐさま合わせる。彼のコクピットの画面は、外の景色をそのまま映している。通常は、パイロットの恐怖心を減らすために、アニメ映像となっているのだが、それでは外の状況が、完璧には把握できないためである。すでにその画面には４機の戦闘機を映していた。それにザクマシンガンを発射する。単発である。一機につき２秒でそれを撃ち落した。すべてコクピットへの直撃である。たとえ防弾ガラスでも、１２０ミリの弾は防げない。降下後、彼は戦車の残骸を見る。３機あるようだ。その全てが、数発の直撃をくらっていた。
「前進する。」
それだけいうと、大尉は陸戦隊に攻撃をかける。戦車２０は有るだろう。砲撃が厳しい。ドメスは防御体制に入る。だが、ブラックは、それを巧妙によけると２４０ミリバズーカを全弾連射する。それらは確実に敵中核に直撃し１０もの戦車を破壊した。撃った弾は５発である。残りを破壊するのもそれほど難しくなかった。
「ドメス、大丈夫か？」
「はい、シールドは完全に破壊されましたが。それよりブラックさんも被弾しているじゃないですか。」
「大した事は無い。機能はほとんど低下していない。」
コンピューターには、１５％の損傷と出たが、構ってはいられない。航空部隊が迫っていたのだ。すでにレーダーに１４機を映している。だが、まだいる事は間違いない。たとえザクでも多数の敵にはかなわない。先ほどの、トロイ戦車とは違うのだ。
「各員、絶対に死ぬなよ！ミネルバ、一時回線を切る。全機俺に続け。」
左翼にグフが見える。カスタム機のようだ。
「そこのグフ、手を貸してくれ。」
「どうした。俺らは前進するが？」
「敵が多い。我々も前進するためそちらの指示に従おう。」
「了解、俺はイシガヤだ。横のはカスミ准尉とミキ准尉だ。得意戦闘法は？」
「私はブラック。後ろはドメスだ。射撃を得意とする。」
「わかった。配置はこうする。独断専行は許さんからな。俺の指揮下にはいった以上死なせはしない。」
ブラックはこの若者を只者ではないと思う。普通のパイロットでは、こうも簡単に、新たな兵を加えた陣を早くに作れないからだ。それに、しっかりと、両機の被弾状況も考慮済みらしい。
「前方にビック・トレーがいるな。戦闘機への牽制はドメス君とカスミ君に任せる。ブラック君は援護を頼む。」
彼は最大戦速で敵中心部へもぐりこむ。それが自殺行為に見えたためにブラックは確実に援護をするが、杞憂だったようだ。グフは敵の攻撃を確実にガードしている。ただ、射撃はほとんど当たっていない。戦艦の前にいる戦車への牽制にしかなっていない。だが、

おとり、かく乱には最適な動きだったために彼の部下は、それで隙を見せたものを確実に無力化している。ブラックもそれに習った。
「イシガヤといったな。君らは実戦経験が多いのか？」
ブラックも無駄な質問だと思う。だが目の前の雑魚が片付いて気が緩んだのだろう。自然と口が軽くなっていた。
「・・・俺は主な戦闘には参加しているから経験はそれなりにある。ただ、戦闘機だったけどな。だが、彼女らはこんな本格的な軍事行動は初めてだ。」
それを聞いて絶句する。ブラックとドメスと大してちがはないではないかと。それでも、彼らは訓練生時には Aランクないし Sランクを取っていたのだ。それなのに彼女たちに劣っている気がする。能力自体はそうは感じないが、結束力が各員の能力を最大限に発揮しているのだろう。敵にはまわしたくないタイプだ。
「それよりやっと艦に攻められるな。ドメスは中距離援護を確実にしてくれ。無理はするな。ほかは敵３００Mくらいに接近して攻撃を。俺は接近してかく乱する。」
彼はドメス少尉の顔色が優れていないのにきづいたらしい。ドメスには実戦の刺激が強すぎたらしい。怯えの色が少しでている。こんな事にも気づき、部隊の統率が取れるのはさすがだ。だが、敵の攻撃をぎりぎりで回避しているもののグフの動きは危なっかしい。指揮能力は一流だが、パイロット適性は二流か三流だろう。
「ブラック！右舷機銃を！」
その言葉にすぐに反応しそれを撃破する。危うくその機銃にドメス機が撃墜されるところであった。だが、
「キャァ！！」
そのとき、カスミ准尉はモニターに機銃の咆哮を捕らえていた。それが直撃すれば、いくらザクとはいえ、大破してしまうだろう。
「やらせん！」
ズガガガ！鋼鉄の物体が引き裂かれる音がスピーカーに響く。
「うっ！い、生きてる？」
准尉は不思議に思う。確かにあの弾筋なら直撃していたはずだ。だが、モニターには、肩に２発ほどかすったとしか表示が出ていない。一応自分の足を確認してみるが、もちろんついているし、身体に異常はない。
「あ、あれ？」
「ぼさっとするな！回避行動しろ！お前を死なせはしない！」
すぐにモニターで確認すると、目の前のグフはシールドと、追加装甲が大破していた。どうやら、彼が助けてくれたらしい。
「貴様！」
その声の後、グフの瞳が怪しく光る。そして、異常とも思えるほどの素早さ敵弾をかいくぐり、ビック・トレーのブリッジに駆け上る。そこで、４回ほどきりつけ、グフの左手の７５㎜マシンガンをばら撒く。それにより、ビック・トレーの主な機能は停止した。同時に、戦闘機も４機撃墜している。
「鬼神か？」
さすがにブラックは驚く。先ほどの動きとは別人だったからだ。
「大尉、今、我がガウが攻撃を受けているとの連絡が入った。すまんが、ここの掃討は任せる。」
そう言い残すと、彼は風のごとく去っていった。
「ブラックさん、いったい彼は何者なんでしょうね。」
ビック・トレーにとどめをさしつつたずねる。

「あぁ、ニュータイプ、そんな言葉を聞いたことがある。」
「なんですか、それ？」
「ジオン・ズム・ダイクンの提唱した、人類の新しい進化形態で、そのものの本質を見極める事が出来るヒトだ。もっとも、戦争では相手の殺気が分かるらしく、また、そのために対処が早いため強いらしい。疑問だがな。」
「・・・難しいですね。それより弾切れです。どうしますか？」
さすがに二時間も戦闘をしていると、無駄弾を撃たないとはいえ弾は切れる。さらに、被弾箇所も増え続けているので装甲の各部分も取り替える必要がある。いくら腕が良くても、よけきれない事もある。特に機銃などでの破損が多い。
「左腕も動かんしな。一時帰還しよう。」
・・・・・・・・・・
「ブラック、よーくやったな！たいした戦果じゃないか。初陣にして、戦車１８、戦闘機１６なんて人間じゃないぜ。ドメスもさすがだったな。いい部下に恵まれてよかったぜ。」
ジン艦長は格納庫まで迎えに来ていた。気のいい艦長だ。ブラックも、彼になら命を預けてもいいと思う。
「艦長、すまん。ロイは死んでしまった。」
「なぁにいいさ。戦争では先走れば死ぬ。そんな奴もよくいた。それに奴は命令を無視したんだ。自業自得だからお前は気にするな。」
「おっ、ブラックも帰艦したのか。初陣てーのはどーだった？」
ドレンだ。彼もまたこの艦に最近配属された兵である。だが、ブラックらと違っててだれである。以前はジオン外人部隊に所属していたのだが、戦地を転戦していたジンに引き抜かれたのである。激戦地で戦っていただけに、戦闘機の操縦ではこのガウのパイロットを凌駕している。戦闘機の撃墜数３８を誇っているのだ。
「あぁ、多少疲れた。それに、片腕をやられてしまった。」
「なーに、初陣じゃあ、それぐらいは損害のうちにはいんねーさ。俺なんか、初陣そうそう愛機を落とされちまったぜ。まぁ、運良く脱出できたけどな。」
「ドレンさんは、殺しても死にそうにないですしね。」
「むっ、ドメスてめー！俺にけんか売る気か！」
「・・・それは遠慮しときますよ。殴り合いじゃ勝てませんよ。」
ドレンは各種の格闘術もマスターしている。圧倒的差で負けるだろう。第一、ドメスは、士官学校の格闘術の授業は赤点すれすれだったのだ。
「手前等やめねーか。戦闘中だぞ。」
ジンが仲裁に入る。
「艦長、戦闘中だろう、ここは私が引き受けよう。ブリッジに戻ってくれ。」
なんにせよ、この日は無事に生き残れる事が出来た。
・・・・・・・・・・
「ミネルバ、お前等も疲れたろ。シャワーでも浴びてこい。まだ朝だが、こんなところでは気持ち悪いだろ。離陸は 2時間後だ。」
現在このオデッサは、連邦に押され気味である。そんなときに、副艦長たちをシャワーに行かせるのは無謀なのだが、多くのヒトを殺すのは気持ちがいいことではない。イシガヤは、以前万単位の民間人を殺す作戦を指揮した事があるのでそれほどではないが、それでもやはり気持ちはよくない。ブリティッシュ作戦、いわゆるコロニー落し作戦である。その、毒ガス注入部隊の２個小隊の指揮官だったのである。あの事は、生涯忘れられるものではない。
「少尉、戦闘機隊が接近中です。もうすぐこの基地に攻撃が届きます。」

「了解。ドップが有ったな、俺はそいつで出る。フライトは機銃座で待機させとけ。」
突破口を開いてくるのは、あの赤いセイバーフィッシュである。その部隊の機体数は１５機である。だが、すでに２個戦隊が壊滅させられている。
「イシガヤ、ドップ発進する。」
ドップはそれにめがけて急上昇する。敵機をすぐに捕捉するとミサイルを放つ。神業である。すぐに三機の敵を撃墜した。
「よくも俺の部隊を！」
赤い機体のパイロットはイシガヤ機に狙いを定めるが・・・当たらない。イシガヤはそれに構わず他の機体を撃破する。７機を撃墜した時点で赤い機体以外は撤退した。それ以後は、二機の壮絶な戦いが繰り広げられている。
「死ね！」
「やらせん！」
双方共に弾を撃ち尽くす。イシガヤの能力は非常に高いのだが、それ以上に相手の回避能力は高く弾が当たらないのだ。そしてまた、相手の方は射撃能力がそれほど高くなくイシガヤに当てられないのだ。だが、弾は無くとも相手をほうっておく事も出来ない。各方共にそれほど危険なのだ。そして、イシガヤは決断する。
「食らえ！」
ドップは、次の瞬間セイバーフィッシュに体当たりをする。それにより安定性を失い両機共に墜落をする。それは瞬間だった。ガウの艦内は騒然とする。あの状態で生きている望みは薄い。ちょうど副艦長が艦橋にいなかったため、砲座にいたフライトが代わりに調査隊を出した。
「ランス！こりゃめちゃくちゃだ。だが、コクピット付近に血は着いちゃいないぜ！」
ランスもセイバーフィッシュを調査するが同じ結果だった。
「だが、あれじゃ生きているはずない。早く遺体をさがせっ！」
そう怒鳴る。しかし、広すぎる荒野でそれを探すのは困難だ。そう思ったランスの肩を誰かがたたく。
「アキト！早くしろ！遊んでる暇ないんだぞ！」
そう手を払いのけた瞬間悲鳴をあげる。
「ランスどうした？」
アキトがたずねる。
「あっ～～～～！化けもんが～～～～！少尉の幽霊が出た～～～～！」
完全にパニック状態だ。
「馬鹿野郎！勝手に殺すんじゃねー！俺は生きてるぜ！」
「イシガヤさん！生きてたんですか！」
アキトが駆け寄り背中をたたく。が、
「ぐあっ！たたくな！肋骨が１、２本ひびいってるだよ。」
確かに顔をしかめている。応急処置をして艦内に戻った。
「少尉、ご無事で何よりです。」
「うむ、ミネルバ。これから俺が艦の指揮を採る。補佐は任せるぞ。それとリー、ナリッジに連絡。MS隊の指揮は任せると言え。艦の援護だけで良い。奴が適任だ。」
「ですが少尉は怪我をなさっているじゃないですか。」
「何、前線じゃあ、こんなのはかすり傷だ。確かに痛てーが、指揮には問題ない。ガウ上昇せよ。」
それに呼応してキースが上昇をかける。
「ナリッジ、シオン、ミキ、発進せよ。カスミ君とリンはそのまま待機。しっかり休ん

でおけよ。基本陣形は D隊形だ。フライトは砲撃準備だ。」
　ガウの上昇により、この空域の戦力はあがりジオン優勢に変わる。だが、全体からみれば些細なものである。
　「艦長ぉ、戦闘機約２０の大部隊がぁ、接近してきますぅ。どうするんですかぁ？」
　劣勢を挽回するために戦力を投入するのは当然だ。特にガウは陸戦隊には脅威である。
　「無論撃破する。ん、まずいな。MS隊はすぐ基地方向に脱出。要は逃げろ！危険な奴が来る。」
　何かを感じたイシガヤの命令により、MS隊は基地へ逃げ出す。ナッリジは渋ったが、ミキ准尉に説得されて下がっていった。
　「少尉、何で逃げるんですか？」
　「何でって、お前等じゃ勝てないんだよ。このガウにはドップが無いし、基地に戻ってドップで出るか、基地の砲火に頼る。」
　「ですが、戦闘機くらいなら何とか。」
　「馬鹿、その油断が命取りなんだ！それに、戦闘機隊の先頭にいる奴はさっきの奴だ。ミキなら何とかやられはしないかもしれないが、ナリッジとシオンは確実に死ぬな。」
　「そんな、ですが逃げるのは・・・。」
　「逃げるんじゃない！戦略的撤退だ。それに、やられるよりか良い。三十六計逃げるに如かずだ！」
　「そんな無茶な。」
　その直後にミサイルが迫る。それは、ブリッジ付近に一発が直撃し、バランスを失わせる。
　「それきた！フライト、主砲用意。撃てって言ったらすぐ撃てよ。全員耐ショック姿勢。ガウは急速降下降下後上昇をかけ、６秒爆撃をかけ基地に戻る。」
　直後、ガウは急激に降下を始める。まるで、墜落のように。というより墜落をしようとしている。
　「艦長！右２番エンジンがやられて舵が取れない！助けて！」
　降下中にそう言ったミレーヌに変わり、イシガヤが舵を取る。艦内が混乱しているため、イシガヤが舵を執るのを不審に思ったものは、今の時点ではいなかった。イシガヤは、艦長であり操舵手ではない。
　「キャァー」
　「うわっ！」
　リーとミレーヌが後ろの方に飛ばされるが、気にする余裕はないは無い。怪我をしても、かすり傷がつく程度だろうからだ。
　「みんな、舌ぁ噛むなよ！」
　その直後、さらに激しくゆれる。
　「少尉ぃ！高度がぁ、高度がぁ！落ちちゃいますぅ！」
　レイチェルが叫ぶが、気にしない。
　「レイチェル！戦車はいるか！」
　「えぇと、陸戦隊が下にいますぅ！死にたくないですぅ！」
　「馬鹿！死なねえよ！フライト、メガ砲放て！地面にだぞ！出来るだけ多くな！」
　すぐにメガ砲が放たれる。それは地面に突き刺さり、砂塵を巻き上げる。そして、ガウが地面に当たろうかというとき、ガウは砂塵の中に消えた。
　「どこいった。砂で見えん。」
　「落ちたんじゃないですか。」
　そんな連邦兵の声は、機銃の音にかき消される。

「助かったぁ。高度８ぃ！」
そう、現在「春菜」は高度８メートルで飛行し、艦底部より機銃攻撃を行っている。すぐに攻撃が出来たのは、ミキ准尉の判断によるところが大きい。
「うぅん」
リーが気がつく。
「何だ？軟らかい。」
彼は、自分が軟らかいものに埋もれている事にきづいた。二つの山？のなかに顔が埋もれている。そして、身体を起こすためそれを押して立ち上がろうとしたが、
「うぅん、あん、何、・・・リ〜〜〜〜！！」
間髪いれずにミレーヌのパンチが飛ぶ。そう、彼はミレーヌの胸の間に顔をうずめていたのだ。
「なにすんのよ！どさくさに紛れて私を押し倒すなんてどういうつもり！」
「何って、あれは不可抗力だ！」
そんな言い合いもすぐに途切れる。ガウが上昇したのだ。
「キャァ！」
「うわ！」
またしても彼等は吹っ飛ぶ。今回は、さっきよりもひどい。
「もう許さないんだから！」
すぐにパンチ 3発、けり１発が見事に決まり、リーはノックダウンした。
「レイチェル、サクラをブリッジへ呼べ。マヤも呼んでリーを医務室へな。それと、リー、ミレーヌ、いまは戦闘中だ。いちゃつくのは後にしろよな！」
「うらやましいんですか、しょ・う・い。何なら今夜ぁ、私がお相手しましょうかぁ。」
「な！何を行ってるんだぁ！そ、それは遠慮しときたくない気がしなくもないが、遠慮しとく。やっぱ、そういうのは好きな奴とじゃないと。最も、好きなやつには欲情はせんがな。」
「酷い、私のことは好きじゃないんですかぁ。」
「えっ、いや、そういう訳ではないんだが。」
「じゃあ、良いじゃないですか？それとも、好きな人がいるんですか？」
「うっ・・・・・・」
「冗談ですよ。顔、真っ赤ですよぉ。可愛いですねぇ。」
「少尉、そんな話をしている場合じゃありません。敵が来てしまいますよ！」
その事に気付いた彼は、基地にガウをつける。見事な着陸だった。
「そういえば、なんで少尉が舵をとっていたんですか？」
「何でって、ミレーヌが助けてっていってたろ？」
「いえ、そうじゃなく、少尉は艦の操舵ができたのですか？と。」
「いや。ただ、戦闘機の操縦は得意だぞ。」
「ということは、艦の操縦は初めて！」
すぐにみんなの顔が青くなる。初心者が、自分たちの命を預かっていたのだ。ミネルバは、以後気をつけようと思った。だが、なんにせよ、助かる事は出来た。

３日目、
「少尉、なかなか終わりませんね。情勢はどのようになられているのですか？」
「あぁ、カスミ君か？敬語をあまり使わんでくれ。なんか気持ちわりーんだ。情勢は、すこぶる悪い。だから、もうちょいで撤退する。」
「しかし、敵前逃亡になりますよ？どうするのですか？」

「問題ない。俺たちは、たまたまこの基地にいただけだ。本来は、ジャブローに行く任務が新しく入ったんだ。それに、俺は、こんなとこで死ぬわけにはいかない。上の命令でな。後、マ・クベに注意する必要がある。」
「マ・クベ少佐に？何でですか？」
「それはまだ言えん。副艦長にも言っといてくれ。」
そういわれて、カスミ准尉が食堂を出て行く。その後ろを見送り、飲んでいたジュースの缶を、ゴミ箱にぶち込む。
「やはり良いな。」

「艦長、春日の離陸準備ができました。どの空域に行きますか？」
「あぁ、南西へ、できる限りの速さで飛べ。パイロットは待機。」
「ですが、それでは戦闘空域を出てしまいますが。」
「あぁ。」
「あぁ。って、そんな簡単に・・・・・・」
もっともな意見だ。敵前逃亡は重罪である。死刑を宣告される場合も十分ありうる。
「どうしても死にたいっていうんなら残っていても良いが、味方のミサイルにやられたくは無いだろ？」
ブリッジの、勘のいいものはそれに気付く。ミサイルでやられるという事は、相当な破壊力を持っているはずである。ということは核ミサイルに間違いない。そしてそれは、南極条約で両軍ともに使用が禁止されているものである。
「まさか、核ですか？」
「ああ。よく気付いたな。そうだ。」
「そうだ。って、そんな当たり前に言わないで下さい！」
「そうおこるな。マ・クベなんか信用するな。あいつは狡賢くて政治にはそれなりに使えるが、戦争には全く向いちゃいない。それに、この基地を守れんとなれば、それだけの指揮官と言う事さ。どうせなら採掘基地を自爆させて使えないようにするとか、マ・クベ自ら討って出て、死華咲かせるくらいしてもらいたいところだが、やつはそんなことはせんだろ。その上、核を使ったとなればキシリアさまの聞こえが悪くなる。あいつもすぐに、厄介払いだな。」
キシリアには、色々悪い噂が立っている。確かに、半分程度は本当の事だ。だが、その程度の事は、どの指揮官でもやっている事だ。そう、あの温厚に見えるレビルでもだ。そして、キシリアの評判を悪くしているもの、それは、部下の独断専行によるところがとても大きい。そんな輩の抹殺。そんな仕事さえ、イシガヤはしていた。その経験から、出た答えがマ・クベの左遷である。
「ですが、マ・クベ少佐に無断で撤退するのは・・・」
「んっ？何で奴に許可を取る必要があるんだ？」
「それは、少尉の上官でしょう？当たり前じゃないですか！」
「だから、そうかっかすんなミネルバ。奴は俺の上官ではない。」
「ですが階級が。」
「ん、まあな。言い忘れてたが、俺たちは２日前に特殊独立遊撃部隊になっている。それに、俺の上官はキシリアさまだけだ。例えギレン閣下の命令でもキシリア様の許可がなければ聞くわけにはいかない。今回は、「できるだけ」マ・クベを手伝えという命令があったんだ。ここでわれらが死ぬことは、キシリア様の望むところではない。むしろ、開戦直後に撤退しても良かったくらいだ。」
「少尉！そういうことは早めに言って下さい！」

「悪かった。あぁ、あと、俺以外はみんなひとつ階級が上がったんだった。訓練兵だったものも、正規兵になったからな。辞令は、目的地で受け取る。良いな。」
全くダメな艦長である。副艦長のミネルバのほうが、よっぽどしっかりしている。
「春日、空域より離脱せよ！少佐に連絡。健闘を祈る。とな。」
「了解。」
それより１時間が経過した。すでに、春日は戦闘空域より離脱している。そして、南米へ舵をとったそんなときに通信が入った。
「艦長、ミサイルはガンダムによって阻止されたようです。オデッサは壊滅。味方のガウが数隻離脱できたようです。それでどうしたら良いか聞いてきていますがどうしますか？」
「うぅむ。難しいな。北ヨーロッパにあるジオン空軍基地にいってもらおう。あそこも危険になってきているが仕方あるまい。サクラ、そう伝えてくれ。」
「ところで少尉、私達の次の任務は？」
「お前たちのはまだ決まっていない。とりあえず１週間ほど休暇がもらえる。俺はジャブローの動向を探って宇宙に上がる予定だ。」
「少尉がどのようにしてジャブローの動向を探るのですか？」
「ん、まぁ色々とな。方法はあるんだ。」
「なんか嘘っぽいな。少尉にできる仕事じゃないんじゃない？」
ミキ少尉だ。
「俺にはあまり階級は関係ないんだ。前も言ったろ。後、方法は教えられないがこれならどうだ。」
そういって、懐からファイルを取り出す。それを見て皆が絶句する。それは、ガンダムの設計資料と、ジオンの新型の開発資料。そして、ジャブローの一部の内部地図だったのだ。
「なっ、なんでこんなものが！少尉って何者ですか！」
「俺は俺だ。それ以上でもそれ以下でもない。こいつはちょっと手を回して手に入れた。これでも、キシリア様には結構買われてんだぜ。」
「少尉って、本当に少尉ですか？」
「もちろんさ。」
すでに外は日が落ち、漆黒の闇が地上を覆っていた。

・　黒い竜巻

「ブラック、災難だったな。」
「うむ。艦長、核に巻き込まれずにすんでよかったな。」
すでにあれから２日がたっている。だが、最短の基地までは連邦に制圧された空域を飛び越えなくてはならない。だがそれも、脅威になるほどのとこでもないのだ。艦内では一息ついているところだ。ＭＳさえも整備用にばらしている。もっとも、全機被弾箇所が多くそうせざるをえなかったのだが。
「ブラックさん、もうじきですね。」
「安心するのはまだ早いな。千里を行くものは九十九里を持って半ばとせよということわざもある。」
「なんですかそれ？」
「日本のことわざで、最後の最後まで気を抜くなと言う事だ。」
「確か、ブラックさんは、名前のわりに純血で日本の血を引いていたんですよね。内輪だけに通じる名があって伊達何とかといったような・・・。」
「伊達黒宗がもうひとつの名だ。」
そんな、たわいも無い話をしているときだった。
「ジン艦長、戦闘機が接近中。機種はセイバーフィッシュ、ティンコッド、計６機です。」
「まずいな。こっちで使えんのはドップ機だけだ。仕方ない、ドレン、ブラック行ってくれ。確かブラックの適性は Aだったな。ドメスは機銃を頼む。ガウはこのまま前進する。」
ガウは逃亡を図るが、それ以上に敵の侵攻は早い。
「ブラック機出る。」
ブラックのドップが発進すると、反対のカタパルトからすぐにドレン機も出る。すぐに迎撃に向かうが、敵の方が加速している分早い。
「しまった！」
ドレンが叫ぶ。予想以上に早い赤い機体が、ドレン機の脇を抜けていってしまったのだ。それは一瞬であった。そして、ドメスの機銃をかいくぐり対艦ミサイルが放たれる。ドメスの射撃適性は Ｓ最高ランクだ。そのために飛び級さえできたのである。それをかいくぐるパイロットは尋常ではない。放たれたミサイル２発中１発が右エンジンに直撃する。被弾状況はさほど悪くもなかったが、エンジンは止まってしまった。降下せざるをえない状況である。残り２基の左エンジンでは飛行は難しい。そして、この機の総舵手の適性は Ｃ普通の腕でしかない。
「ガウ降下せよ！対空砲火はぬかるなよ！残りの敵は。」
「一機です。赤い奴だけです。」
まだ、戦闘開始から２分しかたっていない。そのうちに、ドメスが２機、ドレンが２機、ブラックが１機落としている。この隊の優秀さが分かる。
「ブラック、援護頼む。俺が仕掛ける。」
そういう声が聴こえたが、ブラックの意識はリープしていた。
「懐かしい。」
彼は、赤い機体に「何か」を感じていた。何かはわからない。だが懐かしかった。しかし、すぐに意識を戻し、援護のミサイルを放つ。当たるものではないが、撃たないよりはいい。
「うッ、すまん。左翼をやられた。降下する。」
ドレン機さえ被弾する。ブラックは、この機体に勝つのは難しいと判断し回避行動に移

る。敵の弾さえなくせばいいのだ。
「死ね！」
赤い機体は攻撃の手を緩めない。だが、それを何とか回避する。敵の射撃能力は、それほど高くないために何とかなっている。だが、それには、かなり機体に無理をさせる必要があった。各部が、ギシギシ言っている。
「もつのか？」
「分かりません艦長。援護もできませんし。」
ガウの艦内では、エンジンの応急処置が行われている。援護もできない今、最善の策がこれだった。数時間もしないうちに敵の増援は来るだろうからだ。
「くそ！弾切れか！」
赤い機体は、最後の弾を放ち撤退を掛ける。だが、その弾はブラック機の左エンジンに当たってしまった。ぎりぎりである。
「助かったな。」
二時間後、ガウは前線基地に着陸していた。

「なにっ！パイロットは一人しか回せない！ドップもか。修理はできるだろうな。」
「こっちは連日の戦闘でまともに動ける奴はいないんだ！手前らで勝手に修理しろ！」
「こっちはまだ敵の制海権を抜けなきゃならないんだぞ！」
「そんなことまでかまってやれるか！」
ジンと、基地司令のやり取りは激しいものだった。
「どうしたんですか、艦長。」
「おう、ドメス。ドップもＭＳも補給はできんらしい。修理もな。物資は手に入ったが、修理が出来る者も少ない。」
「なら、私も手伝おう。」
「ん？ブラック、できるのか？」
「大丈夫ですよ艦長。彼は適性 Bです。私も火器の整備なら手伝います。」
「わりィな。ドメス。」
このガウには、新しい任務がはいっている。特殊独立遊撃部隊の「春日」と合流するというものだ。宇宙へ離脱し、遊撃任務につかされるらしい。ともかく、 3時間後には、南米へ向けて飛び立った。

「艦長！また敵です。」
「なに情けねぇ声出してやがる。迎撃だ。急げ！」
「敵は、」
「大尉、敵は、戦闘機空母 2隻です。予測される戦闘機は 20～40です。」
「多いな。こちらの戦闘機は 3機しかなく、海上では MSは使えんと来た。」
勝つ見込みは全く無い。
「どうする、ブラック。」
彼は艦内にいるときは、参謀としても働いている。ＩＱ１９０の作戦立案能力は、それ相応に高い。もちろん、実戦慣れしたジンにはかなうものではないが。
「逃げるのが優先だが、逃げられないのなら、とりあえずビームで長距離攻撃をするしかなかろう。敵よりは射程が長い。操舵手が上手ければ、水しぶきを楯にすることもできるが。」
「あぁ、やって見せろ。砲撃はドメスに任せる。戦闘機が出る前に沈めろ！戦闘機は・・・パイロットがドレンしかいないな。」

「ならば、私も出よう。それと、ライ・クラウン少尉はできるはずだ。」
「ん、そうなのか。良く知っているな。」
「友人だ。」
彼から、こんな事を聞くのは以外である。見たところ、友達とは無縁そうであるからだ。
「ブラックさん、呼びましたか？」
「うむ、すまんが、戦闘機で出撃してほしい。」
「わりぃな。パイロットがいなくて困ってたんだ。」
「艦長、ですがモビルスーツはどうするんですか？」
「海じゃあ使えるもんじゃない。出撃は不可能だ。」
「それでは戦闘力が低すぎませんか？」
「だが、逃げ切れないんだし、仕方ないだろ。強行突破する。」

「皆行くぜ！ 1人 13も落しゃあいいんだ。頑張れよ！」
「ドレン曹長、そんな無理ですよ。」
「気合だ！気合！気合で何とかなる！」
「なんともなりませんよ！」
「ライ、落とされぬよう気をつければいい。ドメスが、敵空母を沈めてくれるだろう。」
たった３機のドップはその 10倍ほどの敵に突撃していく。そして、明らかなはずであった戦局はまず１隻の空母の甲板を長距離射撃で粉砕したのを皮切りに一変する。
「艦長！敵がつよす・・・うわぁ！」
「一機のドップはまるで竜巻。黒煙に包まれた黒い・・・・・・」
「ぐわぁ」
連邦兵は無残にも散っていく。ドメスのビーム砲撃が編隊の中央に直撃した上に、ブラックたちに掃討されているのだ。悲惨である。
「艦長、通信途絶えました。」
「最後のはなんだ？黒い・・・竜巻だと・・・。」
ここ戦い以後、連邦の一部に黒い竜巻と言う仇名が広がっていった。

「大尉、ガウに４機取り付きました。撃墜してください。」
機銃の兵は、普通である。ドメスやブラックほどの射撃能力は無いのだ。戦闘機を落とせないのも無理は無い。もともと、ガウの対空砲火能力は高くないのだ。それで落とそうというのは、無理な話なのだ。それに、敵の数が多い。
「ぐぅ！」
通信の直後にライ機が被弾する。幸い、右翼の一部がもげただけだが、戦闘はできないだろう。
「ドレン曹長すみません。撤退します。」
「何でぇ、やられちまったのか、まだ２機しか落としてねぇのに。」
「ドレン曹長、彼は初めての出撃のわりに十分な戦果だ。彼を護衛してくれ。艦のほうにも敵はいる。」
「ブラック、つうか、俺が戦闘機隊の隊長だぞ。」
「すまん、そういうことではない。護衛がいないと、彼の帰艦は難しかろう、君ほどの腕なら護衛の上に、艦に取り付いた敵も撃墜できるだろう。」
彼はすでにドレンの扱い方になれたようだ。そう、彼はおだてに乗りやすい性格なのだ。
「分かったぜ！任しときな。ここは任せるぞ！」
「戦力が低くなったな・・・。もつかだが・・・。」

　ブラックが相手にしている戦闘機は１２、明らかな戦力差だ。さらに、ドップのミサイルは Ｑ 機銃はあと１０発を１４掃射するだけの弾数しかない。無駄撃ちはできない。
「敵機ロック。」
　ドップの機銃が、ティンコッドのコクピットに突き刺さる。少しの弾で倒す、もっとも確実な方法だ。ただし、そうとうの腕と集中力が必要である。また、それ以上に、多数な敵に囲まれても恐怖を覚えない事が必須である。ブラックは、感情に乏しいため恐怖は感じないが、さすがに精神的に疲れるのは否めない。
　「化け物か！集中砲火だ！」
　４分で３機に減らされた中隊長が残りの味方に指示を出す。敵は、そのために横一列に並ぶ。一斉射撃をされた場合、逃げるのは困難だ。そして、反撃するにも弾は無い。ブラックに死が迫る。
　シュン！
　それは一瞬のビームの音だった。それが直撃した３機の戦闘機はこの世から消え去る。また、ブラック機にも多少の被害が出たらしい。接近していたため、ビームの粒子が多少飛んできて両翼に小さい無数の穴があいたのだ。飛行能力も３０パーセント落ちたらしい。ガウに戻るのがやっとだ。
　「ドメスか・・・。命拾いしたな。」
　ブラックが、艦に戻る頃には、艦に取り付いた戦闘機は全て撃墜されていた。
　「艦長、空母が逃げるがどうする？沈めておいたほうが後々のためではあるが、今の状況では危険でもある。」
　一隻はすでに戦闘海域から離脱してしまっている。しかし、一隻の空母は被弾しているためそうもいかないらしい。ただ、砲門はまだ生きているらしく、うかつに近付けない。
　「疲れているだろうが、第三砲塔へいってくれ。第二砲塔はやられちまったしな。第三砲塔は使えるが、砲手が死んじまった。近くに攻撃を受けたとき、破片でな。死体はかたづけた。」
　それを聴き、急いで砲塔へ向かう。途中、死体や負傷兵を見たが、特に気にはならなかった。戦場で、それらを気にしている暇は無い。そして、ついた第三砲塔の椅子は血で汚れていたが、気にせず座る。
　「ドメス、先ほどはすまんな。砲撃準備ができた。」
　「了解。ブラックさんはエンジン部を狙ってください。データ送ります。印のところです。私は艦橋を狙いますので。」
　それにあわせてガウは水面すれすれまで降下する。その方が確実だからだ。そして、２分後にビームが突き刺さった。
　「終わったか・・・。つッ！」
　敵空母爆発とともに、ガウが大きくゆれた。
　「艦長どうした。」
　「すまん、三番エンジンがやられた。それでガウが着水してしまった。何とかしようとしているが・・・。すぐに来い。」
　「あぁ、今行く。」

　「変わってくれ。」
　「大尉、できるのですか？」
　「一応。成績は Ｃプラスだ。」
　「ですが経験が。」
　「黙って代わってやれ。お前じゃなんともならんのだろう！」

ジンに釘をさされ、そう舵手はブラックとすぐに交代する。
「オペレーター、波の状況、風向風力、ガウのエンジン出力、馬力、重量、形状のデータを。」
それにあわせて、すぐにデータを処理して送る。そして、それをブラックは頭の中で計算する。ＩＱ１９０の彼には大変なことではない。操舵の実技はまずまずだっただけで、物理理論は完璧である。実技自体も前日に読書をしていたための寝不足により反応速度に支障をきたしたに過ぎない。
「衝撃に注意。」
その２分後、ガウは緩やかに上昇した。
「ブラックよくやったな。操舵手と変わって休め。」
戦闘機撃墜数１８。もちろんこれは、わずか１時間のうちに、たった一機のドップであげた戦果である。このようの戦果をあげたブラックは、キシリアの聞くところとなる。

・　血に染まるジャブロー

「キシリア少将、これからどうするんですか？それと、この基地の治安はよくありませんよ。数名が、私の部下にちょっかいを出してきたので、射殺させていただきました。」
「射殺だと？戦死としておこう。しかし何があったのだ。」
それは、三時間前にさかのぼる。
「・・・男性兵１０名、女性兵２９名です。艦の副官はミネルバ少尉に任せています。」
「了解した。それと少佐、貴君の部下は当方で使わせてもらおう。」
「なぜでしょうか？」
「今回の任務終了後、君は宇宙に上がってもらうことになったらしい。それで、君には、新しい兵が与えられるらしい。２日後にその手続きがある。」
仕方がないかと思いつつ、艦に戻る。ただ、カスミ、ミキの二名のパイロットと副艦長ミネルバはいっしょに連れて行こうとキシリアに頼もうと通信室にむかった矢先立った。
「キャァ！はなしなさいよ！」
「そうだ！てめぇ、何しやがる！」
聞き覚えのある声だ。急いでそっちに向かう。
「リー、どうした？ん、ミレーヌ。」
そこでは、ミレーヌとレイチェル、リンが、3名の男に絡まれていた。助けにはいったリーは、反対にやられてしまったらしい。片腕を抑えている。
「少尉、やつらが彼女等を！」
そういうリーは苦しげだ。指しているドアをこじ開けて部屋にはいる。
「貴様等、誰の許可で私の兵にてを出すのだ。」
「何だあ、ガキか！おれらの隊にはよぅ、女がいないんだよ。それで、こいつ等に相手してもらおうと思ってよ。」
見るからにごつい男が言う。確かにこれではやられて当然だ。
「すまんが、そういうわけにはいかんな。私の部下に手を出さんでもらいたい。」
彼女等に強姦をしようとした彼らを、イシガヤは射殺したのである。暗殺者であった彼には、たわいも無い事である。また、彼らが、連邦軍捕虜にも同じようなことをしていたことが判明したため、牢獄のほうに向かう。そこではほかのものは始末されたのか、上等兵の階級章を付けた十七歳前後の少女一人だけがつながれていた。
「そこの上等兵。ここのやつらに手篭めにされているのはお前だけか？」
「そうです。今度は・・・貴方ですか！」
彼女は、恨みがましい目で見てくる。別にそういうつもりではなかったのだが、視線が痛い。
「いっ、いや・・・そういう訳ではないが。かっ、必ずしもそういう気がないというわけではないんだが・・・って、なにいってんだ俺は。」
「じゃあ、ほかの人みたいに始末しに・・・」
「それも違う・・・。俺の部下に手を出そうとした奴を始末してな。そしたらお前の存在に気づいたというわけだ。それでかわいそうに思って助けてやろうかとおもってな。ジオンに入る気が有れば、俺の艦に入ってもいい。ここでこのまま弄ばれ続けるよか良いだろ。現地調達の兵としておく。」
「でも、少尉さんにそんな権限があるんですか？それに・・・そこでも・・・。」
「安心しろ、これでも俺はキシリア・ザビ中将の子飼いの兵だ。そこいらの左官並みの権力は行使できる。ついでに、俺の艦の構成員の六割が女だから、なんかあっても助けて

もら安いはずだ。副艦長も女だし、女の発言力が大きい。くる気があるならとりあえずは、衛生兵として働けばいい。名は？」
「ユミ・・・ここにいるよりは・・・。」
「まぁ、そうだろう。そう手配しておこう。」
そしてその日、ひとりの部下が増えた。

「キシリア様、部下をひとり新たに加えました。そして、お願いがあるのですが、私の部下はこれまでどおりにして宇宙に連れて行かせてください。」
「何か都合があるのか？」
「まぁ、この基地の風紀があまりよくないのと、その・・・。」
「好きな女でもいるのか？」
「まぁ、そんなとこです。」
「分かった。貴様の言ったよう貴様の部下を宇宙にいっしょに上げることを認めよう。だが、ミホ、サヤ両中尉は、グラナダの方の教習部隊にまわしてもらおう。安心しろ、私の手元で使う。お前は５日後、４・２９ポイントでムサイを受け取れ。兵はそのまま使っていい。それと、お前の言った艦を合流させるようにした。」
「ありがとうございます。それと、そのパイロットであるブラック大尉は、NTの可能性が高いと思われます。それではごきげんよう。」
「４・２９ポイントか・・・」
彼の意識は、昔起こった出来事へ飛ぶ。

００７９・４・２９
「フラナガン、イシガヤの NTレベルはどうか？」
「はい、あまり反応しませんね。幻覚剤を使ってみます。」
その幻覚剤は、そのもののもつ恐怖を増幅させ、能力を引き出す力がある。実験のためには、仕方は無い。ただ、イシガヤはキシリアのお気に入りのために、後遺症が残るような薬ではない。
「どうか？」
「分かりません、電気レベル上げます。」
その直後、サイコミュ機器に異変が起こる。すごい勢いでパラメーターが上昇する。すでに、数個のパラメーターは、測定可能値を凌駕している。
「フラナガン、失敗だな。」
未完成のサイコミュ機器が壊れ始める。それを見たキシリアは実験を止めさせた。

「少将、敵艦隊接近中です。すでに補足されたようです、逃げられません」
「うむ、我が方の戦力はどうか？」
この実験は極秘であったため、グワジン級ではなくムサイ級である。戦闘能力はそれほど高いわけではない。
「ザク３、ガトル１です。ですが、ガトルのパイロットはいませんよ。ザクも２人しかパイロットがいません。」
「少ないな。敵の戦力はどうか？」
「マゼラン１、空母１です。」
「やってみせい。ザクにはイシガヤを乗せろ。」
すぐに MS隊が発進する。敵の戦闘機はおよそ３０、かなりの数だが勝つしか術は無い。
「イシガヤ機出ます。隊長指示を。」

この艦のパイロットはそれなりにてだれである。ただ、兵士と言うより戦士であるために自分勝手な行動をする場合が多い。今回も、各自敵を撃破という命令が出た。
「隊長、それでは不利です。」
「なんだと！３０なんてあっという間だ。黙ってみていろ！」
戦闘がはじまる。確かに強い。連射せずとも落としてゆく。イシガヤも負けじと射撃を行う。だが、戦闘機にはそうそう当たるものではない。ヒートホークに持ちかえる。
「そんなんで落とせるか！ぐわッ！」
隊長は死んだようだ。それに構わず攻撃する。弾をかいくぐり敵に取り付くザクの操縦は、そうとうのものである。格闘戦に持ち込まれた戦闘機はなす術が無い。だが、それほど回避が上手くないせいかすぐに被弾する。
「三番機戦闘不能帰艦します。２番機援護を！」
中破したザクは帰艦する。しかしまだ敵は２２機いる。勝てるものではない。イシガヤは、ガトルに乗り換える。このガトルは彼の専用機なのだ。
「イシガヤ、ガトル出る。」
そう言うと、赤い機体は最大戦速で敵に迫る。だが、その目の前で爆発が広がる。二番機が落とされたのだ。それを楯にしつつ、機銃を連射する。宇宙に４っつの花火が上がる。その腕は尋常ではない。彼は、シミュレーションで、ガトルを使いザクを２機落とすという事さえしているのだ。これが NTではないかと思われた理由である。さらに、MS改造センスも群を抜いていたのだ。
「ここでやられる訳にはいかん。」
ガトルの能力以上の動きをする。ところどころきしむが、たいしたことは無いだろう。そして、そうでもしなければ勝てるものではない。
「キシリア様、彼の NT値を計測中ですが、かなりのものです。先ほどのザクとは比べ物になりませんよ。」
確かに数十倍のデータをたたき出している。もうすぐで計測範囲を超えてしまうところだ。この計測装置は、もっと強化する必要がある。
「キシリア様、敵機撃墜。戦艦に向かいます。」
わずか数分である。その間に１２もの敵を撃墜した。その辺のＭＳ乗りよりはるかに強い。そして、対艦ミサイルは、まだ使われていない。機銃と小型ミサイルしか使わなかったのである。
「対空防御が甘いな。素人か！」
もともとマゼランは、艦隊戦の為に作られたのである。旧世紀でさえ失われた、大艦巨砲主義が復活している様は、滑稽でしかない。連邦の無能が分かる。さらに、対空防御が薄いために、海戦当初のブリティッシュ作戦においてザクに多くの艦が落とされている。それなのに進歩が無い。イシガヤ機は、薄い弾幕をかいくぐり艦橋とエンジンに対艦ミサイルを放つ。艦との距離は、わずか８メートル。至近弾である。マゼランは、エンジンの遊爆により消滅した。残る空母に戦闘力は無い。
「イシガヤ、助かった。」
「いえ、任務ですから。それと、サイコミュですが、良い案が有ります・・・」

「おっ、そこの奴、このガウの艦長知らんか？」
４０くらいの顎鬚を生やした少佐である。なかなか人がよさそうだ。
「私ですが何か。」
「いや、君じゃなくて、艦長はどこか？」
無理も無い。イシガヤは若すぎる。こんな若者が艦長と言うのは信じられるものではな

い。
「ジン少佐、艦長はこの方です。」
ミネルバだ。
「ん、ミネルバ。部屋にいたほうが良いぞ。この基地は治安が悪い。」
「大丈夫ですよ。入り口はフライト軍曹とキース曹長が見張っています。それと、彼女は？」
新しくいれた衛生兵の事だ。
「ああ、少し衛生兵が少ないから、はいってもらった。仲良くしてやってくれ。」
まぁ問題は無いだろう。艦橋にいる分には暗殺技術を持った自分もいる。
「すまん、お前さんが艦長だったとは。唯の子供かと思ったぞ。今度から艦隊を組む部隊の艦長のジン・インヴェイドだよろしく。」
確かに大柄のジンより三十センチも背の低いイシガヤは子供にしか見えない。
「こちらこそ。こっちが副艦長のミネルバだ。あれ？」
先ほどまで横にいたミネルバがいない。いた、少し後ろにいたようだ。しかし、見慣れない男も一緒だ。さっきの件もあり、さりげなく銃に手を伸ばす。
「ミネルバちゃんって言うのか。どうだ、俺とつきあわねーか？」
「い、いえ。それは・・・」
少々困っているようだ。
「ドレン、すぐに口説くな。俺がこまんだろ。」
そうジンに言われたドレンはすぐにやめる。どうやら、半分は冗談の様らしい。雰囲気で分かる。
「すまんな、俺の部下が。」
少しこれからの事を話した後、この日は解散した。

「ジョブロー攻撃部隊は発進してください。なお、寄航中のガウも出動願います。繰り返し・・・・・・」
どうやら、ジャブローを偵察していたシャア大佐が、入り口を発見したようだ。
「ミネルバ、春日発進準備。ジン少佐の指揮下に下る。また、我が艦は先行して MS隊を降下。以後、春日は戦線すれすれまで後退し上空にて待機せよ。それと、これがジャブローの対空兵器の位置と、軍事施設の大まかな配置だ。サクラ、このことを少佐に伝えとけ。」
サクラが、そう伝えてすぐである。
「イシガヤ！勝手に決めんなよ！俺が指揮官だぞ。」
「はい・・・ですが、宇宙にあがるまでは死ねませんので。それに、攻城戦では、春日はあまり使えませんよ。ロールシフトがしけなくなっていますので。オデッサでの損傷が直りきっていません。」
「ああ、しかし、これからはこちらの指示に従ってくれ。それと、この地図はどうした？」
「極秘資料です。お答えできません。しかし、９０％は信頼できます。」
「わかった。健闘を祈るぞ！」
１時間後に二隻のガウは、先行して発進する。

「ミネルバ、艦の方は任せた。生きて還ることが最優先だ。よし、カスミ君、ミキ君、発進するぞ。俺に続け！」
彼等の機体は、全機改造機である。ドムには及ばないが、ザクにしろグフの基本スペックを超えている。特に、ザクの各エンジン部は独立させられ、１つがやられても、誘爆の危険はない。部分的にはドムよりも強い。

「早めにして良かった。」
　イシガヤ隊は、最初に降下している。意外とそのほうが安全であるからだ。現に、対空砲火は甘い。しかし、後方で１つの爆発が広がる。どうやらブラック隊のようだ。
「どうした？」
「シン伍長がやられた。ほかは無事だ。」
　さすがだな。そう思う。もし自分だったら、部下を殺された場合何をするかわからない。以前、カスミ少尉に危機が迫ったとき意識を失って、暴走したくらいだからだ。
「少尉・・・・私達・・・また人を殺すんですよね。」
「そうだ。どうした。」
　着地してからの事だ。カスミ少尉は、そう尋ねた。
「そんな・・・簡単に言わないで下さい！私はただ・・・戦争を終わらせたくて、それで軍に・・・。」
　彼女らしい。しかし、今そんな事を議論している場合ではない。士気にかかわるからだ。とりあえず、士気の低下が起こらないように、言葉を選びつつ返答する。感情的にはなっているが。
「たった一人で何ができる！俺らは戦争をやってんだ、人を殺さない事なんてできるはずがないだろ！」
「少尉は・・・罪悪感を覚えないんですか！」
「俺は・・・人を殺しすぎた。十、百の単位じゃない。暗殺もした。全て、スペース・ノイドのためだ。だが、罪悪感を覚えないわけないじゃないか！だが、俺は兵士である限り人を殺し続ける。死ぬまでな・・・。だが、それ自体に後悔はない。中立地帯でぬくぬく暮らすのも、民間人として、攻撃にびくびくして暮らすのも願い下げだ。自分の運命は、自分で切り開く。そして、君の命も守って見せる。戦争が終われば、考える時間はいくらでもある。それまでは死なないように、精一杯戦え。」
　彼の口調は、確かに多くの人を殺した事を教えている。それに、どことなく悲しげだった。
「カスミ少尉といったな。イシガヤ殿の言うとおりだ。死んでからでは遅い。」
「そうよ、考えたって仕方ないじゃない。それより目の前の事に集中しよう。」
　その直後砲撃が走る。ビック・トレーのようだ。さすがジャブローである。それ一隻ではたいした砲撃能力ではないが、付近のトーチカを含めると、侮る事はできない。
「イシガヤ殿、モビルスーツらしいものが来ている。」
「大尉か、あれは RGM-７９Gジムだ。ビームをもっている可能性もある。データを転送する。」
「・・・詳しいな。了解。ザクより多少は性能が良い。」
「そうだな。俺が牽制する。お前たちが落としてくれ。」
「許可する。イシガヤ機を囮にし、ナカサト機はその援護。敵が混乱したところで砲撃し殲滅せよ。」
「グフとは違うのだよ！グフとは！」
そう言うとイシガヤは、突出する。最大速度でマシンガンを放ち接近するが、一発も当たらない。ただし、確実に敵機の移動方向正面に撃っているため、ジムは思うように動けないようだ。それに、パイロットの技量もたいしたことは無い。そして、動きを止めたジムは、他のものに確実に墜とされる。
「四機撃墜。くッ！」
　さらにモビルスーツの増援が来る。装備はマシンガンのようだ。破壊力こそ低いが、命中率は侮れない。

「ブラックさん！砲撃が激しすぎます！」
「下手に動くな。・・・簡単に当たりはせん。」
「しかし！」
「イシガヤ殿、敵は？」
「沸いて出てきやがる。左右にさらに援軍。戦車隊だ。近くの味方は奥に進むようだ。。」
「うわ！」
ドメスの機体が崩れる。右足をやられたようだ。すぐさまコクピットから出てきたのを、ブラック機が回収する。
「墜ちなさい！」
カスミ機がマシンガンを連射し撃墜する。なかなかの腕だ。ミキもビック・トレーに攻撃を掛ける。
「イシガヤ殿、トーチカは撃破した。しかし、弾がつき始めている。」
１時間でこれだけの弾を使う。弾の減りが早いが、これだけの攻撃を受けては仕方が無い。
「キャァー！」
カスミ機の足がやられる。そして、ミキもだ。前進を掛けたときに、ビック・トレーがいるのに気付かなかったらしい。ブラックもシールドをやられたようだ。これ以上の前進は危険だ。
「これまでか。ブラック、俺の部下を収容して俺の艦に戻れ。しんがりは任せろ。」
「良かろう。どちらにせよイシガヤ殿しかしんがりは出来まい。」
それに従い、撤退を掛ける。すでに撤退の通路は出来ている。彼等の攻撃により、そこらの戦力は無力化されているためだ。
「人型２、戦艦１、トーチカ２、戦車６か。多いな。」
一機となったグフに砲撃が集中する。改造されているとはいえ、耐えられるものではない。
「すまんな・・・。まだ死ぬわけにはいかない。」
グフから小型の物体が放たれる。そして、最大速度でその場を離れる。数発の攻撃を受けるが、致命傷ではないようだ。だが、機体各部の破損を知らせるランプが大量に光っていた。 3秒ほどすると、大きな衝撃が走る。核ほどではないが、すさまじい。小型の爆弾の割に、破壊力は高かった。グフは衝撃にもまれ、１００Ｍほど飛ばされた。衝撃で、さらに壊れるが、気絶せずにすんだ。
「くぅっ、何とかなったな。バーニアはまだ生きてるか。春日応答せよ。」
「少尉！大丈夫ですか？帰艦指示を出します。」
「了解。ミネルバ、索敵機器がいかれた状況を知りたい。データ転送頼む。」
「現状は劣勢。ですが、シャア大佐の部隊が潜入に成功したようです。味方 MSは６０％が大破、もしくは放棄されています。空母も６機が落ちました。敵戦力はおそらく２０％を倒すのにとどまっています。」
とどめをさしに来た敵を牽制しながら後退する。引き際は早い。半壊したグフとは思わせないほどだ。数分で艦を確認できる。
「少尉！なんて状態なのですか！早くその機体を放棄してください。危険ですよ！」
どうやら見つかったらしい。艦橋でも心配しているようだ。
「何、こんな程度では爆発はしない。帰艦する。」
しかし、そうもいかないらしい。戦闘機隊が攻撃を始めたのだ。数はそれほど多くは無いが、ガウの速度を落としたのが災いしている。
「少尉、どうしたらよろしいですか？対空砲火は多めにしていますが、ジン少佐のガウ

のいる空域に到達するには６分の時間が必要です！」
「ブラック大尉は出られんのか？」
「はい、艦内で応急修理中です。思ったより被弾していて・・・。」
「なに・・・。それで、カスミ君らは大丈夫だったのか？」
「はい、それは問題ありません。ですので、少尉がいつの間にかつけた対地？機銃についています。それと、ドメス少尉という方にも主砲についてもらいました。あと、指揮はそのままフライトがとっています。」
「了解、５分は持たせて見せよう。」
「６分は持たせてください！」
「善処する。」
グフは帰艦を中止し、ガウの上に乗る。そこからの砲撃で戦闘機を追い払おうと言う魂胆なのだ。二挺のマシンガンが、戦闘機用のカタパルトに運ばれてきていたのでそれをつかむ。ランスもなかなか気が付くようだ。シールドもある。
「ランス、すまんな！」
そう言いながらマシンガンを放つ。先ほどの戦闘時の射撃とは比べ物にならない程の射撃だ。直撃と言うわけではないが、翼に掠るくらいの事はしている。どうやら落ち着いて撃てばそこそこの射撃力はあるらしい。もっとも、ミサイルを落とすので手一杯だが・・・。
「艦長、ミサイル群きます。このままではブリッジに！」
撃ちもらしたミサイルはガウに直撃する軌道を取っていた。マシンガンで撃ち落すのが難しいと判断すると、グフをガウのブリッジ前面に押し出す。被弾するのを覚悟しての判断だ。ただし、対艦ミサイルであるため、打ち所が悪ければ一撃で大破である。
「ぐわぁ！きっ・・・帰艦する。」
「少尉！大丈夫ですか！」
グフは何とかもったようだ。ただし、完全にいかれてしまっているが・・・。
「大丈夫・・じゃあない。肋骨がまた一、二本やられた。たいしたこたぁないが・・・痛いな。」
「マリアを呼びます。医務室へ。」
「いや・・・いい。それどころじゃない。ともかくジンのところへ急げ！何か気になる。」

「ジン艦長、春日接近します。」
「うむ。対空砲火は緩めるな・・・。」
そうはいうが、すでに各部が大きくやられているために、たいした弾幕は張れない。エンジンも、左右一基ずつが破壊され、飛んでいるのがやっとなのだ。また、護衛にしている戦闘機も、今ではドレン機とライ機しかのこっていない。
「艦長、今援護をする。」
ブラックは、MSでの出撃を諦め、機銃に専念している。本当ならば、艦に帰艦すべきなのかもしれないが、ザクがつかえない今、帰っても大した役には立たないだろう。
「すまん、だが・・・。」
ジンの艦は、遠目でも分かるほど被弾している。各部は黒煙に包まれ、持つかどうかさえ定かではない。さらに、今しがた一発の直撃があったようだ。
「・・・イシガヤ、俺の艦はもうだめだ。出来るだけのものは退艦させた。もっとも、・・・数人しかいないが。後のことは任せる。・・・達者でな。ジーク・ジオン！」
彼のガウは急降下し、敵の要塞の入り口に大きな穴を作る。こじ開けられた穴の付近は、赤色の土が舞い、さながら血で染まったかのようだった。
「ジャブローが・・・血に染まったか・・・。」

「少尉・・・。」
「ミネルバ、残りの戦闘可能艦艇と MSの数は。」
「ガウ２、MS5 機です。」
「そうか・・・撤退する。ドレン、ライを収容せよ。全速で逃げろ！」
「か、艦長！それでは敵前逃亡です！」
敵前逃亡では、死刑さえ宣告される場合もあるのだ。反論するのはもっともである。
「敵前逃亡はしない。戦略的撤退だ。責任は俺ひとりが取る。」
「で、ですが・・・」
「いや、どうしても死にたいのなら残ってもいいが・・・死にたい訳ではないだろう。それに、殺すには惜しい、無理にでもつれて帰りたい。」
「イシガヤ！敵を討たねえのか！仲間がやられちまったんだぞ！」
「ドレンといったな。分かってはいる。だが、無駄死にをするわけにはいかない。お前等も帰艦急げ。ここは下がって、いずれ敵を討つ。それまでは堪えろ！良いな。」
この戦いは、ジオンの大敗という形で終わった。残ったガウも春日を含めて２隻、また、MS はわずか４機である。そうはいっても、中破しているものが３機であり、はっきり言って戦力外である。ジャブローを落とすには、あまりにも少ない戦力であった。そして、ガウの多くを失った南米の戦線ではジオンの勢力が、大きく減少した。

・　宇宙へ

「觀自在菩薩　行深般若～～～～」
「イシガヤ少尉、何をしている？」
「何だ。ブラック大尉か。ジン以下数十名の冥福を祈り経を唱えている最中だが？」
「それはいいとして、イシガヤ少尉・・・我々はどうすればよいか？」
「そうだな・・・。とりあえず、ブラック大尉とドメス少尉、ドレン曹長、ライ少尉は
「宇宙にあがってくれ。みんな宇宙での適性が高いからな。それに、ブラック大尉には
ソロモンでムサイが与えられる。ちょうどキシリア様の艦が一隻そこに放置されている
からな。今度、ドズル閣下の配下に加わる予定だったのを変更させてもらった。」
ドズルも許すだろう。特に、新しいニュータイプ部隊を編成している今、優秀なパイロットは重要なのだ。さらに、ブラック大尉にはその素質があるようだ。
「了解した。しかし・・・私には大役だと思うのだが・・・。」
まぁ、初陣から数ヶ月で、ここまで昇進したものはいないかもしれない。・・・中には、シャアみたいなものもいるが・・・。
「大丈夫だろう。俺みたいのでも出来るんだし。何なら、クラウン少尉に副艦長でも勤めてもらえばいい。勘だが、いい素養をしている。」
彼等は、数時間後には HLV で、宇宙にあげられることとなった。キシリアの命令では、とりあえず衛星軌道上でムサイを一隻受領し、遊撃任務につきつつソロモンでもう一隻のムサイを受領せよとのことである。詳しくは、ムサイ乗組員から伝えられるらしい。
「おーいブラック。俺も MSてぇのに乗ってみたいんだ。何とかしてくれ。」
「何とかか・・・基本操作は？」
「そんなん戦闘機と大差ねえだろ？宇宙戦になんだしよ。」
「しかしな・・・ドレン。」
「口をはさんで悪いが、シミュレーションをつんである。やってみればいい。」
「よっしゃあ！やってやるぜ！」
このシミュレーションは、元は春日につけてあったものである。それを、宇宙戦の訓練のために HLV に搭載したのである。彼の改造のためにこのシミュレーションはどんな地形でも対応できる。ゆえに、宇宙戦闘も可能である。さらには、ジオン・連邦のコンピューターをハッキングしたデータも取り込み、新型や極秘ユニットさえも使用可能である。
「おい！イシガヤ、このゲルググってなんだ？」
「ジオンの新型で、開発中のもんだ。だが・・・ドレン曹長にはザク改が向いてると思うぞ。初心者にゲルググじゃあ敏感すぎるだろう。」
「そうか、んじゃあそうするぜ。」
彼は、マニュアルもろくに読まずにシミュレーションを開始する。もっとも、戦闘機での経験が多いので、全くの素人と言うほどではないが。
彼のザクは、多少ぎこちなく発進する。設定は宇宙なので、重力に引かれる心配が無いことが幸いし、発進してすぐに地面に激突して大破するということは無かった。しかし、すぐにジムが接近する。それにともない、味方データのザクは攻撃を始める。ドレンもそれに続く。彼は MSも戦闘機のように速度を最大にしたまま攻撃を掛ける。相手の懐にまでもぐりこみ、ライフルを接射する。その戦法は、シャア・アズナブルに近い。さすがに敵はよけきれず被弾するが、こちらもそれに体当たりする形となってしまう。が、ちょうど反転をかけていたところであったので、肩のスパイクが当たる形になり、一機の撃墜に成功した。調子になって同じ方法で攻撃をし続け、撃墜されるまでに、三機のジムの撃墜し

た。これが初めてかと思わせる戦果である。
「どうだぁ！さっすが俺。自分にほれたぜえ！」
「やるな・・・ちょうど MSパイロットが必要だった。ドレン、すまんが、MS受領後にはMSの方のパイロットになってくれ。」
「さすがドレンさんですね。やはり戦闘機で、エースだったのがよかったんですか・・・それとも、噂のニュータイプですか？」
「いや、ドメス少尉、彼はニュータイプではない。だが、かなりの才能が有るな。ブラック大尉がうらやましいなあ。」
「・・・だが、君の艦も優秀ではないか。ジャブロー戦で、中核を担っていたのに、パーセンテージにすると２０パーセントの被弾率だ。」
「いや、被弾率は４５パーセントだ。しかし大半はミサイルで、不発弾が６割以上。」
「六割以上が不発弾だぁ！そんなことがあるのかよ！しっかし、お前のとこのパイロット、なかなかの腕だよな。」
「そうですよ、ミキ少尉でしたよね、彼女も優秀なパイロットではないですか。」
「おっ、ドメス、ほれちまったのか？」
「えっ！い、いや、そんなわけでは・・・。ドレンさんも、彼の艦の副艦長に声を掛けていたって噂が立っていますよ。」
「あぁ、イシガヤの艦には美人が多いからな。一人くらいは彼女にほしいって思ったんだ。」
「・・・ドレン曹長・・・むやみに言い寄って、乱暴はしないでくれよ。レイチェルなら、大丈夫かもしれないが。」
「無論だ。嫌がる奴を無理やりにって事はしないぜ。それに、俺は家庭的な子が好みだしな。」
「あっ、なにやってんの、少尉？」
「こんにちは、皆さん。」
ミキ少尉とカスミ少尉だ。彼女等も、訓練のためにやってきたらしい。彼女等も、宇宙での実戦はしたことが無いのだ。
「いや、ドレン曹長の MS適性をな。」
「ホントぉ？ちょっと怪しいなあ。まっ、いいや。カスミちゃん、どっちが多く落とせるか勝負ね！」
「えぇ、分かった。それじゃあ・・・キャッ！」
「どうだい、俺と付き合わないか？」
ドレンが、カスミ少尉の肩に手を置き尋ねる。だが、
「ドレン、止めてもらおうか！」
イシガヤがにらみつける。彼とドレンでは３０センチ以上も背の差が有り、ぱっと見では怖くも無いが、彼の目は、明らかに殺意に満ちている。何人もの人を殺した事のあるものの瞳だ。しかも、懐の銃にも手を伸ばしているようだ。ドレンは少し竦んでしまった。
「・・・いっ、いや・・・」
「ドレン曹長、手を。」
カスミ少尉の言葉を聞いて、手を離す。イシガヤの目は、いつも通りになっていた。
「こええ・・・」
ドレンはそうつぶやいたものだ。
「カスミ君、どうだい？」
イシガヤが尋ねる。他の女性にかけるより、多少緊張している声だ。
「えぇ、このゲルググって言うのもいいですね。でも、ライフルの速射性が・・・。ザ

クマシンガンにしても、射程が・・・。」
「少尉、私には聞いてくれないの？」
「いっ、いや。ミキ君もどうだい？」
「格闘戦に向いた機体が宇宙用には少なくて。どうにかなんないの？」
「う～ん、そうだな、ソロモンに着くまでには何とかしよう。あと、カスミ君のほうは、MS受領後すぐに解消できる。ジャブロー戦には間に合わなかったが、グフカスタムっていう奴に使うガトリングが届いた。もう、改造強化して手持ち武器にしたぞ。ついでに言えば、君たちに与えられるMSは、リックドムII・試作機リックドムIIIの中間機だ。もっとも、IIIの開発は中止され、作ってあったパーツをIIに組み込んだだけだがな。それに追加装甲をつけてあるから装甲にも問題ない。」
このIIIは、彼の提案したMSである。だが、ビームを搭載できるわけでもなかったので、ギャンと共にゲルググとの競争に負けたのである。最も、彼はさらにその機体を改造させているので、受け取るときにはゲルググに匹敵するか、それ以上の性能になっているだろう。
「どういう性能なの？」
イシガヤは、完成予定データの入ったディスクをカスミ少尉に渡す。それをシミュレーターに読ませ、再度ゲームを始める。今度はなかなかご機嫌のようだ。ちなみに、ブラックたちはそれを観戦していた。
「・・・撃墜数・・６，７！！！お前等・・・すごいな。」
ドレンはかなり気落ちしている。自分の倍以上の戦果をあげているからだ。ついでに、ブラックとドメスは、それぞれ１０，７という戦果をあげた。イシガヤは１機を落としたに過ぎないが。
「はあ、イシガヤ、この機械大丈夫か？やっつけすぎだぞ。」
そういうのももっともである。彼女等、彼等の撃墜数は、並ではないのだ。
「いや、こいつは、ジオンで正規に使われている奴より性能は良いぞ。難易度は普通にしているが。」
どうやら、この艦にはエースの素質を持っているパイロットが多いらしい。訓練兵だったイシガヤの部下も、数度の実戦を経てかなり腕が上がっている。特に、チームとしての腕は一級だ。中でも、カスミ、ミキ、シオンの３人は、個人としての能力でも黒い三連星のレベルに達している。ブラックのほうは、白狼、シン・マツナガに劣らないように見える。
「ドレンさん、気にする事はありませんよ。なんせ、MSの操縦は初めてなんですから。一週間もすれば、かなりの腕になれますよ。」
「ドメスの言う通りだな。すぐにライデンどのくらいの腕になるのではないか？」
ブラックがそう言った後すぐにサイレンがなる。どうやら、打ち上げが近いらしい。
「皆さん、あと１０分で打ち上げが開始します。直ちに自分の席についてください。」
ミネルバの声だ。こんなことはHLVのものに任せればいいのに、宇宙に上がるという緊張のためかじっとしていられなかったらしい。まぁ、彼女らしいが・・・。
「そろそろお開きか。俺は酒飲んで寝とくぜ、じゃな。」
ドレンはそう言い去っていき、他の者も後に続いた。

「イシガヤさん、私行きますね。」
ミレーヌは、壁をけって宙を泳ぐように去っていった。だが、そのときスカートの中が丸見えであった。白いパンティを見ておいしいと思ったが、後ろにいたカスミ少尉とミキ少尉に悟られないように注意をする。この日から数日、なれないためか、時折女子のスカ

ートの中が見えたが、とりあえずこの二人だけは大丈夫であった。余談だが、この艦の女性兵士はスカートタイプの軍服を着用している。物資が不足しているのか宇宙用の軍服が配備されないのだ。

「少尉、物資の移動完了しました。これからいかがなさいますか？」
HLVが打ち上げられてから半日である。ムサイ級新造巡洋艦「春菜」に、全乗組員と、物資が入り動力にも血がめぐりだしている。もっとも、数十名の余分な乗組員もいるが、ソロモンにつき次第それも解消される。
「了解した。ところでミネルバ、残念な事に、連邦軍の先行部隊がジャブローを発進したらしい。囮と思うのだが、見逃すわけにはいかんから迎撃に向かう。シャア大佐のほうは、木馬を追っているらしい。」
「ですが・・・私たちの艦にあるのは、正規採用でないドムタイプ三機があるだけですよ。艦もムサイですし・・・。」
「安心しろ、モビルスーツは俺の作品だ。最も、組み立てたわけじゃないが・・・。だが、信頼できる奴に頼んだ奴だから大丈夫だ。」
彼の能力に信頼をおいてはいるが、MSの出所や、正規採用機でないなど不審があるためだろうか？いつもより慎重である。
「敵艦の予想戦力は？」
「サラミスタイプ１、MS最大６ってとこだ。こちらのパイロットは、カスミ、ミキ、シオンでも出せばいいだろう。」
「ですが、宇宙での実戦経験が・・・。」
「まぁ、大丈夫だろう。適応が早い。それに、ランデブーポイントまでは約一時間だが、間に合わなければ俺かブラック大尉が出りゃあいい。俺でも何とかなるはずだ。」
「了解しました。」
戦力的には、MS、パイロット共にこちらが有利だろう。万が一、相手に凄腕のパイロットがいても、ブラックがいる限り何とかなるはずだ。
「まぁ、接触までに時間がある。俺は格納庫にいるからそんときゃあ連絡頼む。」
改造ガトリングの取り付けは、４０分ですむはずだ。ミキ機のほうはランスに改造案を考えてもらっている。最終的にはそれに手を加えるが、それでも大半は任せて大丈夫だろう。それだけの能力がある。
「イシガヤさん、こいつどうすんですか？」
イシガヤの持って来たグフのことだ。陸専用である機体を宇宙に持って来る訳が分からなかったのだ。
「どうすって、俺の愛機を地球に捨ててくるわけにゃあいかんだろ。エンジンを切り替えて宇宙でも使う。コムサイに運んでおいてくれ。２，３日で使えるようにする。そいやあランス、こいつをキシリア様に届けるように補給部隊の連中に言っとけ。」
補給艦はまだ平行して進んでいるから問題ないだろう。

「艦長、敵機を補足しました。敵はまだ気付いていません。MSどうしますか？」
イシガヤは、自分が出るかどうかを考える。ミネルバは経験が浅いが十分にやってくれるだろう。それにブラック少佐もいる。だが、初めての本格的なMS戦である。さらに、宇宙である。イシガヤも優秀とは言いがたい艦長ではあるが、それでも、十数回は宇宙戦に出ている。まぁ、ミネルバよりはましだろう。そこで、艦に残りミネルバは補佐にする事にした。
「そうだな、MS小隊はミキ少尉に任せる。今回は、MS隊は先行して敵を撃滅せよ。艦は

俺たちで守りきる。MS隊は敵 MSに集中しろ。俺たちのことは考えんで良い。リン、ナリッジは艦橋にあがって、MS戦の勉強だ。MS戦の基本陣形は、ミキが前衛、シオンが中衛でミキの援護、カスミ君は最後方で、二人の援護だ。みんな、宜しく頼むぞ！」
　MS 隊が各機発進する。宇宙戦がはじめての割には上手く編隊が組まれている。どうやら大丈夫だろう。
　「こちらミキ、人型３、へんてこなのが３、見っけたよ！少尉、あれ何？」
　「どうやら人型はジムキャノンだな。他の三機はボールっていう作業ポッドに大砲つけた奴だ。詳しくは、コクピットのデータで見ろ、ちゃんとはいっている。」
　「あっ、ホントだ。各機、砲撃に注意して。シオン、接近戦で行くからね。」
　彼女は機体の速度を最高にして突っ込む。敵も砲撃をしてくるが当たらない。キャノン砲は命中精度が低く、また、ミキの回避能力は高い。それに、シオンの援護が敵をよくかく乱している。
　「ミキちゃん、右へ！」
　それに応じ、ミキ機は右にそれる。カスミ少尉の砲撃だ。彼女のガトリングは、ジムのキャノンより長い射程を誇る。さらに射撃能力が高いので、その弾はジムキャノンを蜂の巣にする。見事なものだ。それと同時に、ミキの方はボールを蹴り飛ばしていた。それは、もう一機のボールに当たり二機同時に破壊する。そしてシオンはミキを狙っていたジムキャノンに接近し、コクピットに弾丸を叩き込む。敵の方は、極端に格闘戦が弱いのだ。
　「春菜前進して！全力射撃準備！」
　春菜とサラミスの砲撃戦が始まる。こちらの主砲担当は、フライト、ドメス、アスカだ。砲撃戦能力はサラミスに劣るが、砲手の腕は一流だ。充分に戦える。
　「こちら、砲術長フライト、各主砲発射準備完了！」
　「主砲、発射！」
　春菜は主砲を連射しつつ、サラミスに接近する。船体に３個所ビームがかすったが、敵艦を機能停止にした。１６発撃った中で、８発が当たりである。残った機体も降伏した。

　「艦長、捕虜はどうしますか？」
　「女性２、男９か、この艦にはあまり余裕は無いな。」
　「はい、一応身体検査のあと牢屋に入れましたが・・・」
　春菜はすでに通常より多くの人員を乗せている。これに捕虜を加えるとなると、部屋数の問題も発生する。
　「そういやあ、牢屋は都合上大きいのが１つしかなかったんじゃないか？」
　「はい、それが？」
　「そいつはまずい。男どもと一緒にしない方が良い。狂うとなにすっかわからんからな。女は・・・俺の私室にでも移動させとけ、見張りも立てろよ。」
　「ですが、艦長はどうするのですか？」
　「艦長室があるだろ。もっとも、実験室みたいなもんだが・・・」
　ミネルバはみたことはないが、イシガヤの部屋に掃除にはいった衛星兵の話では、あまりの散らかりように手をあげ、そこの掃除を放棄したらしい。しかも、艦長室というのはミネルバ達の部屋より　２倍ほどの広さがあるのだ。綺麗好きのミネルバには信じられるものではない。
　「了解しました。ところで、外で何をされているのですか？」
　「あぁ、あれか？ジムキャノンの使える部品を取っているとこだ。特にキャノンは改造して使うつもりでな。シオンはガトリングとかよりキャノンとかバズーカの方が良いって言ってきて困ってたんだ。ジャイアントバズを改造しようとも思ったんだが、カスミ君と

ミキ君に止められちまって。まったく世話ぁかかるぜ。」
　確かに、個人個人にあわせて MSを改造するというのは手間がかかる。しかも、一機の MSを二人で使わなきゃならないのでなおさらだ。たとえば、シオン少尉にすると、相性のいい機体は１番機か３番機である。１番機は主にイシガヤの機体で通信索敵能力と加速性に優れているが、特に癖のある機体ではないため、遠距離使用にしても問題ない。３番機は主にカスミ少尉がのるだけあって、繊細な動きと索敵の力に優れていて、射撃専門のシオンには一番あっている。それに比べて２番機はミキ少尉が主に乗るために、運動性と加速性が優れているため、反応が早すぎ使い勝手がよくないのだ。

　「艦長！変な暗号電文がきました。解読すると、子悪魔と黒い竜巻は、サイド６の博士にあえとのことです。どうなさいますか？」
　「ん、そいつは俺たち宛てだな。つうことでサイド６へ向かえ。任せるぞ。」
「了解。ですが・・・。」
　「ん？」
　「子悪魔・・・と・・黒い竜巻って？」
　暗号電文というからして、上官に尋ねるべきではない。だが、少々そう言うデリカシーにかけるリーは聞いてしまった。
　「子悪魔か・・・。そいつは俺のことだ。前も言ったが、ブリティッシュ作戦やルウム戦役でそれなりの戦果を上げたからな。しかも戦闘機で。一時は、味方にも恐れられたもんだ。」
　この半分は嘘だ。子悪魔の異名は、敵味方問わず、キシリアに敵対した将校を暗殺した当時わずか１４，５歳の暗殺者という事でつけられたのだ。その数およそ８、内、味方３．暗殺部隊を率いた悪魔と仇名されたのだ。だが、このことを知る者は、両軍の上層部だけである。
　「おっと、あと、黒い竜巻というのはブラック少佐のことだ。ジオンの宣伝のためにちょっとは知れたブラック少佐の事を仇名つけて広めたんだ。」
　「広めたって？」
　「あぁ、ちょっとした方法でな。方法は教えられんが・・・。俺もブリッジへ向かう。ユミに茶の用意をさせといてくれ。」

　「ミネルバ、休んで良いぞ。」
　「はい、そうさせていただきます。ですがよろしいのですか？」
　「あぁ、お前もあんま寝てないだろ。８時間の休憩を許す。カスミ、ミキ、シオンにもな。ナリッジとリンも一応休憩させとけ。まぁ、いざとなったら呼ぶが。ブラック少佐たちもいるから問題ないだろ。」
　イシガヤは、ミネルバの代わりに艦長席につく。
　「少尉、お茶をお持ちしました。」
　「うむ、わりぃな。やっぱり緑茶が一番だ。どうだユミ、なれたか？」
　「はい、元連邦の私に親切にしてもらってありがとうございます。でも・・・」
　「ん、でもなんだ？」
　ユイは少し赤くなりながら答える。
　「私が・・・少尉の愛人とかじゃないかと言う噂が立っていて・・・。」
　「・・・そのことか。まぁ、すぐにそんな噂も消えるだろう。少々迷惑な話しだよなあ。俺たちゃそんな関係じゃないのに。ごほっ、ごほっ、いや・・・もちろん、君に魅力がないというわけじゃないが。」

「良いですよ、レイチェルさんほど綺麗じゃないですしね。」
「はっ？あいつが・・・そんな綺麗なのか？」
「エーっ！少尉正気ですか！だって金髪だし、背も高いし、スタイルも顔も良いじゃないですか。」
イシガヤの発言は、あまりに彼女を驚かしたらしい。
「そんなもんなのか・・・？俺としては、・・・今の時代人種差別とも取れるかもしれないが、どうせなら、同じ民族の血を引くお前の方が綺麗く見えるが？そもそも金髪は嫌いだし、俺より背が高いやつも好かん。ついでに、スタイルがいいやつもいまいちだな。ギレン閣下の言葉を借りれば、人類は優良種たる日本民族によって管理運営されて・・・ってところだ。」
それは彼の本音だ。
「・・・少尉って変ですね。それじゃあ、少尉の好みの可能性があるのは・・・ミキ少尉か、カスミ少尉か、はたまた私ってとこですね。」
イシガヤの表情は、カスミ少尉というとこで微妙に顔が変わったのだが、それには気付かなかったようだ。そんなところへランスが現れる。
「イシガヤさん、仲いいですね。」
どうやらランスも噂を信じているようだ。
「まあな、部下とのコミュニケーションを取るのは艦長の務めだ。」
「ベッドの上でもですか？」
少々下品なランスはにやついてそう言った。まぁ、たいがいの機械屋はこんなものだ。
「いや、残念ながら常に独り寝だよ。お前もそんな噂を信じてるのか。あんなんは噂に過ぎないぜ。自制すんのも難しいが、まだこの艦の女に手をつけたことは無い。っというより、まだ一度もそんな経験は無いんだ。女と付き合ったことさえない。」
「ホントッすか？」
「まあな。俺だってそう言うことをしたくないわけではないが・・・忙しくてそんな暇ないし。それに部下に手を出すと、士気にかかわるからな。第一、こんなちび介誰も相手にはせんよ。」
確かにイシガヤの身長は１６０もない。女子の平均より低いのだ。見てくれもわるくはないが、いまいちである。

「ブラック、サイド６付近にマゼランタイプの艦艇を見つけた。もうすぐ相手も気付くだろう。情報によると、MSを４機、ボールを６機積んでいるそうだ。」
「うむ、それで？」
「どうだ、俺とミネルバの代わりに艦の指揮でも採ってみないか？ソロモンに着けばいやでも採んなきゃいけないだろ。まぁ、いい訓練にはなる。」
「・・・しかし。」
「大丈夫だ。いざとなったら俺が変わりに指揮を採る。それと、ドレンを貸してくれ。実戦に出といた方が良い。万が一ソロモン戦がすぐ始まると・・・激戦区になる。」
「了解した。」
そのことを急ぎドレンに伝える。１０分で発進の準備は整った。
「ドレン少尉１番機出る！」
「ナリッジ少尉２番機出ます。」
「リン少尉３番機行きます。」
三機の MSが発進すると、最後にもう一機がコムサイから発進する。
「イシガヤ、グフ出るぞ！」

　彼のグフは、まだ完全に宇宙戦闘使用になっているわけではない。だが、とりあえずの改造で、前回の補給で手に入れたサポートフライトユニットのブースターをくっつけて、戦闘速度が出るようにしたのだ。ただ、バランスはメチャメチャである。だが、いつもメチャメチャな戦闘をしている彼にはあまり問題は無いようだ。・・・酔う事以外は・・・。
　「おいイシガヤ、そんなんでやれるのか？」
　ドレンが心配して尋ねる。意外と余裕があるようだ。他の二人は自分の事に必死で、そんな余裕は無い様に思える。イシガヤは、「やはり、他の三人を連れてくるべきだったか？」とも少し思ったぐらいだ。
　「大丈夫だ。ちぃっと酔っちまうかもしれんが・・・たいした問題はない。ん？ナリッジ、進路右へ１５度！艦砲がくる。」
　ナリッジは、少々ぎこちなく右へずれる。その３秒後、さっきまでのナリッジの進路にビームが走る。そのままの進路であったら、確実にオダブツだ。
　「俺が敵陣に切り込む。お前たちは俺の攻撃で動きを止めたのを確実にたたけよ。じゃな！」
　イシガヤがひとり先行をする。最大加速で一直線に、マシンガンをばら撒いてだ。傍から見ると、自殺行為にしか見えない。案の定、敵 MSからビームが放たれる。
　「少尉！」
　リンはそう叫ぶが、杞憂に過ぎない。イシガヤは寸前で直撃を免れる。ビームの粒子が肩アーマーに数個の穴をあけるが、たいした損傷ではない。
　「リン、心配すんな。それより敵を確実につぶせ。」
　そう言ったイシガヤは、ジムに体当たりをする。敵艦の射線上にだ。そして、マゼランのビームは、ジムを蒸発させる。彼はその勢いに乗って、マゼランの艦橋にけりを入れ、ヒート剣を２ど振り下ろす。艦にとってはそれなりに致命傷となる。指揮系統がやられるからだ。だが、イシガヤ機も、対空弾幕で腕と肩のシールドを損壊した。これでも、対艦接近戦では少ない被害だ。だが、敵艦に一撃を与えた事により、敵の MSにマークされる事となる。予定どおりだ。コクピットに付いている計器類に火を入れる。
　「ジオンの子悪魔、貴様等の魂、いただきに参った。うぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！」
　通信ジャックシステムが、敵の通信機の回線を奪う。彼らのスピーカーからは、公用語で無い日本語と叫び声が流れる。これで約半数の敵機が混乱に陥る。戦場での混乱は、そく死につながる。
　「レイチェル。敵残存数は？」
　「MS が２機とぉ、ボールが２機ぃ北の方にいますぅ。それとぉ、艦砲射撃をするそうですぅ。」
　「そうなのか？サクラ。」
　「はい、ブラック少佐から伝言です。MS隊は、敵 MSを撃滅。春菜でマゼランを沈める。だそうです。」
　「了解した。MS隊、味方の射線から離れろ！」
　イシガヤ隊が離れると、春菜から大量のビームが放たれる。
　「イシガヤ、敵機発見。なんて MSだ？」
　「・・・スナイパーか！全機回避！・・・いや、突っ込んで接近戦でたたけ！少しの被弾なら気にすんなよ！」
　だが、最初に突っ込んだイシガヤが、最初に被弾する。片腕を無くしたが、怯まない。まぁ、それもナリッジへの直撃を免れるためだったが。
　「やらせん！」
　その後、数発攻撃を食らったが、牽制は成功する。MS はドレン、ボールはリンとナリッ

ジが片付けた。

「艦長、サイド６への入港準備できましたが・・・。」
「あぁ、どうした？」
「はい、相手から、戦闘後一日は入港するのは避けてくれと・・・。」
「・・・・・・そうか。こっちは急ぎのようだからな・・・。そうだな、口が硬そうな奴は・・・ミネルバか？いや、あれを持たせるには・・・ダメか。じゃあカスミ君か？それも嫌だな。そいじゃあ・・・。」
一考したあと。
「ミネルバ、ユミをコムサイへ呼べ。急いでな。俺も少し席をはずす。」
「ユミ上等兵入ります。」
ユミが入ってくる。
「なんでしょうか？」
「うむ、すまんがこいつを持ってってくれ。中は金塊だ。まぁ、いわゆる賄賂って奴だな。重要任務だ頼むぞ。」
元連邦兵の彼女にいう。金塊は、トランクいっぱいである。
「・・・少尉、私に任せて良いのですか？」
彼女は少し不安げにそう言った。
「私は元連邦兵です。もしかしたら、これをもって逃げるかもしれませんよ。」
「まあな。だが、俺は君を信じている。そうでなきゃ、俺の艦に呼んだりはしない。それに・・・もし逃げるとしたら、別に探索はしない。そのときは、金塊をジャブローでの謝罪料だと思ってくれ。」
彼は本気でいっているようだ。
「それと、寄航後２日の休暇を与えるから、家族とかにはそんとき手紙でも出すといい。まぁよろしく頼む。」
「分かりました。そこまでいわれちゃしょうがないですね。任せてください。」
基本的に真面目な彼女は、素直に快諾してくれた。彼女が小型艇で出発してから、無事４０分後に入港が完了した。

「因果なものだな、フラナガン博士。この中立コロニーも、裏では金がものをいう。ところで、いったいなんの用なのです？」
フラナガンの目は少々輝いている。そう、実験を楽しむ科学者の目だ。イシガヤはブラックを伴ってきたのを後悔した。
「・・・キシリア少将か・・・だが、ブラック少佐の能力では、ビットの遠隔操作は難しいぞ。」
「はい。ですが、ブラウブロタイプなら問題はありますまい。それに、キシリア少将は必要ならば強化せよと。」
科学者馬鹿のフラナガンはそう言った。
「・・・この戦は負けか・・・人体改造とはな。」
うすうすだが気付いていた事だ。ジオンと連邦軍の戦力差はすでに埋められて、いや、すでにジオンは連邦軍の物量に押されている。このようになる事は開戦当初より感じてはいたが、そうならないように毒ガス作戦の一部も指揮したし、前線でも精一杯戦ってきたつもりだった。しかし、戦争というというのは、人一人の力ではどうにもならないらしい。それは、まだ若い彼には歯がゆかった。だが、ブラック少佐を改造されるわけにはいかない。彼の第六感がそういっていた。

「強化は必要ない、とりあえずは少佐の能力テストだ。二日後にはここを出る。良いな。」
「はい。それとイシガヤ少佐にはこれが・・・。」
白い封筒が渡される。彼は苦い顔をしてそれを開く。中にはひとりの連邦将校の名が書かれていた。
「了解した。俺はこれで失礼させていただく。」
イシガヤは隣の部屋にいたブラックにあいさつすると、足早に去っていった。司令所には敵将校の暗殺命令が入っていた。

・　ジオンの子悪魔

「少佐、お久しぶりです。」
「ああ、ハロルド軍曹。他の奴等はどうなっている？」
「はい、信用できる奴は潜入に使います。その他は、いざというときの捨て駒に。」
暗殺部隊のハロルドは、すでに部下を人とは思っていない。彼にとっての部下は、ただの駒なのだ。そして、イシガヤもそう思わざるをえなくなっている。暗殺者というのはそう言うものだ。
「ターゲットはどうした？」
「はい、サイド６に入港しているマゼランタイプにいるそうです。とりあえず、潜入員として５人を選び出しました。」
「了解した。午前１時半に作戦を開始する。それまでは待機だ。」
彼は、その数分後、春菜に公共通信で春菜に電話をかける。基本的にはムサイに電話がある訳ではないのだが、彼は、ここについてすぐに電話回線を引かせたのだ。なまじ無線を使うよりは機密が守れる。色々と接触をとるところがあるためである。サイド６内では、むやみに軍の無線や電波回線が使えないのだ。こうゆうことは、暗殺部隊も指揮する彼の経験上の知恵である。
「ミネルバ、三交代制でみんなに　２日の休みをとらせとけ。ちゃんとここの法律を守らせろよ。あと、２０日の朝７時には出発できるようにしといてくれよ。色々と手続きもあるからな。分かんなけりゃ、担当員に聴いてくれ。雇ったから送っとく。それと俺は、出発の朝までに帰る。万が一帰らなければ、お前に艦長職を譲る。そんときは、ソロモンに向かえ。まぁ、ブラック殿もいるから問題ないだろ。ついでに、そんときは俺の金はみんなお前たちにくれてやる。じゃあな。」
「ちょっと待ってください。少尉に・・・何があるんですか？」
「極秘任務だ。お前たちを信用はしているが、このことは知らない方が良い。命にかかわるかんな。みんなには、誤魔化しといてくれ。」
イシガヤはそういって回線を切る。
「さて、ハッキング開始だな。」
そういうと、マゼランの停泊している港に向かう。敵艦に侵入するためには、それなりの準備が必要なのだ。まずはセキュリティシステムと電源である。しかし、案外中立コロニーのセキュリティは硬いのだ。気付かれないようにコンピューターシステムに細工をするのは難しい。さすがのイシガヤでも一日でできるかは怪しいものだ。
「簡単だな。」
心配は無用であったらしい。思ったより簡単に侵入に成功した。彼はそこにトラップを仕掛ける。午前１時１０分に、艦の電源を全て落とすようにだ。ただ、索敵用のレーダーのみは生かしておく。それさえ生きていれば、たいがいのものは安心するのだ。この宇宙では、MSや艦艇を恐れても人を恐れたりはしない。それが命取りとなる。作業は１５分で終わった。

午前一時
「少佐、準備完了しました。」
「よし、悪いが、お前等は見張りを陽動してくれ。ついでに、コロニー公社の奴に変装して、整備と称してエンジン部に細工しといてくれ。俺ひとりで潜入した方が良い。女はいるな。そいつで見張りの目をそらす。」

女性兵に命令をする。コロニー公社の制服を改造した、挑戦的な服装をさせ男の見張りに近付ける。そいつがあくまで公社の仕事を装い、そのまま男たちに近づいてコンテナの影にいく。そこでそこ男と相手をするように見せかけて、照明が切れたときに催眠ガスを使い眠らせるという策だ。たいがいの奴はそれですむ。万が一のときは作戦を変更して、見張りを射殺するしかない。どちらにせよ、たいした問題は無い。そう言った状況もいくらでも乗り越えてきたのだ。しかし、どうやら杞憂に過ぎなかったようだ。
「うまくいきましたね。御武運を。」
ハロルドがそう言った瞬間、この周囲の全ての照明が落ちる。イシガヤはたやすく艦内に侵入が出来た。暗闇のため、カメラに見つかる事も無い。彼はマゼランの通気口に侵入する。このブロックは無重力であるため、対して苦労はしない。そして、狭いのも、小柄な彼にとっては何の支障もきたさない。
「フッ、甘いな。何のセンサーも無い。ん、ここか。」
目的地であった艦長室の通気口から部屋を覗く。少々部屋が暗いので、暗視カメラで内部を撮影する。こいつは特製であり、撮ったものを自動的に解析できる。ただ、１分撮影するにつき４分は時間がかかるので、それまでは暗視ゴーグルによって内部を観察する。
「・・・・・・なんともな。女の匂いのする部屋だ。だが、ちょうど良い。」
ちょうどそのとき部屋の扉が開かれる。ここの艦長と多分このコロニーの娼婦であろう。イシガヤは懐から青酸性の毒を取り出す。その間にその二人は始めるようだ。イシガヤは部屋に置いてある女の服にその液のついたカプセルを気付かれないように糸を使いいれる。その女に罪をかぶせるためだ。少々良心が痛んだが、まぁ、これくらいの事には目を瞑らなければいけない。戦争なんてそんなものだ。そして、ドライアイスで作られた毒針を取り出す。なるべくすぐには証拠が残らないようにするためだ。すでに出港準備を整えているこの艦が発進するまでの間でいいのだ。それに、この高官は、出港には艦から出ていることになっているので、出港が中止になる事もない。そして、出港したところで気がついたとしても、エンジントラブルを起こしたこの間はイシガヤの艦に沈められるのだ。イシガヤはいつもどおり高官を暗殺し娼婦を眠らすと、さっさとマゼランから離れた。子供のころからキシリア・ザビにそう仕込まれたのだ。これくらいはたやすい。

「春菜発進！前方にマゼランがいる。それを追跡撃破せよ！」
「了解しましたぁ。索敵開始しますぅ。」
「取舵三十。少尉のおっしゃる地点への最短コースを取ります。」
「ミサイル発射準備完了。ビームはどうすんです？」
「フライト、ビーム砲に何か問題があるのか？」
「ランスです。フライト軍曹に代わります。現在一番砲等、二番砲等共に使用不可能です。というより、二番砲等は右方向３０度以上へは回転不可能です。一番砲等の方は現在調査中です。」
「ふーむ。おかしいな。ブラック少佐、俺の留守に怪しい人影を見なかったか？」
「確認している。現在捕らえて尋問中だ。この分だと接触までに３０分。尋問に行って来るといい。」
「そうか。ありがとさん。指揮は任せる。」

「おいマリア、ユミ、いったいどうなっているんだ？」
「尋問しているのですが、なかなか口を割りません。」
「少尉・・・どうします？」
「女か。よくもまあこれだけ壊してくれたもんだ。」

「・・・」
「自白材は？」
「それも使いましたが・・・」
「一流、いや二流の工作員か。一流だったら捕まりゃぁしないしな。」
「ユミ、俺の部屋から銀色のトランクをもってこい。」
「はい。」
・・・
ユミがトランクをとりあえずイシガヤに耳打ちする。
「・・・少尉、少尉の部屋に私の名前の書いてあるビデオが転がっているんですが？」
「ん？ああ。」
「エクアドル、キトって・・・もしかして。」
「・・・お察しの通りお前のビデオだ。エクアドルにいたときにビデオにもとられていたらしいな。まあ、一応あれ見てお前のいること知らなかったわけだし。」
「少尉になら・・・まだ・・・良いんですけど・・・・・・コピーしてませんよね？」
「もちろんだ。ほかの奴に見せるにゃぁもったいない。ところでマリア、その赤いサンプルだ。自白材より強力な奴だ。命の保障はないがな。それでもはかなきゃあ拷問も許可する。指を切り落としていったり強姦させたりしてもいいが、お前らが取調べんのにそれはいやだろ？まあ、どちらにせよ、コーウェンの手の者だな。しかし、何でこの間に進入したのかは絶対に聞いておけ。俺の事でなんかしゃべったら、他の者にはいうな。そうだな・・・尋問はユミに変わってくれ。」
「なぜでしょうか？」
「下手をすると、お前を射殺しなければならん。」
「どうして私ならいいんです・・・もしかして。」
「ご名答。お前のことは特に信用しているからだ。」
本当は違う。万が一のときに射殺してももとは連邦兵だからだ。それに、ユミにはそんなことしなくても自分の思うようになると思っているからだ。いくら鈍感なイシガヤでもユミの気持ちに気付くが、別に思うところがあるので気付かないふりをしているに過ぎない。
「マリアは退出せよ。さて、早く始めろ。」
ユミは捕虜に薬を注射する。さすがにジオンの中でも屈指の能力を持つキシリア配下の工作員の使う薬だ、効き目は早い。
「・・・コーウェン・・・中将は・・・・・・サイド６に入港したムサイ・・・を壊せといいました。危険な・・・人物がいる・・・・・・・としか聞いていません・・・。」
「ほう、コーウェンがな。しかし、なぜこのムサイに重要人物がいると分かったのだ？」
「・・・・・・」
「ユミ、電流を流せ。」
彼女はしぶしぶながら電流を流す。
「かはっ！」
「もっと上げろ。」
ユミはこういうことに慣れていないために戸惑ってしまう。そもそも、彼女はこういうことが好きではない。自分が捕虜だったときのことを考えると、かわいそうに思えてくるのだ。
「少尉、これ以上上げるのは・・・。」
「上官命令だ。しがない通信兵だったお前のときとは状況が違うんだ。こいつは諜報部だぞ。」

　諜報部のものは、何かと情報をもっているものが多数であり、なまじ情けを掛けては後で自らの命が危険にさらされるのだ。そのことは諜報部であるイシガヤが良く知っている。
　「はい。」
　しぶしぶながら強くする。
　「ギャァァ！」
　「どうして分かった！」
　「サイド６に向かわせたアンドリュー中佐は・・・囮。おそらく暗殺者は敵艦に居るだろうと・・・。」
　「暗殺者の名は？」
　「・・・・・・」
　イシガヤはユミに手で電圧を上げるように指示する。
　「うぅ・・・・・・ハ・・・ハロルド・・・。」
　「知っているのはそれだけか！」
　「はい。」
　パン！
　イシガヤは、その瞬間彼女の額を打ち抜く。生かしておくわけにはいかないと判断したのだ。イシガヤの副官の名を知られたのは痛い。ただ、イシガヤのことは知らなかっただけましだ。
　「少尉・・・・・・」
　「後始末は任せる。誰にも言うなよ。」
　呆然としている二人を後にして、艦橋に戻る。

　「どうだった？」
　ブラックが尋ねる。
　「射殺した。」
　それ以上は尋ねない。イシガヤが明らかに殺気立っていたからだ。この手の人物は、あまり刺激しないに限る。
　「部屋にでも居るといい。指揮は任せろ。」
　「ああ、敵はこちらの情報をもっているかもしれん。いつも以上に気をつけてくれ。」
　しかし、ブラックの采配である。敵はあっという間に殲滅された。

・　ソロモン攻略戦

「もう始まっているな。」
連邦軍も反抗作戦によりここソロモンにも大量の軍勢が攻めてきている。ブラック達第十四艦隊は、キシリア少将の命により援護にきたのである。元々ソロモンに用が有っただけに、開戦から３０分で到着する事が出来た。
「イシガヤに状況確認を急げ。」
通信士が、２番艦艦長であるイシガヤに尋ねる。彼の情報収集能力は目覚しく、なまじ司令室に聞くより正確な情報が手に入る。彼の艦はムサイタイプであるが、通信索敵能力は大幅に改造されていてもとのものとは全くの別物である。
「敵の先発隊が攻めてきているようだが、敵の本隊が暗礁空域に集結しているようだ。先発部隊にはあのガンダムが居るようだが、まぁ、何とかなんだろ。ガトー大尉も白狼もいる。それより本隊の方だが、どうやらソーラシステムっていう新兵器を使うらしい。俺の持っているデータは今送った奴だが、この破壊力や攻撃範囲は分からん。」
「鏡・・・か？」
「あぁ、でかい鏡で太陽光を収束して、その熱で攻撃するやつだ。」
「確かに破壊力は不明だな。鏡の量や向きにもよる・・・。」
「艦長、マゼラン艦一隻、サラミス艦３隻接近中です。護衛 MS十八機！」
そんなやり取りの間にも敵は侵攻してくる。
「MS隊発進。更級、春菜はソロモンの裏側に回る。各機、護衛を。」
敵はすでに MSを発進させているため、こちらの方が明らかに不利だ。それに、艦艇にしても MSにしても向こうはこちらの倍ほどの戦力である。
「ライ B.S少佐専用ザクです。」
更級の MS隊は、ライの乗るブラック少佐専用機を先頭に、ドメス、ドレンがドムに、ケビン、オーウェンがザクで、全ての MSが発進した。春菜からもイシガヤのグフを先頭にカスミ、ミキ、シオンが出撃している。
「こちらライ、各機散開せずに敵の迎撃に当たってくれ。イシガヤさんやドレンは主に敵機のかく乱を頼みます。」
「了解した。ドレン、俺に続いてくれ。ミキ少尉はカスミ君とシオン少尉の防御を頼む。ミネルバ、艦は任せる。」
二機の MS は最大戦側で敵部隊の中心に突っ込む。二人とも戦闘機の扱いはプロなので、MSで最大戦速で突っ込む事には何の恐怖も覚えない。彼らにしたら、MSの速度は遅すぎるくらいなのだ。ただイシガヤのほうは、被弾はしないものの見ていると危なっかしい。
「ドレン、俺が先頭で合図をしたら上昇する。お前は降下して下からとどめをさしてくれ。目標は先頭機。奴が指揮官機だろう。」
イシガヤはそうドレンに指示をする。
「分かったぜ。しかし何で奴が指揮官なんだ。」
「奴の一番通信量が多い。たいがいはそいつが指揮官だ。」
「じゃあ、こっちの指揮官がライだって相手にもわかんのか？」
「多分大丈夫だ。この部隊では俺が一番通信している。ライに囮っていわれた以上、指揮官を装ってできるだけ敵をひきつけないとな。」
そのためにイシガヤは意味もなく味方機に通信を送っているのだ。春菜の乗組員はそれに慣れているので気にする事も無い。だが、イシガヤの策とは分かるはずもなく敵機はむざむざとイシガヤ機に集中してきている。第一、イシガヤ機はグフである。遠目にも目立

つ。
「ドレン！」
イシガヤが上昇をかける。もちろんただ上昇するのではなく、敵機の頭を蹴っ飛ばしてだ。そこをドレンが降下しつつ弾丸をぶち込む。頭を蹴られて、まだ立ち直れていないジムをつぶすのには大して苦労はしない。その間にイシガヤは一機のジムを殴り飛ばし、さらにもう一機に体当たりを食らわせている。それをすかさずドメスとシオンが打ち抜く。続けて敵艦と味方艦の射線上に向かう。MS戦に慣れていないらしい連邦パイロットは、彼の機体についてくる。それをブラック少佐やドメス、カスミ少尉が見逃すはずが無い。
「各艦砲撃開始。春菜もだ。目標敵艦。」
ブラックはイシガヤが先行している事になど気にも止めない。経験上、これくらいなら殺しても死にそうに無い事が分かっているからだ。カスミ少尉にしてもそれくらいの事は知っているので構わずに撃つ。それに、撃てといっているようにも思えたからだ。数ヶ月も同じ艦内にいれば、それくらいのことはわかるものだ。ただ、ドメスのほうは躊躇してイシガヤ機より少しはなれた敵の撃墜に専念した。
「うぉとっと！」
イシガヤ機は味方の砲撃を二、三発かすったものの回避に成功した。だが、敵艦と集結していた敵機の大半は、突然の事に回避することができずソロモンに大輪の花を咲かせた。
「少尉、大丈夫？」
「あぁ、たいしたこたぁ無い。さっすが俺、このまま敵艦隊を壊滅だ！」
「馬鹿言ってないで．あっ、後ろ！」
「分かっている！」
ミキ少尉に言われて、イシガヤは後ろに迫っていた敵をまたしても蹴り飛ばす。とりあえずそれで一機の攻撃は防いだが、続いてもう一機が迫っていたのでそのビームサーベルを右手のシールドで防いだ。それをカスミ機が動きをとめた敵機をガトリングでとどめをさす。かなりの距離であるのだが、イシガヤには一発も当てず、敵のみを破壊する。彼女の射撃能力はこの数ヶ月でそうとう上昇し、すでに黒い竜巻の異名を取るブラック少佐に並ぶものになっている。
「助かったぜカスミ君。」
「少尉、軽口たたいてないで集中して。」
「了解、了解。」
彼女の忠告も彼にはあまり効果が無いようだ。
「イシガヤ、もうすぐソロモンの裏に回れる。艦の近くで護衛を頼む。ライは一度帰艦しろ。激戦になる。私に変われ。」
「了解した。ケビンがやられたようだな。」
「あぁ。」
「さめてんな。だが・・・被害がそれだけですんでよかったな。」
確かにさっきの戦闘で、ザク一機しか被害にあっていないというのは奇跡的ともいって良い。何せ、相手の戦力はこちらの倍であったからだ。戦果は相手の戦力の８０パーセントといったところだ。残った奴は撤退をしていった。
「後３分でソロモンの傘に入るな。カスミ君、遅れているぞ。」
「すみません。」
「あぁ、気をつけてくれ。隊列から外れると狙われるかも知れんからな。君は俺と違って不死身じゃあない。」
「って、少尉も不死身じゃあないでしょ。」
「まあまあ、細かい事は気にすんな。第一俺には強運がある。ん、何だ？」

　イシガヤは、なにか頭を引っ張られる気がした。
　「イシガヤ・・・何かへんだ。」
　ブラックも何か感じているらしくイシガヤに連絡してきた。
　「イシガヤ、暗礁空域の方だ。調べてくれ。」
　イシガヤは急いでそちらの方を調べる。遠かったためにグフのセンサーを春菜のセンサーにリンクさせる。調べたデータはリアルタイムでブラック機のコクピットにも映し出されている。
　「鏡か・・・？」
　「まずい！ミネルバ、春菜全速前進。限界速度でソロモンの影に入れ！」
　「ですがエンジンが・・・。」
　「かまわん！エンジンくらい壊れても良い。急げ！」
　イシガヤが、悲鳴に近い声をあげる。
　「更級も春菜に続け！」
　ブラックも同じように命令する。
　「っう！カスミ！なにやってる。急げ！」
　カスミ機とオーウェン機が少々遅れている。イシガヤは最大戦速でカスミ機に接近する。その間に、ソーラレイシステムの照準がソロモン空域にあわせられているようだ。コクピットに映し出されている映像で分かる。ブラックは、それをソロモン司令部に伝えようとしているのだが、ソロモン司令部への回線が混雑していて伝えられないでいる。
　「イシガヤ来るぞ！」
　ブラックがそう言ったあと、ソロモンを閃光が包む。その幾百の光の多くは、モビルスーツの爆発する光である。同じように多くの艦艇も沈んだが、更級、春菜の二隻は寸前でソロモンの影に入っていたのでたいした被害はなかった。更級にソロモンの破片で少し傷がついただけである。
　「レイチェル、はやく艦長とカスミ少尉の機体を探して！ここからは視認できないわ！」
　ミネルバは少々パニック気味に命令する。ソーラレイの攻撃があまりにも強力すぎて、状況が確認できないのだ。モニターには焼かれたソロモンが映っている。
　「えぇ―とぉ、レーダーが一時機能していません。」
　「ミネルバ副艦長ぉ、更級からオーウェン機がやられたといってきましたぁ。でもぉ、少尉はまだ見つかんないそうですぅ。」
　「と、ところでなんであなたがオペレーターもやっているの？」
　確かに索敵手であるレイチェルがオペレーターをやっているのは不思議だ。本来ならサクラの仕事である。
　「何でってぇ、サクラさんは倒れてしまってぇ、今マリアさんにぃ医務室につれていかれましたよぉ。」
　「で、サクラは大丈夫なの？」
　「はいぃ、軽い脳震盪だそうですぅ。」
　「じゃあ大丈夫ね。MS隊は艦の周辺を調べて。損傷があるかもしれないから。」
　ミネルバはそう通信機に命令する。
　「ミネルバ、少尉とカスミちゃんまだみっかってないよ。」
　「えっ、」
　ミキ少尉が的確に注意する。
　「ミネルバはちょっとパニクッてるから私が代わりに指揮するね。ランス、少尉の機材使えばこの空域に通信流せるよね。」
　「はい、できますぜ。」

「じゃあ、私のコクピットに回線つないで。」
ランスはすぐに指示に従う。これくらいの機材なら、ランスにも十二分に扱える。
「えーと、イシガヤ少尉、イシガヤ少尉、返事してください。宇宙なのにグフに乗ってる奇人変人変態のイシガヤ少尉。いたいけな可愛い子羊のカスミちゃんをさらっていった狼のイシガヤ少尉、返事して―。」
「ちょっと待て―！！！ミキ、なんてこと言うんだ！俺がいつカスミ君をさらったって。そんないいかげんなこと言うなっつうに。それに奇人変人は否定はせんが、たぶん変態じゃあない！」
イシガヤは最大戦速で戻ってきた。
「あっ、やっと戻ってきた。」
「ったく、俺の機材をこんな風に使いやがって。あれじゃあ全国放送だぜ。」
「だって、カスミちゃんさらってどっかいっちゃうんだもん。仕方ないじゃん。」
ミキ少尉が、いたずらっぽい笑みを浮かべながらいう。
「だー――！さらったんじゃあない。遅れてたカスミ君と一番近いソロモンの影に入ったんだ。しかも、戻ってこようにも MS部隊に邪魔されてやっとの事で帰ってきたんだ。」
イシガヤは必死で反論する。彼はすでに興奮気味らしく、ミキ少尉に遊ばれていることに気付いていない。
「イシガヤ、敵機接近中だ。防衛戦に移れ。」
ブラックは、そんな彼らに忠告をする。ちなみにカスミ少尉はすでに防衛戦に移っている。
「わっ、わりい。今行く。」
イシガヤとミキは慌てて味方機に近付く。
「イシガヤ、被弾したのか？」
「まあな。ソーラレイでシールドが両方溶解した。だが、他は大して被弾はしてない。カスミ君のほうは無傷といって良い。」
おそるべき強運である。

いく時が経っただろうか。
「艦長ぉ敵機接近中ですう。ジムタイプ３ガンキャノンタイプ２ですぅ。」
「ナリッジ、お前は弾切れだろ。帰ったらシオンと交代しろ。カスミ君とミキ君はさっきまで休んでたから大丈夫だな。」
「えぇ、それよりイシガヤ少尉はほとんど休んでないようだけど大丈夫なの？」
「まあな。こんなときに休んでいられるほど神経太くないからな。動いていた方がらくだ。シールドもくっつけたし問題無い。」
「付けたって・・・本当にくっつけただけじゃない。」
「大丈夫だ。敵の攻撃なんぞ感で防げる。」
そんなことを言っていると、ブラックより通信が入る。
「イシガヤ、ソーラレイとは違うが・・・何か強い力を感じる。」
「あぁ、分かっている。前に戦った事がある奴だ。たぶんニュータイプだ。あん時は赤いセイバーフィッシュに乗っていたが・・・今回はジムタイプみたいだな。それに、同じような奴があと４人いる。」
イシガヤは顔をゆがめる。赤いセイバーフィッシュのパイロットの腕はすごい事を二回も経験しているからだ。そんな奴が全部で五人もいると思えばはっきり言ってこの部隊で対処するのは難しい。たとえば、ナリッジとリンではあっという間に撃墜されるだろうからだ。カスミ、ミキ、シオンなら、一騎打ちになってもなんとかやりあえるとは思うが、

それでもやはり二人一組で戦わせないと危ないだろう。この部隊でまともに一騎打ちで敵を倒せるとしたらブラックただひとりであろう。フラナガンの調べによると、彼の NT能力は大して高くは無く、ビットを使うレベルにはいたらないが、下手に強化したものよりかは高いということが分かっている。それに、シミュレーションでも一度赤い彗星を撃墜しているのだ。
「各機攻撃準備。、どういう策をとる。」
「あぁ、ブラックが赤い奴。あとは・・・俺が手前のジムタイプ。カスミ、ミキは左のジムタイプだな。シオン、ドレン、ドメスは後方のキャノンタイプ。ってとこじゃないか？」
「無難な策だな。よかろう。しかし、私が赤いやつとやると、指揮がおろそかになる可能性があるが？」
「そんときはライがいる。お前でなくても何とか持たせられるだろう。第一、お前くらいしかやつは倒せん。」
「・・・ふむ。」
「各機、敵を撃墜しようとは思うなよ。それなりに被弾させて追い払うだけで良い。相手は、下手なエースパイロットより強い。まぁ、撃墜数４０以上のパイロットと考えれば良い。」
「イシガヤ、なんでそんな奴がいんだ！だが、俺様にかかればそんな奴撃墜してやるぜ。」
「ドレン、その考えは止めといた方が良い。いくらお前さんが強いからって、相手はそれ以上に強い。なにせ NTだ。」
そう言うと各機は最大戦速で敵に向かう。敵機とは約一分で接触した。

ブラックは敵を捕捉すると同時にマシンガンを放つ。以前の戦いで敵の回避能力を知っているため、当たるとは思っていない。だが、敵のほうの射撃能力は大して高くなかったのだ。射撃戦に持ち込めば勝てるはずだ。それに、ザクマシンガンの連射なら当たる可能性は高い。
「ちぃ！あの黒い機体やるな。以前やったことがある奴だ。あの黒い三連星か？」
赤いジムコマンド改のパイロット、レッドはすぐにその考えを追いやる。黒い三連星はガンダムに落とされているのだ。こんなところにいるはずが無い。そして、すぐに黒い重武装ザクのパイロットが NTであることに気付く。
「マキタ！黒いザクのパイロットは NTだ。そっちは？」
この部隊の隊長であるジムパイロットのマキタ中尉に連絡を入れる
「かなりの腕だけど・・・NTでは無いようだよ。ブレイクの方はどうだい？」
「こっちも NTみたいだ。変わった機体に乗っている。」
「何だ？」
「グフのようだ。こんなところでグフを見つけるなんて驚きだ。だが、敵の NT能力はとても低い。」
そんな無駄口をたたいている間にレッドは肩にミサイルを食らう。
「ちぃ、ぬかった。」
ブラックはひたすらに弾幕を張る。彼の戦い方は、一斉射撃により敵機を撃墜するというものだ。普通のエースパイロットは無駄弾を使うのを嫌うが、彼はそんなことには気にしない。そんなことをいちいち気にしていては、生き残る事は難しいのだ。それに、彼の回避能力はそこまで高くは無いので、赤い機体に近付かれたらまずいのだ。
「ドレン、そっちはどうだ？」
「あ、ああ。敵が強すぎる。ドメスの射撃もシールドで防がれちまって。それに近づこうにも近づけない。」

　ドレンは敵機に最大戦速で接近を試みる。しかし、
　「ぐわっ！」
　彼のドムの左手が飛ぶ。しかし、そんなことで泣き言もいってられないのでそのまま突っ込むが、二機の集中放火を受けて機体はボロボロである。それでもキャノンに一撃を入れる。彼の突きの攻撃は、どうやら敵の駆動系に大ダメージを与えたようだ。敵機の動きが著しく低下する。しかし、ドレン機にはとどめの一発が撃ちこまれる。彼の機体の脚部に直撃が与えられると、数秒後に爆発をする。通信から彼の無事は確認できたが、彼を回収している余裕は無い。シオンがさっきの一機にとどめを刺したからといってまだ一機が残っているのだ。そのときシオン機に通信が入る。
　「シオン無事か！爆発が確認できたが・・・。」
　「えぇ、ドレンさんが撃墜されたようです。ですが、生きている事は確認できました。」
　「そうか・・・わりい、通信をきる。」
　イシガヤは迫ってきた敵の攻撃をシールドで受け流す。敵の攻撃は十二分に正確ではあるが、彼の防御能力はそれ以上に高い。
　「こいつぅ、こんなところで足止めされるわけにはいかないんだ。」
　イシガヤの後方ではカスミ少尉とミキ少尉が激しい攻防戦を繰り広げているのだ。二対一ではあるのだが、劣勢に見える。彼にとって、こんなところで彼女等を失うわけにはいかないのだ。万が一そうなった場合には、彼もこのソロモンで戦死するつもりである。
　「くたばりやがれ！」
　イシガヤは、自機の被弾も気にせずグフを突っ込ませるとヒート剣を一閃する。それにより敵機の両足が胴体より分離し爆発する。敵機は戦闘続行の危険を悟ったのか撤退していった。しかし、その前方でまたも爆発が起こる。
　「シオン、なんだ！」
　シオンが慌てて応答する。
　「はい・・・ドメスさんも落とされてしまいました。少尉、援護頼みます。助けてください！」
　イシガヤは舌打ちしてシオンのもとに向かう。本来ならカスミ少尉たちのほうに向かえるはずだったのだ。そちらの方もかなり苦戦している。しかし、数秒後にはシオンと合流できた。
　「シオン、お前はドメスとドレンを回収しろ。こいつは俺が落しとく。」
　イシガヤはまたしても突っ込む。かなりむしゃくしゃしていたのかまず数発殴りつけ、さらに蹴り、気づいたときにはコクピットにハンドマシンガンをぶち込んでいた。
　「はあ、はあ、いつの間にかやっちまったな。シオン、お前は二人をつれて帰艦しろ。結構被弾してるからな。」
　「私のほうはたいしたことはありませんが・・・少尉こそ大丈夫ですか？追加装甲は完全に破壊されていますし、頭なんか無いじゃないですか。」
　「大丈夫だ。サブカメラも有る。俺はカスミ君とミキ君のとこに向かうから。まだ戦えるなら、二人を艦に届けたあとに少佐のとこに向かえ。リンとナリッジには代わるな。奴等じゃ落とされるのがおちだ。」

　「１５分か・・・。」
　ブラックはいまだに赤い機体と戦っている。この１５分の間に敵と味方の機体がこの空域に侵入してきたが、それらの全ては彼と赤い機体によって撃墜されている。ちなみにブラックが９機、赤い機体のほうが４機だ。それでも彼らはいまだに戦い続けている。彼らの集中力は非常に高い。

「・・・弾切れか。」
　弾幕を張りすぎて、ブラックの弾丸はあと少ししかない。後は MS用の拳銃に６発が入っているだけだ。
「やつめ、やっと弾が切れたか。接近戦なら負けはしない。」
　レッドは黒いザクに接近する。ブラックのほうでもこれ以上無駄弾を撃つわけにはいかない。ヒートホークに持ちかえる。
「おちやがれ！」
　レッドはビームサーベルを振り下ろす。しかし、それは黒いザクのヒートホークによりとめられた。勝てると思って油断していたために頭部に弾丸を撃ちこまれる。黒いザクのパイロットは右手で攻撃を受けながら左手でそれをなしたのだ。首筋に悪寒が走る。
「頭部が・・・だが！」
　レッドは黒いザクにけりを入れる。黒いザクは受けきれずに後方に吹っ飛ぶ。そこにビーム砲を叩き込む。ザクの右腕がもぎ取られたようだがそれ以上の被害は与えられなかったようだ。
「とどめを！・・・なに！」
　レッドは攻撃を中断する。またしても敵機がこの宙域に侵入してきたのだ。半壊したこの機体で目の前のザクとほかのザクタイプ７機を相手にするのは難しい。それに、迫ってきたザクの一機は真っ白い機体である。少なくともエースパイロットであろう。彼は自らの危険を感じると撤退していった。
「そこのザク大丈夫か。」
　白いザクから通信が入る。
「はい。」
「なかなかいい素養をしている。名は？」
「ブラック・スターといいます。マツナガ大尉ですか？助けていただいてありがとうございました。」
「礼には及ばん。しかし、聞かん名だな。所属は？」
「キシリア少将旗下第十四独立艦隊司令、階級は少佐であります。」
「そうか、あのキシリア少将旗下の。いや、失礼した。貴公のほうが階級が上だったとは。」
「いえ、若輩もの故、そんなことは気になされないで下さい。艦のほうが気になりますのでこれで。」
　ブラックは礼を告げるとすぐに艦の方に向かう。
「敬語は疲れる。イシガヤ、そっちはどうだ？」
「少佐か？今カスミ君のところに向かっているところだ。苦戦しているらしい。それと、ドメスとドレンは落とされたがシオンが艦に連れ帰った。破損したなら俺の艦に行くといい。更級では無理だが、俺の艦なら修理可能だ。」
「そうだな・・・たいした修理は必要ないが、一応応急修理はしてもらおう。」
「あぁ、ランスならやってくれる。すまん、敵と接触する。」
　イシガヤが通信をきる。
「カスミ、大丈夫か！」
「なっ、何とか。ミキちゃんのほうが。」
　現在はミキ機とジムが接近戦を行っている。なかなかのものだが、いかにせんミキの方が押され気味である。ただ、カスミの支援もありほとんど被弾はしていない。もっとも、敵機も無傷に近いが・・・。
「キャァァァァァ！」

ミキ機にビームサーベルが振り下ろされる。回避しきれないタイミングだ。
「やらせはしない！」
イシガヤ機がミキ機を押しのける。そのせいでイシガヤの機体に致命傷がつく。しかし、敵がサーベルを振り上げた隙をつき、カスミ機が弾丸をぶち込む。
「たっ、弾が！」
しかしガトリングの弾が切れ、致命傷には至らなかったようだ。
「これまでか！」
イシガヤはミキ機を蹴り飛ばす。その勢いでミキ機は後方に吹っ飛ぶ。グフはそれと反対に最大戦速でジムに取り付く。
「すまんな。カスミ、後を頼む。自爆する！」
「何！ぐわぁ！」
ジムのパイロットマキタはうめき声をあげる。突然機体が激しくゆれ、モニターが光に包まれたのだ。気付くとモニターが完全にいかれている。何事かと思い損傷を確認する。
「損傷箇所多数。約７５％の損傷。自爆したみたいだ。」
マキタも下がらずを得なくなった。
「少尉！カスミちゃん少尉は！」
「えっ、えぇ。じっ、自爆したようです。ミキちゃん、どうしたら！」
「そんな！少尉の無事は確認できないの！」
「そんな事言ったって。私に後を任せるとか言っていた気がするわ。」
「それじゃあ！」
「私たちのせいでイシガヤ君が・・・どうしよう！」
カスミ少尉は少々パニックに陥ってしまったようだ。
「じゃあまず俺を中に入れてくれ。」
「キャァァァ！」
カスミ少尉が悲鳴をあげる。正面モニターにイシガヤが思いっきり映っていたからだ。
「なに驚いてる。」
「少尉、生きてたの・・・。よかった・・・。」
カスミ少尉は泣き出してしまった。イシガヤが自分たちのせいで死んだものと思っていたからだ。
「どうした？」
「だって、後を頼むなんて・・・言うから・・・・・・死んじゃったんだと思って・・・。」
「いや、あっ、あれは、俺を拾ってくれといいたかっただけで・・・。すまん、悪かった。許してくれ。」
「けど・・・。」
まだ泣いているようだ。
「さっき言ったろ。俺は不死身だって。そんな簡単に死にはしない。」
イシガヤはなんとは慰めようとする。そこにミキからも通信が入った。
「少尉、カスミちゃん泣かせないでよ。でも、少尉が生きてて良かった。死んじゃってたらどうしようかと思っちゃった。カスミちゃんも元気だしなよ。こいつ殺しても死にそうに無いんだから。絶対ゴキブリよりしぶといよ。」
「ひっでえな。まっ、いいか。カスミ君、とりあえず俺を中に入れてくれ。そしたら春菜に後退。艦の直援をする。疲れたろ。ナリッジ達と代わるといい。」

「少尉、大丈夫ですかい。」
「おう、大丈夫だ。ランス、二番機と三番機の応急修理を頼む。カスミ君悪かったな。

ゆっくり休んでくれ。顔は洗っといた方がいいぞ。泣き顔も可愛かったけど・・・。まぁ、それでも洗っといた方がいいな。」
「もう。」
カスミ少尉は顔を赤くして去っていってしまった。冗談はさておきイシガヤも急いで艦橋に上がる。
「ミネルバ戦況は？」
「春菜は、少尉のグフの損失により約１５％の防衛戦力が低下しています。それと、カスミ、ミキ両少尉の帰艦によりプラス３５％の低下です。しかし、この空域の敵は減少しているので問題は今のところありません。春菜本体は、６％の被弾で主砲塔一基が使えません。それより更級の方は１５％の損傷と MSは残り一機しかなく、それも春菜で修理中です。」
「・・・そうか。春菜は、少佐のザクの修理が完了するまで更級の楯となれ。」
「ですけど、良いんですか。」
「まあな。俺が艦橋にいる限り春菜に直撃はさせない。安心しろ。今までの戦闘でも死者 0名だしな。」
「そんな確証が無い事で。」
「まぁ、どっちにしろそうすっしかないだろ。無防備な更級を守らんといかん。こっちの方が性能がよくてもあっちは旗艦だ。」
更級は基本的に無改造のムサイ艦であり、春菜は通信索敵、対 MS用対空防御能力が改造されている。本来ならばこちらを旗艦にすべきなのかもしれないが、ブラック艦にはイシガヤの通信索敵機器を使いこなせるものがいないのだ。
「了解しました。キース、春菜を更級の前方につけて。」
ミネルバはしぶしぶその命令に従った。

「艦長！ソロモンより通信はいりました。ドズル中将はこのソロモンを退去するようです。この空域にいる戦力はすべて撤退するように言っています。いかがなされますか？」
ミネルバを休ませて艦長席に座っているイシガヤにリーが言う。
「レイチェル、およその戦力比は？」
「えぇとぉ、ソロモンから出されているデータではぁ、だいたい７対２くらいだといっていますがぁ、それより悪化していると思いますよぉ。」
「まぁそんなところか。少佐に連絡入れろ。前衛で頑張ってくれているがもう限界だろ。少佐を回収しだい撤退する。更級のライはなんていってる？」
「はい、クラウン少尉はこちらの指示に従うといっています。」
「そうか、撤退準備急げよ。ナリッジ、リンと協力して防衛ラインを維持しろ。すぐにミキ少尉も出す。フライト、ビーム砲はどうなっている。」
「一番砲塔が使えませんが、他はすべて使えます。敵艦がくりゃあいつでも沈めて見せますよ。」
「艦長、ブラック少佐が帰艦したようです！？艦長あれは？」
春菜の艦の横５００Mを巨大な緑色の機動兵器が掠めていく。あまりの巨大さに艦橋はざわめいた。
「あれはドズル中将のビグザムだ。あれが量産できれば戦局が一変するのだが・・・。」
敬礼をしているイシガヤは、あまりに悲観的な声を漏らす。彼やキシリア少将の読みでは、ここソロモンが落とされるとすぐに次の攻略戦が始まる事になるだろう。それではビグザムを量産する余裕は無いのだ。
「機雷散布開始。春菜はこれよりキマイラ隊と接触するコースを取り、ここ、ソロモン

より離脱する。ランス、MSの修理より艦の修理を優先しろ。マリア、お前は更級に言ってけが人の手当てをしろ。こっちにはかすり傷のやつしかいないからな。まぁ、ユエだけ残しときゃぁいい。こっちは軽傷者３名だけだ。」

・　キマイラ隊

「艦長、ソロモンが陥落しました。ドズル中将は戦死なされたようです。」
「そうか、ミネバ様とゼナ様はマ・クベが救助したらしい。あいつにしては上出来だ。それでリー、あとどれ位でキマイラ隊と接触できる？」
「はい、少尉のデータによるとあと５時間程度で接触できるはずです。しかし、その前にキシリア閣下のグワジンと接触するはずです。というより、さっき暗号通信が入ったんですが、更級と春菜は閣下の艦と接触するように言ってきました。どうなさいますか？」
「コースはこのままでいいんだな？そんじゃあ接触しろ。ランス、艦の修理はどうなってんだ？」
「ランスによると、外装は装甲板が足りないためこれ以上は無理だそうですが、動力系はほぼ完全に修理が終わったそうです。現在は MSの修理に回っているはずです。」
彼はうなずくと自室に戻っていった。グワジンに接触するまでの時間に寝ておくつもりなのだ。艦長席には誰もいなくなっているが、大きな障害が無い限り、自動で艦が動かせるので問題は無いだろう。それに、今はリーが監視も兼ねているから心配は無い。
「イシガヤ少尉、よろしいですか？」
部屋に帰るとすぐユミがドアをたたいた。
「許可する。」
「・・・・・・」
「なんだ？」
「私怖いんです。この間まで連邦兵ですし、助けていただいた少尉以外には気が引けてしまって。それに、キシリア少将は冷酷な方と聞いてますし。もしかしたら私を殺せといわれるかもと思って・・・。不安なんです。こんな不安忘れたいんです。だから、私を・・・」
「却下する。」
「私ではいけませんか！？」
「魅力的な提案ではあるし・・・いけない事もないが、私はこれでも司令官である。部下の不安をなくすのは勤めであるが、かといってそんなことで部下に手を出すわけにはいかない。それに、私には別に思うところがある。」
「カスミ少尉ですか？」
「まあ、そうだな。ともかくそういうわけだ。それに、キシリア閣下はあれでいて優しいところはある。冷酷でない指揮官のほうがおかしい。」
「ですが、少尉は冷酷ではありません。」
「ちがうな。先の捕虜を躊躇もせずに撃ったのを忘れてはいまい。私にとっては日常茶飯事だがな。」
「・・・・・・。」
「お前には話してやろう。コロニー落とし作戦のとき、私は二基のコロニーへの毒ガス注入を任された。俺が指揮したところだけで民間人が数千万人死んだな。この部隊のほかに特務部隊も指揮している。キシリア様直属の諜報部隊の一部と、暗殺部隊だ。暗殺でも１０人くらい殺した。オデッサではマ・クベの部下が襲ってきたから惨殺した。お前を襲ったやつらももちろん殺した。俺は冷酷だよ。」
「そんな・・・。」
「まあしかし、女子どもは敵でない限り殺しはせん。お前は例え元敵でも、今は最も信用する味方の一人だ。安心しろ。それに、俺はキシリア様に拾われたといっても過言ではないが、上官というよりむしろ身内のようなものだ。お前の一人くらい簡単に助けられる。

それに諜報部にいるからな。お前のデータは改ざん済みだ。連邦とは思われまい。それと、俺の階級は少佐だ。ブラックにもカスミ君にも言ってはいない。誰にも言うなよ。」
「わかりました・・・。」
出て行こうとするユミに言葉をかける。
「言い忘れたが、お前に魅力がないわけではない。外見でいえばお前のほうが好みではある。しかし、人のいいお前には俺は統御出来まい。俺は悪党だからな・・・。」
最後は自嘲気味であった。ある意味不安は増えたが、信用はされていることはわかり、殺されることは絶対にないらしい。そして多少なり好意は持っていてくれるらしい。それが少しうれしかった。

「少佐、キシリア閣下の艦隊に接触できました。通信まわします。」
ブラックは無言でうなずく。艦橋勤務のものはもうそれになれたので、気にする事もはくモニターに回線をつなげる。
「ブラック少佐だな。ソロモンでの働きご苦労である。」
「任務ですので・・・。」
彼はただそれだけを返す。しかし、それがキシリアの癇に障ったらしい。
「気に入らんな。まぁいい。お前に任せたい任務がある。私の艦に来い。」
彼はその命にしたがい急いでグワジンに向かう。一応部下が必要と思い、副艦長のライを伴ってだ。

「キシリア閣下、ブラック・スター少佐、ただいま到着しました。」
「はいれ。」
彼らは、円卓中の導かれた席に座る。
「スター少佐、お前に新たに任務を与える。ここにいるものを率いた指揮官になってもらう。彼らの多くはまだ実戦経験が無く、貴様たちには教官としても働いてもらいたい。」
「・・・ですが、私には大任かと。」
彼のいうことはもっともである。彼もまた軍に配属されてからまだ半年であり、それにまだ１９歳という若さである。すでに、更級、春菜の司令となっているだけでもすごい事なのだ。
「貴様ほどの器量があれば一個大隊の司令も可能であろう？まぁ、小規模艦隊であればイシガヤにも指揮する器量くらいあるはずだ。それに、お前の艦隊には艦長を任せられるだけの成績を持つものが多くいる。」
「任務とあらば。」
「それで、話しは変わるがデモンストレーションで真紅の稲妻と戦ってもらいたい。ジオン国民の士気高揚に役立つ。ジョニー・ライデンはいれ。」
とびらが開くと、名高い英雄真紅の稲妻ジョニー・ライデンが姿を見せた。
「よう、お前が黒い竜巻か。俺がジョニー・ライデンだ。よろしくな。」
「始めまして、お目にかかれて光栄です。」

「艦内にいるものに次ぐ。今すぐ作業を止めて艦橋にあがって来い。黒い竜巻と、真紅の稲妻の戦いが見えるぞ。」
イシガヤはそう言うと手元のスイッチを入れる。それにより、モニターには宣伝用の映像を取るカメラから直で映像が映るようになる。

「敵機捕捉。タイプ MS1４Ａゲルググ専用機。自機残弾、マシンガン１２００、ビーム

砲１６、グレネード２.」
　ブラック少佐は始めてゲルググタイプに乗るが、あまり心地がいいものではなかった。やはりザクタイプの方があっているらしい。ただ、操縦は問題なくできそうである。はじめての実戦でザクを駆り多くの戦果をあげているのだ。
　「キシリア少将、準備できました。いつでも構いませんよ。」
　ジョニー・ライデンがいう。彼の機体は彼専用機であり、すでに数回の実戦をこなしている。ブラックの機体よりも性能はよく、さらに彼の身体に合わせた整備も行われている。ブラックに負ける要素はなにひとつ無いのだ。
　「準備完了。」
そう返事をするとホイッスルが流される。
　「・・・。」
　その直後、ブラック機からビーム（破壊力は無い）が放たれる。初弾であったため大きく外れるが、それにより銃の癖が分かる。彼ほどのパイロットともなれはそれができるのが当然である。一方ライデン機は最大戦速で接近する。彼の得意とする戦法は中距離及び接近戦からの一撃離脱なのだ。遠距離からの撃ち合いは望むところではない。ブラックは迎え撃つように機体を低速で後退させる。その間に二発のビームを放つが、掠りもしなかった。
　「流石だ・・・しかし。」
　ブラックはマシンガンを構える。中距離にはいり次第一斉射撃を開始し、弾幕によりダメージを与える策なのだ。予測される時間は、約７秒。それ以後は接近戦に持ち込まれる可能性が高い。よって、７秒間にどれだけダメージを与えられるかがカギである。
　「あいつ、待ち伏せか！しかしそうはいかない！」
　ライデンはブラックの行動を読みライフルを構える。無駄弾を撃つ気はなかったのだが、先ほどの射撃は正確であり下手に近付くと痛い目に合うのは目に見えている。牽制する必要があるのだ。
　「・・・！」
　ブラックのほうもライデンの思惑に気付く。そして、片腕のグレネードを構える。確かに破壊力は無いが、軽い爆発はするものだ。そして、最大戦速でライデン機に接近する。
　「・・・！？奴はなに考えてやがる。」
　先ほどは後退していたブラック機が今は最大戦速で接近しているのだ。キシリアにもらったデータでは、少なくとも接近戦ではライデンが勝っている。
　「・・・かかったか？」
　「くそ！やりやがった。」
　ライデンは、慌てて退避行動を取る。ブラックの放ったグレネードが、直前で爆発したのだ。どうやら、この距離でグレネードを狙撃したらしい。その爆発の煙幕で、ブラック機を見失ったのだ。
　「・・・」
　ブラックは、爆発から飛び出たライデン機を狙撃する。かなりの近距離である。
　「ちっくしょう！片腕がやられたのか？」
　コクピットに警告音が鳴り響く。彼がこの機体に乗って初めての大きな被弾である。被弾していない右腕でライフルを撃ち返す。どうやらブラック機のビームライフルに当たったらしい。
　「・・・ライフルが・・・しかし。」
　ブラックはマシンガンを構えなおす。どちらかといえば、マシンガンのほうがなれているので問題は無い。ただし、破壊力の低下は著しい。

「中距離戦は危険だな。接近戦でたたくしかないな。」
ライデンは再び接近する。シールドが使えないのは痛いが、接近戦に持ち込まないと少々危険である。接近戦なら、機動力も反応速度もこちらの方が上なのだ。さらに、腕においても上であるはずだ。
「・・・接近戦は避けたいが・・・。 3秒か・・・。」
ブラックはその少ない 3秒中もマシンガンをぶち込む。ライデン機にそれなりのダメージを与える事には成功しているが、どれも致命傷ではない。すぐに接近戦が開始される。
「すっげー！艦長、あの二人は化けもんですか！」
ナリッジが感嘆の声をあげる。他のものは、あまりの事に言葉も出ないようだ。
「あれがエースの戦いだ。お前等も良く見とけよ。」
そう言ったイシガヤ自身もこの模様をじっと見続けている。
「もらった！」
ライデンはビーム長刀を一閃するが、ブラックは右腕を犠牲にして自機を助ける。そして、左腕でマシンガンを放つ。ライデンの頭部に直撃したようだ。しかし、ライデンの長刀によりマシンガンも破壊される。左手で長刀を構えなおすが、不慣れな接近戦である。
「・・・やられるな・・・。」
ブラックがそう言った瞬間、彼の頭を何かがよぎる。
「こなくそ！」
ライデンが振り下ろした長刀とブラックの長刀が交差し、その両方が吹き飛ぶ。そして両方が長刀を拾いもう一度振り下ろしたとき、勝負が決まった。
「引き分けか？」
キシリアが側近に問い掛ける。彼女の目には、同時に直撃を食らったように見えたのだ。
「いえ、 0, 3ですが、真紅の稲妻のほうが先にダメージを与えたようです。しかし、信じられません。あの若者、無改造のゲルググであそこまで赤い稲妻と遣り合えるなんて。もしかしたら、赤い稲妻より強いのではないですか？」
「そうだな。奴の方が強かろう。さすが NTだな。」
「ですが、赤い稲妻も NT部隊ではないですか？」
「いや、あれは NT候補生とでの言ったところだ。 NTではない。」
確かにジオン軍の NT部隊は大半が NTではない。ただ、戦果の多いパイロットなどを集め、 NTへの覚醒を期待しているのだ。また、 NT部隊がある事を国民に宣伝することにより戦意の高揚を狙い、また、連邦軍への威嚇も狙っている。
「ブラックを呼べ。」

「ブラック少佐入ります。」
「そこに座れ。お前にもうひとつ頼みたい事がある。」
「了解しました。」
「先ほどの戦いよく見せてもらった。貴様の腕があれほどとは思わなかった。そこでだ、現在のお前たちの任務は、第４０小惑星基地での修理後、ア・バオア・クーに向かうというものだが、そのあとのことだ。私の予想では、２９日頃にはア・バオア・クーで戦闘があるはずである。その戦闘後貴様はグラナダに戻り、私の親衛隊の司令になってもらう。」
「・・・親衛隊司令ですか？」
「うむ。戦後の事も考えねばならんからな。イシガヤの推薦もあった、はっきりといおう。私はギレンを好かん。戦後になればギレンを除きたいと思う。そのための戦力として、貴様を使いたいとおもうのだ。どう思う。」
「・・・そうですか。確かに私もギレン閣下の政策には、少々疑問があります。」

「ほう、なにか？」
「・・・ブリティッシュ作戦もそうですし、ギレン閣下はあまりにも独裁者過ぎます。例えて言えば、信長といったところでしょうか？いずれ、味方に倒されると思います。」
「ほう、その時貴様はどうするのだ？」
「・・・人にもよります。できれば、イシガヤ達との相談の上どうするか決めるつもりです。」
「なぜそうする？」
「イシガヤの情報は正確です。・・・なぜかは知りませんが。・・・その情報によりそのものを見定めたいと思います。」
「そうか。その反乱者が私であればついてくるか？」
「・・・キシリア閣下が望むままに。しかし、武力衝突ではあまりに不利ですので、できれば戦後の混乱期に暗殺がよろしいかと思います。」
「私では、ギレンに勝てないというのか？」
「・・・はい。ギレン閣下の能力は異常と言って良いでしょう。キシリア閣下では、ほぼ確実に負けるでしょう。それと、政策はできるだけ仁政とする方がいいでしょう。家康のような政策をとれば、皆が安心して傘下に加わるかと想います。」
「・・・そうか。家康といったな、心がけよう。そういえば、貴様の先祖は伊達という日本の武将だったと記憶しているが？」
「はい。名字は祖父が変えてしまいましたが、私は伊達政宗の正室愛姫の息子、忠宗の血を引いております。」
「そうか、伊達は家康の部下の中でも飛びぬけていたな、その伊達が助けてくれるか。」
「微力ながら。」
「ではこれを受け取れ。」
キシリアは、ブラックに軍装品一式を与える。マントには大佐のマークが書かれている。
「これは？」
「私の期待だと思ってくれていい。腹心には、それに見合う階級が必要であるからな。伊達にではなくこれに見合うよう努力をしろ。」
「・・・心得ました。」

「おいブラック何処行ってたんだ？」
ドレンだ、キシリアのもとから帰ってきた彼の背中を小突きながらいう。ブラックのほうが階級が上であるのだが、今まで気にした事もない。
「・・・キシリア閣下のところだ。色々と任務を承ってきた。」
「ブラックさん、この後どうするんですか？」
「MSの補充を受けねばなるまい。第四十基地に向かう。」
「そのことですが、イシガヤのほうから届けられましたよ。」
ライに案内されて、ブラックは格納庫に向かう。
「ほう。」
ブラックは感嘆の声をあげる。新型であるゲルググ　Ｊがあったのだ。もう一機のザク改も改造されているらしく、通常機とは細部が異なっている。
「よお、ブラック。ドメスとドレン機をもらってきた。手配しといてよかったぜ。ブラックようのゲルググももらうつもりだったんだが、生産が間に合わなくて悪いな。」
イシガヤがブラックに言う。イシガヤとしては、開発部に手を回したのにゲルググがこない事が残念なのだ。
「それはかまわん。しかし、これはどうしたんだ？」

「まぁ、色々な。こいつのゲルググのスナイパーライフルは、ドメスように高精度の命中率を出せるはずだ。ついでに、ザク改のほうは格闘能力が向上している。ドレン向きの機体になっている。ついでに、お前さんように追加武装と改造パーツももらってきた。これで、反応速度が上がるはずだ。」
ブラックは、どうしたらこれだけのものをそろえられるのか気になったが、聞いたところで仕方がないので質問はしなかった。イシガヤの行動には、不審な点が多いのだ。

「よお、カスミ君。なんかあったのか？」
「ん、イシガヤ君。それが、お客さんが着たみたいなんだけど・・・。」
「ん～。誰なのか知ってるか？」
「いいえ、でもこっちに向かっているって。」
その時イシガヤの背中が軽くたたかれる。
「イシガヤ、久しぶりだなあ。元気だったか？」
イシガヤより、カスミ少尉の方が早く反応する。
「ジョニー・ライデン少佐。お、お会いできて光栄です！」
「ああ、可愛い子だな。イシガヤの彼女か？」
「えっ、いや、そ、そうではないですよ。お、俺の部下には勿体無いかと思います。って、ジョニー少佐じゃないですか。」
イシガヤが、しどろもどろになりながら答える。
「まぁ、そう言うことか。で、久しぶりだな。」
イシガヤは以前から彼と知り合いである。キシリアのもとにいたときに何度もあっているのだ。仲も、悪くは無い。
「はい、久しぶりですね。まぁ、食堂にでも行きますか。カスミ君も来るか？めったにない英雄のお越しだ。」
「はい。こんな機会は滅多にないでしょうから。」
カスミ君は少々興奮気味になっている。ジョニー・ライデン少佐はジオンではアイドルも当然なのだ。まあ、ちょっとしたやり取りをしている間にも食堂にはついた。
「おーいアリス、お客さんに飲み物持ってきてくれ。」
「ふーん、そうか。こいつがなあ。」
ジョニー少佐はカスミ少尉と話しをしていたらしい。どうやらイシガヤのことのようだ。
「俺がなんかしたのか？」
「お前、彼女を何回も助けたそうじゃないか。そんなにパイロット能力高かったっけか？」
彼の記憶の中では、イシガヤの操縦能力は平均よりやや上だっただけのはずだ。それなのに、ひとを助けられる事に驚いたのだ。
「助けたらしいが。って言うか、この前のソロモン戦ぐらいしか記憶にないんですよ。」
イシガヤの答えに、カスミ少尉が少しムッとした顔になる。覚えていないのが気に食わなかったらしい。
「カスミ君、そんなにムッとしないでくれよ。忘れたんじゃなくて、記憶喪失なんだから。」
「そういえば気になったんだけど、イシガヤ君って何か病気を持っているの？」
「いや、そんなはずはない。この前マリアに調べてもらったときも大丈夫だったし、フラナガン機関で強化された覚えもない。」
フラナガン機関という単語が出たとき、ジョニーライデンの表情が変わった。
「イシガヤ、お前そこと関係あったっけか？」
「ええ。前の所属場所とも関係はあったし、今もな。それに、一時期被験者としてもい

たことがありますよ。まぁ、戦争初期のことだでしたが。」
「それじゃあお前はニュータイプだったのか？」
ジョニーは驚きの表情をみせる。何せ、ニュータイプという人種にあったことがなかったのだ。それに、イメージとしては、最強の戦闘者というのがあったのだ。それと比べると、イシガヤはあまりにも弱いのだ。
「まぁ、驚くのも無理ないか。NT といっても、普通の人と大して変わらんからな。それに、俺の覚醒率はかなり低いからな。」
「イシガヤ君って、本当に少尉？」
何度も聞かれた質問をカスミ少尉がする。まぁ、ジョニー・ライデン少佐と知り合いだったり、試験機が優先的に配備されたり、NT 研究機関と関係があったりすれば仕方がないことだ。それに、ザビ家とつながりがあるのに少尉という低い階級も不自然である。
「う〜〜ん。君にだから言うが、俺は正式に軍には入っていないんだ。というより、ジオン軍に「タカノブ・イシガヤ」は存在しない。色々な極秘任務をするのに都合が良いからな。しいて言えば偽名で登録してはいるが、それは教えることができない。君の命にかかわる。」
「そんな！初めて聞きました！ところで、なにを操作しているの？」
イシガヤがテーブルの下で何かを操作していたのだ。
「ん、こいつか？盗聴されないように電波を妨害する道具だ。ともかく、今のことは内緒な。んで、そこに隠れてるミキ、ランス、ミレーヌ、その他数名！そんなところで盗聴しなくても良いぞ。済みませんが、俺の部下がお会いしたいそうなんで少しの間相手してください。赤い稲妻になんて滅多にお会いできませんからね。」
「あぁ良いぜ。」
「じゃあお願いします。んじゃあカスミ君、わり―が俺は用があるから行かなきゃなんねーから。またな。」
「はい。」

「ランス、更級の方はどうだ？」
「ええ、大体の調整は終わりました。ですが、スナイパーライフルはどうすんです？エネルギー充填だけで１５秒かかりますし、５射しかできませんよ？」
「ドメスなら５射できれば十分な戦果が上がる。しかも長距離戦でだ。だからゲルググにはついでにマシンガンでもつけとけ。」
「ですが、ドメス少尉ならマシンガンよりバズーカの方がよくありませんか？」
「任せる。」
彼はそう言い残すときシリアのもとに向かう。
「キシリア閣下、はいります。」
イシガヤは神妙にキシリアの部屋にはいる。
「閣下、単刀直入に申し上げます。シャア・アズナブルは処分した方がよろしいかと。」
「どうしたのだ。」
キシリアは尋ねる。現在シャア・アズナブルは充分役に立っている。もっとも、木馬との戦いは負けっぱなしだが。だが、シャアでなければあれだけの損害で済んだとは思えないのだ。
「シャアの事、不審に思ったことはありませんか？」
「それがどうかしたのか？」
「シャアは、キャスバル・レム・ダイクンです。キシリア閣下のそばにおいておくには危険すぎます。」

「だが、奴は使える。」
「ですが、部下のハロルドの調べによりますと、ガルマ殿の死にもかかわっているとのことですが。」
「なに！？」
「どうやらシャアは、ガルマ様を見殺しにしたようです。それと、ガウに偽りの情報を流したことも判明しています。」
「そうか。よく分かった。その件についてはこちらで処理する。ところで、ブラックのほかには NTはいないのか？」
キシリアの NT部隊には人材が不足しているのだ。エースを集めては見たものの、NT兵器を使えないため、予定する戦果があがらないのだ。
「残念ながら。ミキ少尉が多少覚醒する可能性もありますが・・・その可能性も１パーセントもないと思います。」
「そうか・・・。」
「はい。しかし、ブラウブロの有線サイコミュについてですが、改良して小型化すれば一般の兵でも使えるようになるんではないかと思います。」
「そうか。フラナガンに研究をさせる。」
そのとき警報が鳴る。
「キシリア閣下！敵艦接近中。マゼラン３、サラミス５の大艦隊です！」
「閣下、これで！」
イシガヤは急いで艦内に戻る。

「キシリア閣下の部隊は先に行くそうだ。ここは我々の艦隊とキマイラ隊で引き受ける。MS隊は、発進準備急げ。ライ、艦の指揮は任せる。」
「了解。ブラックさん MS隊指揮お願いしますね。」
「うむ。」
２分後、ブラック率いる５隻の艦隊から MSが発進する。計１５機の大部隊だ。続いてキマイラ隊からも１２機の MSが発進する。
「こちらジョニー・ライデン。先鋒は俺の隊が務めさせてもらうぜ！」
「了解。ですが、我が隊からもイシガヤ隊の３機をお付けします全機エースですので邪魔にはなりません。」
「あぁ。」
「こちらイシガヤ。カスミ、ミキ、キマイラ隊の後方を務めるぞ。」
「了解」
部隊は二分して戦闘を開始する。戦闘に不慣れなものの多いブラック隊が艦隊の防御を、手馴れたキマイラ隊が敵艦隊への攻撃をかけるのだ。
「レイチェル、敵機はいくつ出た？全軍に連絡しろ。俺らの索敵機のほうが優秀だ。」
「ええとですねぇ、ジムタイプ１８機、キャノンタイプ８機、ボール２０機みたいですよぉ。」
「レイチェルとかいったな。散開状況をこっちに回してくれ。」
ジョニー・ライデンの要請にこたえデータを転送する。彼女の口調はトロイが、仕事は他の兵より格段に速い。
「前機突入する。俺について来い！」
赤い稲妻は加速して敵に突っ込む。大半の味方は遅れてついていっているが、彼ひとりでも死ぬことはあるまい。
「ミキ、俺たちも行くぞ！カスミ君は後続で援護頼む。」

　イシガヤ隊も突入を開始する。他の兵と比べ、ジョニー・ライデンの動きについていくことができている。速度をあげることに恐れを感じてないのだ。ただ、イシガヤの動きは直線軌道を描きすぎている。
　「ついてきているのは５機か。よし、イシガヤ隊は左を頼む。俺の部下も１人つける。」
　「わかった。俺がかく乱するから、お前等がとどめをさしてくれ。すぐに他の奴もつく。」
　イシガヤがいつもどおり突っ込む。しかし、敵はここだけで１２機いるのだ。４倍の敵である。
　「・・・イシガヤさん、下に。」
　ドメスの通信を受け、イシガヤが下に下がる。
　「撃ちます！」
　その通信の直後、厚いビームの束が敵の中心に直撃する。艦砲以上の破壊力だ。それに直撃した敵が二、かすった敵も一機だ。そしての三機は完全に動きを止める。
　「すごい！」
　ミキ少尉が興奮気味な声をあげる。これまで、一撃で３機をつぶしたパイロットはいなかったであろう。二機ならまだしもだ。
　「イシガヤさん、ビーム砲の銃身が熔け落ちましたよ。」
　「何！改良の余地があるな。この戦いが終わってからなんとかすっから。代わりの武器を使ってくれ。」
　「了解しました。」
　「少尉！気をつけて！」
　その直後にイシガヤのシールドが敵のビームを防ぐ。意識してやったものではないのだが、運がよかった。
　「分かってるさ！」
　「そのわりに危なっかしいんだけど・：・・。」
　「ミキ少尉、そんなことを上官に言っては。」
　「いいのよ。あれくらい言っても。そんなことより自分の機体ぐらい自分で守ってよね！」
　そう言った瞬間爆発が起こる。キマイラ隊のフロイ軍曹の前方での爆発だ。彼を狙っていた敵機を、ミキ少尉が撃ち落したのだ。
　「・・・すみません。」
　とはいったものの、彼もなかなかのパイロットである。十二機のうち三機を落としている。全部で九機を落とした時点で敵は集結を始めた。すでに味方機も到着し始めている。
　「イシガヤ。敵の弾幕が厚くなったな。ついてこれるか？」
　「これくらいたいした事ありませんよ。ルウムに比べたら。」
　「お前じゃないに決まってんだろ。」
　「大丈夫。カスミ君もミキ君も俺よか操縦上手いですよ。」
　「じゃあいくぜ。」
　そのとき、
　「支援行きます。」
　ブラックの声がした後に、彼のはなった１７発のミサイルと５発のバズーカの弾体が、敵に炸裂する。集まった敵の半分以上は沈めたようだ。
　「でかい花火が上がったな！全機行くぜぇ！」
　混乱中の敵部隊に攻撃を加える。赤い稲妻は完全に敵を駆逐し、５分と経たず敵部隊を沈めた。

- 遊撃

　ソロモン戦からすでに２日が経っている。ブラック・ストーム隊は艦の応急修理も終わって現在キシリア少将と、他の三席はは別ルートでア・バオア・クーに向かっている。
　「ブラック、この戦争どうなるんだ？」
　ドレンが聞く。このところジオン軍は負け続け、あまりに勢力が弱体化し始めているのだ。ジオンの行く先を案じているのだろう。
　「そうですね、ブラックさんはどう思うんですか？」
　「俺も聞きたいですね。」
　ドメスとライもだ。
　「・・・勝つ見込みが全く無いわけではない。ただ、決定打が無いな。連邦軍の上層部は役にたたん連中だろうが、なかには優秀なものがいるらしい。それらを消すことが出来れば何とかなる。」
　「・・・無理だな。そういう奴に限って、警備が厳重だ。キシリア少将も暗殺を企てたが・・・失敗に終わった。」
　「どうした？」
　「いや、お前等の MSの改造と調整が終了した。そいつを届にな。」
　「うむ。」
　「イシガヤ、どっから来たんだ？」
　ドレンが聞く。イシガヤの気配を感じなかったからだ。
　「もちろんドアからだ。」
　「それよりイシガヤさん、私のスナイパーライフルは大丈夫ですか？」
　「ああ、お前さんは自分で整備できたっけな。確認しといてくれ。人手が必要ならランスでも送る。使ってくれ。」
　「分かりました。確認してきます。」
　「イシガヤ、俺の機体はどうなった？」
　「俺のとこで改造しといたからまぁ使えるはずだ。格闘戦に特化させといてあるからな。」
　「おう、あんがとよ。」
　「ところで、搬入された MSのデータを。」
　イシガヤがブラックにファイルを手渡す。
　「・・・ほう。」
　この戦力不足の時機になかなかのものである。更級にはドメス機とドレン機用の改造パーツと後期生産型のザクⅡ２機、春菜にはドムタイプの追加装甲と強化実験機のザク３機である。さらにア・バオア・クーにはドム６機と中期生産型のザク９機が三隻のムサイに積まれ、ブラックの指揮を待っている。
　「ブラック、色々コネを使ったんだが、これだけ集めんのが限界だった。ゲルググも新兵に渡すよりこっちに回せって言ったんだけどな。」
　「かまわん。これだけでも感謝する。」
　「そういってくれるとありがたい。」
　「ところで次の任務だが。」
　ブラックがイシガヤに手元のファイルを渡す。内容は簡単である。現在のルート上に進行中の敵艦隊のかく乱、足止め。しかし、イシガヤは黙ってしまう。
　「・・・ブラック、これは？」
　「キシリア閣下からの命令書だが？」

「・・・そうか。お前さんを買いかぶりすぎている気がするな。」
イシガヤがため息混じりにつぶやく。
「どうしたんだ？」
ドレンはその様子を不思議におもったらしい。大体、これまでの経験上、艦隊といっても最大五隻と言った所だろう。黒い竜巻の異名を持つブラックもいるし、他のパイロットもそれに引けをとらないようなパイロットぞろいである。現に、ついこないだの訓練中に、ドメスはブラックの機体をしとめている。だから、５隻くらいの相手なら何とかする自信はあるのだ。
「はっきりいうが、俺の情報ではこの先にいる艦隊ってのは戦艦約５隻に、巡洋艦約１０隻、その他約８隻に、パブリクタイプが１０数隻いるはずだ。ちなみに、２６日午前３時の時点での情報だ。」
「・・・今なんてった？」
「要するに、こっちの５倍以上の戦力の敵の足止めをしろって言ってんだよ。」
「・・・。」
言い返す言葉もないらしい。これでは死にいくようなものだ。
「ライ、大きめの紙とペンを。」
そういわれた彼はすぐに用意する。

「イシガヤの情報では敵の艦隊はこの位置より侵攻中のようだ。しかし、前方にはアステロイド　Ａがある。ちょうどムサイ二隻を隠すのにちょうど良いくらいだ。またそれより数キロ先にも MSを二、三機隠すのにちょうど良いくらいのアステロイド Bがある。作戦はこうだ。まず、アステロイド　Ｂ地点にドメスと私が隠れる。ドメスは専用のゲルググで、私はスキウレを使う。ついで、２隻のムサイはアステロイド　Ａに隠れる。ムサイはそこで機雷散布を広域に、また、私たちは射程に入った敵艦を狙撃する。」
「もし敵が MSを出した場合は？」
「私たちができるだけ落としながら後退し、艦についたと同時に撤退する。流石に５０機以上いる MSの相手はできないからな。」
「ですが、機雷とスキウレはどうするんです？」
「大丈夫だ。今俺がこの基地に一機だけあったスキウレと約２００基あった機雷全てを調達してきた。」
イシガヤが答える。
「どうやって仕入れたのですか？」
「まぁ汚い手だが、俺がキシリア閣下の直属、私兵だってのを利用させてもらった。」
「つーか、お前私兵だったのか？」
「まあな。」
私兵の中でも、特にキシリアの私兵は嫌われている。たいがいが、正規の手段を使わずに無理やり兵力を徴収したりするからだ。しかしイシガヤは全ての場合においてキシリアの命令書を提出しているし、また、代わりの兵力をまわしてくれるように上に頼んでいる。もっとも、まわしてもらえるとしたら試作機だろうが・・・。それでも今の戦況から考えれば十分である。さらに、それが無理な場合は司令官に賄賂を渡している。それゆえ、基地の司令官も快く兵力を分けてくれた。
「まぁ大体わかったけど、俺らは何してりゃあいいんだ？」
ドレンが尋ねる。彼らの仕事が無かったからだ。
「・・・待機だ。」
「そうか待機か・・・って、出番なしかよ！」

「そうだな。」
彼はしょぼくれて自室に戻っていった。
「艦隊はイシガヤに任せる。」
「了解。そういやぁ、閃光弾も作ってあるんだが使うか？」
「・・・そうだな。スキウレに積んでおいてくれ。」
「了解。」
「・・・では、作戦開始。」

「ドメス、敵艦の動きは？」
「まだ射程には入ってきません。ですが、イシガヤさんの作ったスコープはなかなかですね。」
イシガヤがドメス用に作ったスコープである。その性能とドメスの視力が合わさり、通常とは比べ物にならない。
「・・・」
「・・・」
数十分の間二人とも沈黙を守る。双方共におしゃべりな方では無いからだ。ドメスがブラックの写るモニターをみると、彼は読書をしているようだ。「平家物語」という本らしい。日本語でかかれた表紙が見える。共通語ではないが、少しかじった事があるのでこれくらいの漢字なら分かる。それに、日本の戦記であるであるということもだ。
「そういえばブラックさん、艦内にいくつ本を持っているんですか？」
「・・・ディスクとあわせて３２５３タイトルだ。」
「・・・」
人間ではないのかもしれない。
「！敵艦射程に入ります。」
もう一度モニターを見ると、すでに射撃準備が整ったブラックが見えた。その動作は速い。彼も遅れずに照準を合わせる。
「ドメス、最初のはやり過ごす。次の巡洋艦を狙う。その後で攻撃すればいい。」
「了解しました。」
・・・・・・
「撃ちます！」
ドメスはスナイパーライフルを放つ。それはサラミスのブリッジに直撃し、ほとんどの機能を停止させる。ジオン軍の中でも、五指にはいる彼の射撃は艦艇程度の動きなら、確実に直撃させる。それが例え通常のものなら掠りもしない程度の超遠距離でもだ。
「流石だな、ドメス。こちらの射程にはまだ遠い。次も頼む。」
ドメスは続けて攻撃を開始する。すでに次のサラミスを捕らえていたので対応が早い。ブラックが砲撃を開始するまでに三隻を沈めた。ブラックも攻撃を始める。射撃能力はドメスほどではないので、遠距離では直撃弾は与えにくい。だが、それなりの被害を与えている。
「ドメス、敵がここに気付いたようだ MSが出てきた。」
数十のモビルスーツから放たれる光を捉える。まともにやっては勝ち目は無い。接触までは約５分、ギリギリまで艦艇への攻撃を与えねばならない。
「春菜より入電、機雷散布完了との事です。ＭＳ隊は、Ａ３０２からＡ３０３の航路をとり帰艦せよとの事です。」
「了解、 3分後に後退する。それまでは砲撃。」
「了解。」

「エンジン出力すぐ上げられるようにスタンバイせよ！メガ砲は使わん、エネルギーの無駄だ。ミサイルは用意しとけ。更科にはドレンの発進準備をせよと伝えろ。こっちはミキの発進準備だ。出撃があった場合は、帰艦せず艦に取り付け。その後最大戦速で撤退する。」
「りょーかい。なんかあっても任しといてよ。」
「おぅ、頼むぞ。他のもんはしっかり休んどけよ。」
「イシガヤ君、そんなこと言っても戦闘中にしっかり休めるわけは無いじゃない。」
「そうかもなぁ、だが安心して休んどけ。カスミ君一人くらい俺が守ってやる。命に代えてもな。」
イシガヤは、珍しく力説する。
「お熱いねぇ、でもさあ少尉ぃ、あんた艦長なんだから私たちもしっかり守ってよね☆」
ここぞとばかりにミキが冷やかす。イシガヤは隠してるつもりらしいが、カスミ少尉に好意を持っていることなど、他のものには一目瞭然だ。分かっていないのは、本人たちだけだ。
「あっとまぁ、なんかあっても、もちろん艦全員の命を守ってやる！」
「・・・少尉、何かとってつけたようで、少々頼り無いんですけど。」
「うぉっ！ミネルバ、いつからそこに！」
「はぁ、少尉が来る前から居るじゃないですか・・・」
「・・・・・・」
「艦長ぅ、そろそろいいですかぁ、ブラック大佐からぁ、３０秒後にＡ３０３ラインにぃミサイルの一斉射頼むとの事ですう。」
いつも冷やかす側のレイチェルが、珍しく場を納める。
「何ぃ！フライト聞いたか！」
「もちろん最初っから聞いていますよ。なんせ、レイチェルが全部の回線つないでいましたから。」
「なんにぃぃぃぃぃぃ！！」
やっぱり茶化していたらしい。今までで一番たちが悪い。
「・・・レイチェル、本来なら謹慎ものだが、今は後回しだ。んで、フライト、砲撃頼むぞ。」
「分かっていますよ。アスカ、キッド、砲撃準備！」
「少尉ぃ、ですけど大佐の機体が射程内ですよぉ？」
「かまわん。撃て。」
春菜から１２発のミサイルが放たれる。それはブラック機の頭上を掠め、敵 MSの隊列に直撃する。素人が大半な為、ある意味教科書どおりの整った隊列であったので、隊列にミサイル群が直撃すると、凄惨な状況になる。ミサイルに直撃したものはもちろんの事、それをよけようとして味方機にぶち当たったものも大破するからだ。
「大佐から通信はいります。」
「ドメス機が被弾した。そちらに付く前に先ほどのを突破した敵に追いつかれる。」
「何機いる？」
「約１５．やれなくは無いが、後続にやられる。２機ほど出して牽制しろ。」
「了解。ミキ、発進せよ。ガトリングで遠距離援護。ドレンはドメスの着艦を助けよ。」
「分かったけど、ガトリングはあんま上手くないよ？」
「大丈夫。適当に弾幕はっときゃ良い。ドムはそのままカスミ機で行けよ。敵が射程に入ったら、弾幕張ながら後退して、ブラックたちが着艦するより少しだけ前に着艦しろ。」

「りょーかい」
ドムとザクは勢いよく発進する。
「ドメス、どうか？」
「私はたいしたことありませんが、やはり更級との接触時間には間に合いません。ブラックさんだけでも先に行った方が良いんじゃないですか？」
「・・・・・・それは出来んな。」
「なぜです？」
「・・・艦長としての判断では、優秀なパイロットは見殺しにするわけには行かない。一騎当千のパイロットは、今後の戦場においての多くの戦果が期待できる。お前なら、少なくともあと１００機は MSを落とせるはずだ。」
「しかし、このままでは敵の大軍に追いつかれます。」
「私とて、ジオンのエースの自覚はある。それに、ドレンとミキ少尉もじきにくる。あれも一騎当千のパイロットだ。機雷原を抜けてくる敵ぐらいなら何とかなるはずだ。」
「無謀ですよ。」
「私とて人の子だ。時には無謀にもなる。それに付き合ってくれる無謀な友人もいる。」
「英雄ドレン少尉参上！お前等無事か？さっさと尻尾巻いて逃げるぜ！」
ドレンが敵を牽制しながら突っ込んでくる。まだ少しぎこちない動きだが、敵兵よりは格段に動きがいい。
「ドメス、大佐、気をつけてね援護行くよ〜！」
ドレン気を掠めながらガトリングの弾が走る。直撃はしてないようだが、確実に敵の進行速度が遅くなっている。
「おまっ！俺に当てる気か〜〜〜！！！」
「何いってんの！あんたも少尉も殺したって死なないでしょ！」
「イシガヤなんかと一緒にすんな！俺はあいつと違って繊細に出来てんだ！」
「そんなことよりドメスと大佐、急いでね。敵に近付かれすぎると対空砲火だけじゃ逃げられないでしょ。」
「ありがとうございます。」
「そっかぁ、照れて俺を避ける事無いじゃないかっ。いやいや、ミキ少尉が俺に気があったとは。だが！俺はもっと家庭的な子が好みなんでな。すまんすまん。」
「それは無いと思いますよ。」
ドメスがドレンに言った直後、ドレンの機体についているシールドに被弾反応がある。
「今度そのとぼけた口聞いたら本気で撃つぞぉ！」
「怖っ！」
「お前等面白そうだな。俺も混ぜろ。」
スピーカーからイシガヤの声が聞こえる。続いて、
「少尉っ！戦闘中です。私語は慎んでください。いつもいつも・・・」
どうやらミネルバ少尉に怒られているようだ。そんなうちにも各機ムサイに取り付く。
「こちらブラック。全艦退却。春菜は機雷を投下しつつ退却せよ。」
そう言った直後閃光が上がる。イシガヤの作った閃光弾であろう。目をやられたパイロットは、一時的に追ってくることが出来ない。ゆえに何とか退却が出来た。

・　運命

「こちらキシリア少将旗下突撃機動軍第十四独立艦隊司令ブラック・スター。少将の命によりア・バオア・クーの援護に回りました。入港許可願いたい。」
「こちら管制塔。 IDナンバーは？」
「１００００００１」
「確認した。入港を許可する。」
「着いた、着いた。飯と酒だ。ドメス行くぞ！」
「待て。イシガヤからのデータによると、敵艦隊はかなり近くにきているらしい。艦内待機の命が出るはずだ。」
「だ～！んじゃあ、春菜にいくくらいはいいだろ？」
「許可する。邪魔だけはするな。」
「分かってるって。ドメス、ライ、いくぞ！」
ドレンは半ば強引に彼ら二人を連れて行く。目当ては酒と女だ。
「イシガヤ、酒と女を呼んでくれ！」
「・・・やだ。」
「なんだと～！」
「つうか、自分で用意してくれ。忙しいんだよこっちは。」
「じゃあぁ、私がぁ、お酌しましょうかぁ？」
「いやあ、お色気ねーちゃんは遠慮しとくぜ。」
色っぽく話し出したレイチェルを退ける。
「あっ、あのぉ、ドレンさん、私たちは艦橋に行ってるんで。」
ドメスと、ライはさっさと逃げる。女に慣れていないのだ。

「これは、クラウン中尉とロウゾ中尉。どうなされましたか？」
「いいえ、特に用があるという訳ではないのですが・・・ドレンさんに無理やり・・・。」
「それは災難ですね。食堂には色々ありますのでそちらにでも行かれてみてはいかがですか？私は用がありますので。」
ミネルバは艦橋に戻るようだ。
「ドメスさん、行ってみましょうか。」
とりあえず、更級にブラックが居るからには何の問題もないだろう。食堂に行っても見る。
「あら、ドメスと・・・誰だっけ？」
「・・・ライ・クラウンです。」
「わかっているわよ。冗談に決まっているじゃない。」
「ところでミキ少尉、何しているんですか？」
「見てわかんない？晩酌。」
「・・・まだ午前９時ですよ・・・」
「宇宙には朝昼無いからいーの。」
まあ、もっともではある。彼らも未青年ではあるが、暇なので飲むことにした。
「ミキ少尉、なんなんですこれ？」
「テキーラじゃない？」
普通の艦にはアルコールを薄くしたビールくらいしかない。しかし、この艦には普通の濃度のアルコールが幾種類もある。軍規違反ではある。それに、つまみ類もかなり取り揃

えてある。
「・・・これ問題ありません？」
「いーんじゃない？ドメスもそんなに気にすることもないじゃない。っていうか、ライもそんなところで呆然としてないで私の酌でもしなさい。」
ライの代わりにドメスが寄ってくる。
「ミキ少尉、これ、イシガヤさんの許可下りているんですよね？」
「っていうか、一滴も飲まないくせに集めて来たの少尉だから。」
「ナカサト少尉、イシガヤ艦長はいったい何者なんですか？」
「さあ？まあ、まっとうな艦長でないのは確かだよね。諜報部かなんかじゃない？もしくはキシリア少将の男だったりして。そんなことないかぁ、あの少尉甲斐性なんて無いからねぇ。」
「少尉、ですがそんな艦長で危なくありません？」
「あんたたち、少尉少尉って、私さっき中尉に昇進したんだから。勝手に格下げしないでよ。ほらぁ、ドメス、あんたも飲みなさい。」
「って、これテキーラじゃあ！」
「私の酌じゃあ飲めないっての！？」
ドメスが半ば強引に飲まされる。彼はあまり酒に強いわけでもない。そもそも、アルコールの薄いビールを飲んでいたミキ中尉がどこからテキーラを出したか不思議である。
「大丈夫ですかドメス中尉？」
「・・・ミキ中尉～。ヒック。なんでそんなにヒック。カッコいいんですか～。俺よりカッコいいんじゃあヒック。困るじゃあないですか！」
「ドメス中尉、酔っ払うと・・・」
「ってかライ！お前は何ミキ中尉の横に座っているんだぁ。・・・床が、床が回っている～！」
パタリ
ドメスが床に倒れこむ。
「・・・すみません。ドメスはつれて帰りますので。」
「えっ？ええ。お願い。」
直後、艦内に召集がかかる

「諸君、われわれは、ア・バオア・クーの裏面を死守せよとの事だ。この戦いがジオンにとって重要なポイントである。健闘を祈る。」
ブラックは各艦に通信を送る。
「だってさ。いいか、断っておくが、これは死を決意するための水杯ではない。しばしの別れを決意するための水杯だ。誰も死ぬんじゃないぞ！死んでも戦えなんて甘いことは言わない。勝って、生き残って今度は祝杯を交わそうじゃあないか！」
イシガヤ艦春菜では皆で水杯を交わす。たぶん旗艦更科でもやっているだろう。この二艦の艦長はともに日本人であり、その文化を好んでいるからだ。艦隊司令ブラック・スターなどは、兵法までもが日本のものの応用であるところが大きい。
「ブラック、艦隊の陣形はどうする？」
「基本は鶴翼の陣形。敵の出方によっては魚鱗の陣形で殲滅する。MS戦ではわが隊とイシガヤ、貴様の隊を中間におき、残りの隊は艦の直援をさせる。」
「はいよ。しかし、あの部隊がこの空域にくるようだ。本隊に遅れること三時間ってとこだな。NT候補は計四名。いずれもなかなかのパイロットらしい。赤い機体のパイロットがいただろ・・・お前知らないか？」

「・・・知っている気はするのだが？」
「・・・・・・知らないほうがいいだろうな。ところで、どう思う？かなりの敵をソーラ・レイで沈めたらしいが。」
「後五隻も貸してもらえれば、敵に大打撃を与えることができるのだがな。ギレン閣下もキシリア閣下も甘い。敵が混乱している今こそ撃破するチャンスなのだが。キマイラ隊は動かせないのか？」
「ああ、無理だってキシリア閣下が言ってた.」
「・・・しかし、・・・なぜ貴様はそんな機密を知ることができる？」
「企業秘密だ。」
「大佐、敵艦接近。通信を切ってください。」
「了解した。」
しかし不本意である。キシリアの息のかかった軍勢をあと十隻貸してもらえれば敵の前衛を殲滅する自信はあるのだ。伊達家を、独眼竜政宗の子孫を名乗るに十分な資質も持っているのだ。たかだか十隻の艦艇など彼の能力を戦国時代でたとえれば、少なくとも３万程度なら十分に采配出来るところをわずか２０００の兵を動かすくらいのものである。そもそも、ギレンに劣っているところは IQと政治能力、そして野望だけだとも自負している。
「敵艦発砲！突撃艇きます。」
「迎撃開始。まずは射撃戦で敵を誘い込み殲滅。MS隊も鶴翼陣形を取れ。」
「こちら春菜。大佐、こちらの索敵機器をそちらとリンクさせる。長距離のほうだけだけどな。」
「助かる。」
「敵 MS確認。ジムです。数１８.」
「ドレン、ドメス以外の我が MS隊とミキ中尉を伴ない敵を鶴翼陣形の中に誘い込め。」
「了解！！！」
このときをどれだけ待ったか。ソロモン戦で落とされた屈辱を晴らすときである。
「そこ！そんなに意気込まない。まだ始まったばかりだよ。」
「この俺がイチバンヤリとかってのをあげてやる。気にすんな。」
「却下。今回は鶴翼の陣で迎撃するんだから陣形を大事にして。ね、ドメス。」
「そうですよドレンさん。あんまり勝手なことしますと後ろから撃ちますよ。」
「チッ！しゃあねえな。そういえばなんでミキは軍なんかに入ったんだ？」
「呼び捨てにしないでよね！戦争さえ起こらなければ食べてくのに困らないなあ～って思ったのよ。色々資格も取れるしね。」
「ふ～ん。」
「来たよ。各機ある程度応戦したら本陣に戻って！」
ミキが采配を取る。通常の戦闘ならドレンが采配を取ったほうがいいのだが、策謀は苦手なのだ。今回は素直にミキへ采配を譲る。

「見事だな。」
「いかがなされました？キシリア閣下。」
「ブラック・スターの艦隊だが、見事な陣形に敵をおびきこんで撃破している。若い割りになかなかのものだ。ジオンであれほどの采配を取れるものは三人といまい。」
「いえ、キシリア閣下の御采配にはかないますまい」
「残念だがそれは違うな。私では到底かなうまいよ。ギレン閣下でさえもあやしものだな。あれが後２０年早く生まれていたら、オデッサも放棄せずにすんでジオンが早々負けることも無かったであろう。」

「マ・クベ大佐の件残念ですな。」
「デキン公王がソーラ・レイに焼かれたと言う件は本当なのだな？」
「残念ながら。」

「案外敵が多いな。」
「そうですね大佐。」
現在のところこの宙域はジオンの圧勝である。ブラックの艦隊以外にも二個中隊展開中であるが、ブラック隊の奮戦のおかげで損害は軽微である。ブラック隊の損害は今までにMS一機の損失と三番艦に一発のミサイルが当たったくらいである。
「ミキ中尉の采配、なかなかすごいですね。」
「うむ。私の策に忠実に従ってくれている。我が艦隊で最前線であれだけの采配を取れるのは私と彼女くらいだろう。」

「ブラック、やつらがきたぞ。俺は出撃する。」
「了解。私も出よう。」
「ミネルバ、ここが踏ん張りどころだ。何があっても艦を沈めるなよ。まあ、そう簡単に沈む春菜でもないが・・・。」
「ええ、わかっています。ご健闘を。」
「・・・死ぬなよ。」
イシガヤは全指揮下に回線をつなげる。
「諸君、今まで我々は一兵も損せず激戦を潜り抜けてきた。これは偶然ではない。諸君らの健闘によるものである。今回の戦いはいつにもまして激しいものではあるが、全員生きて帰還するように。勝てとは言わない、何があっても生き残れ。多少のことは、俺が責任をとる。諸君の健闘を祈る。」
そういって通信を切った後、カスミ君にワイヤーを伸ばす。直接回線なら盗聴される心配は無い。
「なぁ、カスミ君。俺は数え切れないほどの人を殺しておいて、こんなことを言う資格は無いのかもしれないが・・・・・・俺は、カスミ君のことが・・・好きだ。なんとなく分かるんだが、ジオンはこの戦、負けるだろう。だから、必ず生き延びてくれよ。火星のマハラジャ提督のところへの脱出路も確保してるから、何かあっても大丈夫だ。俺に何かあったら、そこに連絡すれば何とかしてくれるだろう。まあ、俺が死ぬこたぁ無いだろうが。」
「！　今なんて・・・。」
「かぎりなく　すみたる風に　みせられて　どこまで届く　のべの松風　なんて歌を考えてみたこともあるが、君と言う月だけはなんとしても手に入れたい。ツキを逃したりしたら、お先真っ暗だしな。戦争が終わってからでいい。考えてみてくれ。追伸、死なせはしないが、絶対に死ぬなよ。」
そういって通信をきる。
「一世一代の晴れ舞台。カスミ君の手前、そうそう惨めな戦をするわけにもいかんな。」
そういって、ドムを加速させる。戦法はいつもと同じで、自分が囮になっているうちに、カスミ、ミキの両名が敵にとどめを刺すといったものだ。
「敵の大将はマキタだったな。やつがあんな部隊を指揮しているとは・・・。しかし、昔馴染みだからって撃破するしかないだろうしな。歯がゆいもんだ。」

「マキタ中尉、敵機補足。どうやら、ソロモンにいた部隊です。」
「グフは？」
「いません。」
前回はイシガヤのグフに痛い目に会っているのだ。気にはなる。
「よし、全機突入、ブレイクとウェポンは僕に続け。レッド・スター中尉は敵後方の部隊をたたいてください。」
「分かった。赤い閃光の二つ名を持つ俺の力を見せ付けてやる。」

「大佐、赤い機体がイシガヤ隊を迂回してきます。迎撃を！」
「うむ。ドレン、ドメス、私に続け。動きを見ると、全６機すべてがエース級だ。気をつけろ。」
「了解！」

「カスミ、ミキ、敵はすべて NTだ。二機は俺が受け持つ、お前たちは協力して一機をたたけ！」
「だけど、少尉一人で二機受け持つのは危険すぎだよ。」
「大丈夫さ、俺は死なない。それに、今一機減らして見せる。」
そういって、かなり接近してきていた一機に、持っていたグフのヒート剣を投げつける。普通なら当たるものではないのだが、なぜか直撃した。敵の頭部と右腕がふっとぶ。
「た～まや～！じゃ無かった。少尉もなかなかやるねえ。じゃあ、こっちのほうは任せておいてよ。」
「ああ、頼む。」

「ウェポン大丈夫か！」
「ああ、何とか。中尉、すみませんが撤退します。」
「了解。」
いきなりである。そして彼は直感する。今のはグフのパイロットだと。普通のパイロットなら、こんな常識はずれの攻撃はしないはずだ。
「イシガヤ・・・だな。」
そのとき通信が入る。
「よく分かったじゃないか、マキタ。いや、堕天使、のほうがいいかもしれんが。」
マキタの仇名である。連邦軍ではエースが比較的少ないのだが、彼の撃破数は今日までに３１、なかなか驚異的である。
「なんで！」
「戦争だからな。俺はなんとしても守りたいやつがいる。だから貴様を撃破する。」
「友達だったじゃないか！」
「それが戦争と言うものさ、それに、恋は盲目って言うしな。俺にとってはなによりも優先する。だから貴様を通すわけには行かない。」
マキタが動揺しているうちにマシンガンを乱射する。戦闘ははじまっているのだ。容赦はしない。しかし、マキタもまたエースパイロットである。イシガヤのマシンガンの弾が直撃することは無い。が、しかし、慌てていたためにシールドを失ってしまった。
「手加減無しか・・・それなら！」
マキタもライフルを放つ。正確な攻撃だが、イシガヤのシールドに攻撃を防がれる。ゲルググのシールドだ。対ビームの効果は大きい。
「かかった！」

イシガヤが手元のボタンを押し込むとマキタ機の周辺で爆発が起こる。小型の機雷だ。
「こなくそ！」
マキタ機の片足に被害を与えたはいいが、イシガヤのほうは左手の肘から下が打ちぬかれる。さすがに NTである。
「やるぅ！」
「お前もな！だけどなぜジオンにいる！」
「もともとジオンだったのさ。１３の時、諜報の訓練のために地球にいたが、表向きには留学って形で降りていたからな。そうでもしなけりゃ、そうそう地球にはいられんだろ。しかしマキタ！何でお前が MSを駆っている。普通なら、後二年くらいで士官学校卒業して、親父のコネ使ってエリートコースまっしぐらじゃあないのかよ。」
「・・・その父さんの敵討ちさ。一月三日、父さんはシドニーにいたんだ。」
「そうか。まあ俺の親戚もすべてそこにいたがな。おかげで天涯孤独の身の上だ。しかも、そのコロニーに毒ガス入れる手伝いしていたのは俺ときている。しかしな、敵討ちなどくだらん。死人は帰ってきはしない。」
「黙れ！」
マキタ機のサーベルが、イシガヤ機のマシンガンを薙ぎ払う。
「この程度！」
イシガヤは閃光弾を投げる。いくら MS のコクピットにはフィルターが効くといっても、至近距離の閃光には対応しきれない。うまくいけば数秒間敵の目を効かなくできる。
「無駄無駄ぁ！」
閃光をシールドで防ぐ。

「・・・閃光弾か。・・・ドレン、お前は左翼に回ってくれ。ドメスは中央で砲戦の指揮を頼む。われら以外は皆素人だ。」
「任せておけ。俺がきっちり敵撃破してやるから。」
「ですがブラックさん、艦のほうは良いんですか？」
「更科はライが十分に指揮を採ってくれている。問題ない。むしろ・・・今から来る赤い機体が問題だ。一騎討ちがお望みらしい。本来なら味方を伏せておきたいところだが、手勢が少ない。私が引き受けよう。」
「分かりました。中央の援護に向かいます。」
「さて・・・。」
赤いジムからビームが放たれる。避けねばならないほど正確な攻撃ではない。ブラックのほうもミサイルを三発放つ。かなり正確な攻撃だ。
「黒い奴やるな！だが接近戦なら！」
最大速度で突っ込んでくる。バーニアが改造してあるのだろう、通常機より早い。
「弾幕を張る余裕もないか・・・。」
ブラックはサーベルを構える。本来ザクにはヒートサーベルが付いているわけではないのだが、イシガヤが勝手にくっつけたのだ。斧よりは使い勝手がいいのは確かだが。
「くたばりやがれ！」
レッドがサーベルを振り下ろす。彼は、祖父に幼いころ教えられた剣術を MSにも応用している。だが、癖もそのまま出る。上段の攻撃をするときに、剣先がぶれるのだ。普通の相手には剣が二本にも見えて有効であったのだが、兄には見切られて剣先をかわされた後左肩に突きを入れられたものだった。
「この程度・・・」
ブラックは、剣先をうまく交わした後ジムの左肩に突きを入れる。

「何！兄貴以外には見切られたことの無い俺の攻撃が！」
「この動き・・・。」
「兄貴か！」
「レッドか・・・。」
お互いに戦っていた相手に気付く。だが、戦闘に手加減することは一切無い。レッドは、兄であるブラックをコンプレックスから憎んでもいたし、ブラックはブラックでレッドの兄である前に、ジオンの艦隊を任せられている軍人なのだ。弟の一人や二人にかまうことなどしない。レッドは、そういう兄の性格に嫌悪を抱いてもいる。
「手加減なしかよ！兄貴も NTだったとは・・・。だけどな、兄貴には死んでもらうぜ！」
レッドは全ての周波数で通信を送る。こうすれば、相手に聴く気があれば聴けない事も無い。
「織田信長も、毛利元就も、先祖であった伊達政宗公も弟を斬っている。手加減などすまい。」
「意外だな。返事してくるとは。兄貴は昔からそうだ！人として恥ずかしくないのかよ！」
「軍人とはそういうものだ。」
「そうかよ！」
「おじい様に六韜、三略などの軍略書を学び、剣、弓、槍、重火器、馬術を学んだ。戦闘の中で生きるしかあるまい。」
ブラックはマシンガンをばら撒く、ただ、レッドの回避力は並外れている。そうそう当たるものでもない。ブラックは、レッドの並外れた反射神経を知っているので期待はしていなかったが、それでも距離をとれたのは幸いである。銃撃戦ならそうそう負ける気はしない。接近戦では、かつての剣術の試合から考えると危ないものがある。勝率は五分だったのだ。
「親父も兄貴もなぜジオンにいる！あの時、コロニー落としの日にばあさんはサイド２にいたんだぞ！それを殺したのはザビ家だ！スター家はあれだけザビ家に尽くしてきたのに、ジオンの中枢に付けようとはしなかった。その結果が、スター家の没落だ！」
「しかし、連邦よりはましであろう。キシリア様なら、そこそこの帝国を作る事も不可能ではない。」
「連邦ではな、キシリアなんて極悪非道で通っているのさ！」
「覇王とは時に非道であるものだ。お婆様にしても武門の家に嫁いだのだ。主家のために死ぬ事も本望であろう。」
「押付けはやめろ！他人のために死んで喜ぶ奴なんていないさ！」
「それは違うな！」
彼らの戦闘宙域に二機の MSが侵入してくる。ドムとジムだ。
「！？誰だ！」
「ジオンの子悪魔とでも名乗ろうか！好きな奴を守るためなら本望だ。ここでお前らを通すと仲間が死ぬ。なら俺はかまいはしまいさ！」
イシガヤのドムがレッド機の近くに来ていたマキタ機のジムに組み付く。
「マキタ、ここでお別れだな。死ぬなよ！」
イシガヤのドムの爆発にジムが巻きこまれる。ブラックは、それに気をとられたレッドに弾丸をぶち込む。
「っ、やられた！マキタ大丈夫か？」
「なんとか。けど・・・艦に戻れそうにない。」
「撤退するぜ。つかまれ。」
ジムは後退する。さすがに戦闘は難しい。

「・・・イシガヤ、生きているか？」
しかし通信はない。あの爆発では生きている可能性は薄い。
また後方で爆発が起こる。
「大佐、援護頼みます。敵の増援です。」
「ちょっとブラック！うちの少尉の通信が切れたんだけど！」
「イシガヤは墜ちた・・・。生死は分からんが・・・。・・・死んではいないと思う。」
「あんたが言うなら、間違いなさそうね。聴いた？MS隊は艦の直援にまわって！MS隊の采配は少尉に代わって、私が取るから。ミネルバは、更級の支援。更級の被弾状況が大きくなっているよ！」
「分かったわ。でも、少尉は本当に無事なの？」
「まあ、ブラックは NTなんだし、少尉はゴキブリ並みの生命力持っているから死なないでしょ。シオンは MSが壊れて艦に戻ってたよね。カスミちゃんに変わって出撃して。リンとナリッジはそのままね。ちょっと！ドメス、ちゃんと支援してよね！」
ミキ中尉がてきぱきと指令を出す。いざとなると女のほうが腹が据わるというのは本当らしい。ブラックも、彼女の采配に感心する。
「ブラック、大丈夫か？」
「うむ。イシガヤに助けられたな。ドレン、状況は？」
「ああ、俺の隊で前衛を守っているが、厳しいぜ。まあ、俺は２８機も撃墜しちまったけどな。」
半端ではない。彼は短期間にかなりのエースパイロットになっている。多分、赤い稲妻とほぼ互角程度には戦えるだろう。

「ブラック・スター。聞こえるか？」
ついに MSが動かなくなって艦に戻っていたブラックに、ア・バオア・クーから直通回線がつながる。
「いかがなされましたか、キシリア閣下。」
「ギレンを討った。しかしながら、連邦の攻撃が激しくなっておる。何とかならんのか？」
「早計でしたな。ギレン閣下でなければ、ここは守りきれなかったでしょう。キシリア閣下ではなかなか難しいかと思われます。ここは機を見て撤退なされたほうがよろしいかと。本国とグラナダの戦力を、私に貸していただければここもソロモンも取り返して見せましょう。」
「分かった。撤退のときはお前に護衛を任せる。」
「しかと心得ました。」
ブラックは本気である。彼は、先祖に負けぬ采配を持っている自信があるのだ。伊達政宗といえば、一時は六年で百数十万石を奪い取ったほどの名将なのだ。生まれるのさえ早ければ、天下を争ったであろう。
「ライ、ここまで敵が多いと、水際で守ったほうが賢明であろう。艦を後退させろ。残存艦艇の春菜と桧月も続け。」
「了解しました。ドメス機も続け。桧月の MSは何機残っている？」
「こちら桧月、残機は二機です。」
「こちら、春菜です。こちらの MSは三機健在です。艦の被害も少ないので、我が隊が後退の支援を行いましょうか？」
「ミネルバ中尉頼みます。」
春菜の損害率はまだ一桁である。比べて他の艦は二十パーセントを超えている。この戦場では奇跡的といって良い。しかも、死者はまだ出ていない。イシガヤが行方不明である

のと、ナリッジ以下５名が軽傷を負っているだけである。
「大佐、敵艦接近！サラミス５、マゼラン１．MSも１８機、さらに支援機が３０.」
「機雷撒布開始。敵を近けるな！ドレン、ミキは、潜航して敵後方より攻撃。他は射撃戦で落とせ。」
「了解！俺様の腕、見せ付けてやるぜ！」
「隠密行動だから、派手に暴れるのは止めてね！」
彼らの行動を隠すために、砲撃戦が始まる。ドメスも、今回はマシンガン装備である。ライフル装備であれば、破壊力は高くはなるが弾数は少なく、倒せる敵が減ってしまう。
「シオン中尉、負傷したリン少尉に代わり、戦線に復帰します。カスミ中尉、ご采配を。」
「桧月の MS隊は、春菜より艦の装甲を利用した大楯で、私、シオン、ドメス中尉を護衛しなさい。数は多いですが、砲撃戦では引けは取りません。」
完全に役割を分担する。いわば、設楽原で信長が武田騎馬隊を打ち破ったのと同じやり方だ。まだ MS戦の歴史はないに等しく、やり方も、試行錯誤を重ねているところである。そして、現在の MS戦は、戦国初期から中期にかけての戦い方に近い。個人としての力量に頼るところが大きいのだ。そういう敵には、数こそ少なくても組織立った攻撃がものを言う。さらに、カスミ中尉の持つガトリングは、射程・弾数・破壊力共に抜群であり、ドメス中尉はジオンきっての射撃の名手である。シオン中尉にしても、この二人には及ばないとしても、そこいらのエースパイロットには、まったく劣らないだけの射撃の腕がある。
「敵もなかなかやりますね。私たちだけでも１００機以上倒してんですよ。ブラックさん、戦況はどうなんです？」
「キシリア様が脱出すれば、ここを放棄する。だが、戦力を立て直したあとで取り返すつもりだ。ソロモンもな。」
「出来るんですか？」
「問題はない。そのときはドメスにも一隊を担ってもらうつもりだ。そもそも、私、イシガヤ、ライ、ドメス、ドレン、ミキ、カスミ、ミネルバ、シオンなどという、一軍の将となりうる人材がそろっているのだ。それぞれに相応な部隊を附して攻めれば、落とせない要塞もなかろう。」
前方で爆発が起こる。どうやら敵艦が沈んだようだ。
「なかなかやる。」
「大佐、通信です。」
「これより、キシリア様がザンジバルにて退却をなさる。貴公らは護衛を務めよ。」
本部よりの通信である。しかし、現在退却するのは危険である。
「まだ早い！正面の敵が片付いておりません。もう少しお待ちを！」
「やってみせい！」
キシリア少将も無謀である。正面に数隻の艦艇とＭＳが多くいるのだ。ザンジバルで切り抜けられるほどの敵でもない。しかも、正面の一隻には、強い力を感じる。おそらく、レッドの乗る艦であろうが艦長もまたＮＴらしい。
「しかし・・・イシガヤもいないのにこの状況で撤退とは難しい。奴なれば、この状況での殿をうまく務めたであろうが。」
イシガヤの艦は、なぜか直撃弾が少ない。さらには色々と小細工を使い敵の足を止め、混乱させることが得意である。通常戦闘ではそこまで強いわけではないが、殿、奇襲においてはかなりの才覚があり、また、諜報においてはいざ戦闘をするときには欠かせない能力を持っている。ブラックの作戦立案も、イシガヤの諜報のデータをもとに立てられている。
「桧月撃沈されました！」

「こちら春菜、現在生存者の救出中。爆発前に３２名の脱出艇を確認しています。イシガヤ少尉の命により、生存者は春菜に収容します。」
「イシガヤが居るのか？」
「いえ、常日頃から、生存者は何であれ不沈艦である春菜に収容せよといっていましたので。」
「よかろう。」
イシガヤもよくやる。春菜は絶対沈まないという迷信を植え込むことにより、隊員の士気を挙げているのだ。それに、現にイシガヤ艦の死者はゼロ名である。あいにくと、自分には出来ない芸当である。
「ライ、敵の動きはどうなっている。たとえザンジバルが出てきてもなかなか突破は難しい。」
「敵はマゼラン１、サラミス１です。しかし、我が方も MS隊は全機帰還して、補給しなければならず・・・」
「しかも使える機体は、ドメス機、カスミ機、ミキ機のみか・・・」
「こちら春菜、敵艦の通信を傍受。敵艦隊は特攻をするつもりです。」
「何とか砲撃で沈めよ！敵艦橋のみたたけばよい。」
とは言っても、春菜のメガ砲は二基、更級には一基しか残っていない。敵艦を沈めるのは大変である。
「ブラック大佐、ザンジバル出港します。」
「くぅ！更級、反転９０度！」
直後サラミスからメガ砲が放たれる。ザンジバルを狙ったものだ。しかし、その粒子の束は更級先端に突き刺さる。ブラックは、ザンジバルを助けるためにそうしたのである。
「こちら春菜。更級、大丈夫ですか？マゼランは撃破いたしました。MS 隊出撃準備完了しました。」
「そちら更級、戦闘続行不能。生存者の救助頼む。しかしまだサラミスが残っているためそちらを！」
しかし、すでに遅くサラミスから放たれたメガ砲がザンジバルに突き刺さる。その粒子は、すでにシャア・アズナブルによって暗殺されたキシリアの体と多くの将兵の魂とを共に蒸発させた。ここに、ザビ家の独裁が終わりを告げた・・・・・・。
「春菜反転、グラナダへの退却へと移る。総員、キシリア閣下の魂に敬礼。」

宇宙世紀００８０・０１・０１　一年戦争と呼ばれた戦いが終結した。ジオン公国は連邦軍に敗れ、ジオン共和国へとその姿を変える。その過程において、ゲリラ勢力が共和国要人を監禁するという事件が起きた。そのとき一時的に結成された共和国防衛隊の中に、漆黒の MSと、宇宙戦闘をするグフが確認されてはいたが、戦後の混乱により資料が残っておらずパイロットの確認はされていない。そして、ジオン・連邦共にかなりの勇名を馳せたブラック・スター大佐の資料は MS撃墜８８という以外ほとんど消去され、キシリア・ザビ少将の遺品の多くも紛失していることが確認された。どうやら、ザビ家、特にキシリアに近い筋のものが持ち出したものと思われている。黒い竜巻は、戦後資料不足から長い間語られることがなかったパイロットである。しかし連邦軍の一部では、あの赤い彗星でさえ比べる対象ではないと一時期はうわささされた。彼が１９歳という異常な若さでありながら、大佐の地位までついていることは、彼の能力の高さが否応なく示されている。そして七年後、黒い竜巻は新たに旋風を巻き起こしたのだ。